
ダブルクロス・ノベル・ロア

想 詩拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダブルクロス・ノベル・ロア

【Nコード】

N5060Q

【作者名】

想 詩拓

【あらすじ】

現在と何も変わらない、少しだけ近未来。だが、その日常の裏では“オーヴァード”と呼ばれる、超常能力を持った者たちが戦いを繰り返していた。理性を失い、自らの欲望の求めるままに暴れる者。その超越したオーヴァードの能力をもって野望を果たそうとする者。そして、一般人の日常を脅かすそれらと戦う者。

江間市で起こった事件も、そんな事件の一つ。それは、とあるビルで起こった“ジャーム”の大量発生から幕が開ける。

Prologue (前書き)

・この作品はTRPG『ダブルクロス the 3rd Edition』の世界観をお借りして書いた小説ですが、このゲームをご存じない方にも楽しんでお読みいただけるはずです。

【参照】

【ダブルクロスThe3rdEdition（公式ページ）】

<http://www.fear.co.jp/dbx3rd/index.htm>

【ダブルクロス - Wikipedia】

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%96%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%83%AD%E3%82%B9>

・ストーリーはオリジナルです。

・キャラクターは一部、世界観の一部として『ダブルクロス the 3rd Edition』の公式キャラクターが登場します。

・この物語は当然フィクションです。日本を舞台としますが、登場するキャラクター、地名、団体名は現実に存在するものの何の関係もないことをお断りしておきます。

Prologue

勝負が決した時、その鬼は血走った眼を対峙する者たちに向けて叫んだ。

「何故だ！ 何故我が倒されねばならぬ！ うぬらも同じであるう！ 化け物ゆえに世から畏れられ、疎まれる！ そのような奴らをなぜうぬらが命をかけて守らねばならぬのだッ！」

鬼の目の前に立つのは検怪異使けがいしと呼ばれる、朝廷から遣わされる退魔師二人だった。一人は狩衣をまとい、もう一人は宮中の人間なのか、衣冠正しい装いである。鬼が人里に下りて暴れだしたときから懸命に追い、そしてとうとう今日、決着をつけるべく、月夜の明るい野原に誘い出したのである。

鬼の力は凄まじく、検怪異使達も苦戦を強いられた。しかし必死で動きを封じながら戦うことで、討伐まであと一歩のところまで持ってきていた。

鬼の叫びに狩衣の検怪異使が鬼の正面に立って答えた。

「……同じではない。確かに所詮は私も君と同じ“化け物”だ。しかし、君も家族がいて、彼らが私に狙われれば守るであらう。それと同じ。君は私の愛する隣人を傷つけたから私は君と命をかけて戦ったのだよ」

そして、止めを刺そうと鬼に近づいていく。

しかし鬼はまだ諦めていなかった。衣冠の検怪異使の術によって抑えられた四肢をあらん限りの力で振り回し、その枷を壊して、右の鋭く発達した爪を振りかざして彼に襲いかかる。

「我は認めん！ 強いものが弱いものを殺し、糧とする。これは生きとし生けるものの全ての理ことわりであらう！？ うぬらにそれをとがめられるいわれは……ないッ！」

繰り出した一撃は狩衣の検怪異使を捕らえた、かのように見えた。しかし、攻撃が当たった瞬間にその姿はかき消える。

「そのとおり、君は獣として何ら間違ったことはしていない。だが、人は違うのだ。力が強ければ上に立つとは限らない。体だけではない、心の強さ。金。知識。血筋。彼らを決める要素はあまりにも豊かだ。彼らは不思議だ。彼らは面白い。だから、私は彼らをもっと見たい。君に殺されるわけにはいかないのだよ」

その声は鬼の背後からかけられた。反射的に振り向くと、はたして狩衣の検怪異使がおり、その前に衣冠の検怪異使が控えている

「甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸

（きのえきのと ひのえひのと つちのえつちのと かのえかのと みづのえみづのと

一二三四五六七八九十瓊音

（ひふみよいむなやことにおと）

掛巻も畏き産霊之大神達の奇しき神霊に依りて

（かけまくもかしこきみむすびのおおかみたちのくすしきみたまによりて）

現出座る水の神彌都波能賣之命は

（あれいでませるみづのかみみづはのめのみことは）

汝此瑞津宝を以て 蒼生を鎮納よ

（いましこのみづのたからをもつて あおひとぐさをしづめおさめよ）

神通神妙神力加持

（じんづうじんみょうしんりきかじ）！

衣冠の検怪異使が祝詞のりとを素早く唱える間に、鬼の周りから破魔の力を帯びた神水がわき起こり、水蛇となって身体に巻きついた。荒々しい力ごと、鬼の体をさらに縛る。

「貴方の存在はすでに我々のそれと相容れられる存在ではないのです。……哀れに思いますが往生しなさい、“江間童子”えまどうじ」！

「おのれ、……！」

己の身を縛る術に対し、忌々しく江間童子が唸る。その声は低く重く、まるで洞窟にいるかのように周囲に響く。

「今の世は人の世。人の法に従えない者は受け入れられん。そして力こそが全てというなら、人は私が守るに値すると思う魅力が君の力に勝つのだ」

狩衣の検怪異使は右手に赤い炎、左手に青い炎を生みだした。

「輪廻の先でまた会う日もあるだろう、それまでさらばだ、江間童子」

そして、それを同時に放つ。青い炎と赤い炎は途中で合流し、二色の炎が螺旋を描いて鬼の体に命中する。すると、鬼の体は初めに

凍りつき、そして炎上して砕け散っていく。

「グッ、オオオ……！」

その現象は脇腹を中心に広がっていき、そして、心臓へと達しようとした時、鬼は天に向かって吠えた。

「クッ、認めん！ 真に強き者こそ、世の頂点に、立つべきなのだ！ それは……我だ！」

不意に、鬼を覆う瘴気が濃く、大きくなった。そして鬼はついてきた膝を立てなおし、再度立ちあがる。

「我は屈さぬ！ いかにくぬらが我を封じようと！ いかにくぬらが我を傷つけようと！ 我は絶対に滅びぬ！」

「……ッ！ まだあきらめんか……いいだろう、来たまえ！ 君の執念、砕き折ってみせようッ！」

その日、江間の野原に地獄の底から響くような咆哮と共に、一条の光の柱が空に伸びたという。

そして、その日を境に、鬼は二度と江間の地に姿を現すことはなかった。

そして時が流れること、約1100年。

時代は平成となり、その名にふさわしく、戦はなくなり、科学が進歩することで魑魅魍魎は語られることがなくなっていた。

もちろん江間童子も、例外ではない。

ごくわずかな記録や伝聞を除いて、その存在は忘れられていた。

そう、——ごくわずかな記録と伝聞、そして圧倒的な存在が残した爪痕を除いて。

昨日と同じ今日。

今日と同じ明日。

世界は繰り返し時を刻み、変わらないように見えた。

だが、人々の知らないところで、

——世界は大きく変貌していた。

——そして、歴史の裏で、変貌と戦い続ける者たちがいた。

- - - - -

ダブルクロス・ノベル・ロア

第1話 混乱を紡ぐ獣の呪歌

- - - - -

-
-

9月が終わり、日に日に風が涼しくなる10月の初頭。すでに半年をとにしたクラスにはぎこちなさは微塵も残っていない。クラス構成員はすでに3〜6名ずつ、自然にグループ化されており、休み時間にはグループごとに固まって、談笑する声が混じり合っている。

談笑の主題は放課後の予定、次の連休の予定、あるいは噂話。それは誰と誰が付き合っているという“恋バナ”の他、クラス社会に馴染めない生徒や、定期的に自分たちに余計な課題を押し付けてくる教師に対する陰口、それに稀ではあるが怪談や、都市伝説の類も交じっていた。

「お前、聞いたことある？ 中央商店街にあるオフィスビルには秘密の地下があるやつがあるんだってよ。エレベーターには表示されていないけど、足して13になる、ある組み合わせで階数ボタンを押すと行くことができるんだって」

「地下室くらいどこでもあるんじゃないの？」

「いやいや、もちろんただの地下室じゃない。行き着いた奴は死ぬか、気が狂うかするんだけど、まれに生き残るやつもいて、そいつは超能力者になれるんだって」

「あ、それおれも聞いたことあるな。地下室じゃなくて、江間神社の地下に隠された社殿って話だったけど」

「お前ら……、マンガの読みすぎだよ」

他愛も根拠も意義もないお喋り。それは、おそらく高校生には必要なもので、自然なものなのだろう。だが、自分には縁がないもの

だ、と萱嶋一樹かやしま・かずきは思っている。一樹にとって、休み時間は小用を足し、次の授業の予習をする時間だ。誰かに話しかけることもないし、話しかけられることもない。

一樹は人嫌いではない。仲の良い友達が作ればよいとは思っている。

しかし――

「あ……」

消しゴムを使った拍子にシャープペンが転がった。転がって転がって、先ほど都市伝説について話していた男子グループの足元にたどりつく。

「あ、そのオチ知ってるぜ、名前を忘れたまま十回聞くと――」

足元に転がってきたシャープペンの持ち主が一樹だと気付いた瞬間、そのグループの会話が一瞬にして凍りついた。

一樹は、立ち上がって、取りに行くとそのグループは「おい、そろそろ先生くるぜ」と、そこからバラけてそれぞれの自分の席に戻っていく。

ぼつんと残ったシャープペンを、一樹は静かに拾い、無言で席に座りなおす。

この通り、周りが一樹のことを避けているのだ。とにかく一樹に関わろうとすることを避けている。その“理由”がはっきりしているだけに、一樹は自分から積極的に動くことはできないでいる。

（中央商店街といえば……）

ふと一樹は鞆にあるものが入っているのを思い出した。

それはチラシだった。商品の写真と一緒にでかかと「。大
こ
い口しょうゆ お一人様一本に限り98円」と書かれている。

（学校がある分、近所の主婦には後れを取っちゃうんだよね……。

そして直接対決は絶対に主婦には勝てない。6限目終了から、本格的に混み合う夕方になるまでが勝負……！）

一樹の本日のメインイベントである。

江間市の中心であるJR江間駅。正面入り口からは北へまっすぐに商店街が伸びている。少し外れるとオフィス街になるのだが、ちょうどその境目には相談事務所系のテナントが数多くみられる。

志波徹（しは・とほる）のシジマ探偵事務所もその一つである。

志波は来客用のソファにこの上なく深く身を沈め、煙草を啜えながら新聞に目を通していた。目の前のテーブルには琥珀色の液体と砕いた氷が入ったグラスがかりと涼しい音を立てるたび、志波はそれを一口飲みくたす。

「志波ちゃん、入るわよ」

安普請の扉を開いて、一人の“男”が入ってきた。二枚目の顔立ちで、なぜかオネエ言葉を使うのがこの男の特徴で、長身とはいえずらりとした細身のせいかな、よく似合っているのでふざけているとも思われないらしい。

「スガノか。そろそろ来るころだとは思ってた」

スガノは関東地方で活動をしている情報屋である。事務所も構えずフリーであちこち動き回っているらしいが、商売は繁盛しているというのだから、腕は良いのだろう。実際にスガノは“能力的に一般人でありながら”この世界の“裏側”のこともよく知っている。

「飲むか？」

対面のソファに座るよう促しながら自分のグラスを鳴らす。

「あたし、昼間からお酒飲む趣味無いのよね」

「なら問題ねえな、烏龍茶だし」

「そこはフォア・ローゼスとかオールドとか飲んだくれときなさいよ!？」

志波は氷をグラスに入れると、オールドの瓶からとくとくと烏龍茶をそそいでスガノの前に置く。

「アルコールは苦手だな。でも、探偵としてはそれっぽいもの飲んでもおきたいじゃねえか」

「あんた案外、形から入る探偵なのね……って、まさか、その煙草も？」

スガノが指摘したのは、志波がずっと口に咥えていた煙草だった。ずっと気にはなっていたのだ。何しろ煙草ではあるが火は付いていないのだから。

「煙草吸うと寿命縮むだろ。事務所の壁、汚れるし。でも探偵としては、なんか口に咥えとかねえとな。チョコレートシガレットとかも考えたけどよ、あれって咥えてたら溶けたりするだろ」

「やさぐれ系探偵としては健全すぎるわ、あなた。向いてない」

向いてないと言われて、いささか気分を損ねた様子で志波はCD-ROMを一枚、スガノの目の前に差し出した。

「頼まれてた資料なら手に入ったぞ」

「わお、スゴイ。本当に手に入ったんだ、この裏帳簿」

スガノに頼まれていたのは、ある企業の裏帳簿だった。

表の帳簿は大赤字なのだが、会社会的に傾いている雰囲気がある。ということなので、脱税の疑いが掛けられていたのだ。この企業、脱税を前提に経営しているフシがあり、それで浮いた分他社より商品を安くしてシェアを奪っていたというのだから性質が悪い。法律を熟知したやり口が巧妙で、独禁法違反で取り締まられることもなかったらしい。

その証拠をつかむために税務署からスガノに証拠集めを依頼され、そのスガノに依頼されて志波がこの裏帳簿を件の企業から失敬してきたのである。

「ずいぶんセキュリティ厳しかったでしょうに。さすが『ブレイクスルー』」ね」

「ごくフツウの真つ当な企業だったんだ、あれならいつものように『セキュリティカット』と『壁抜け』で楽勝だった」

志波徹は「ブレイクスルー」の二つ名で知られている。それは彼が一種の超能力者であり、セキュリティシステムを無効化したり、壁を物理的にすり抜ける“能力”を持っているからだ。情報を仕入れるのはスガノのほうが上手だが、この“能力”のおかげで今回でいう帳簿などの証拠を手に入れる力は志波のほうがはるかに高い。手に入れる手段はやや、法律に抵触している……というよりハッキリ窃盗という犯罪行為なのであるが。

だから、証拠がどこにあるのかはわかっていて手が出せない、という状況の時、スガノはよく志波にその証拠の入手を依頼してくる。

スガノは、ノートPCを使ってデータの中身を手早く確認する。

「ん。間違いないわね。報酬はいつもの口座に振り込んでおけばいいかしら？」

「ああ。あと、アイツの情報は入っているか？」

これは、半ば形式化した質問だった。志波は報酬を少し低く設定している。その代りにとある人物に関する情報を集めているのだった。

きしま・しゅんぺい
木島俊平。かつて、志波の相棒であつた男である。数年前に事務所を開いたときは二人だった。だから探偵事務所の名称も志波の志木島の島の字をとってシジマ探偵事務所としている。だが、木島は現在、行方不明となっていた。数年前に調査に出たまま帰ってこない。

志波も探偵の端くれであるので、手がかりは全て辿ってみた。しかし、どれも木島の足跡が途中で切れていることを確認するにとどまるだけだった。

今では、スガノをはじめとした情報屋に木島俊平の情報などがあれば提供してもらえるように呼びかけている。

それを尋ねられたスガノは、ピタリと動きを止めた。

「まさか何か見つかったのか」

「……怒らないで聞いてね？」

「いいから言え」

「さっき見かけたのよ。すぐそこで」

さっき見かけた。

すぐそこで。

「いの一番に言えよッ！？ どこだ！ どこで見かけた！？」

対面するソファの間にあるテーブルに足を乗せ、身を乗り出して志波はスガノの胸倉を掴んで揺らす。

「く、苦し……、江間駅近くのシーレムビルに入って行ったわよう！ あたしがここに入る前だから30分位前！」

そのビルに用事があるとして、もうそろそろ出てきてもおかしくない。そもそももつと短い用事で終わっているかもしれないが。

「迷ってる暇はねえな」

志波はスガノを下ろすと、事務所を飛び出して行った。

静謐な空間だった。

境内を照らす青空は澄んでおり、柔らかな風が夏の間に青々と茂った鎮守の森の木々を揺らしている。

「平和だねえ」

拝殿への階段に腰掛け、何かを啄^{つば}んでいる雀以外に参拝客のいない参道を見つめながら上代法彦は漏らした。この江間神社の神主であるが、その装束は祭祀などでみられる礼装ではなく背広姿だ。

「いいことじゃないですか」

やや冷やかな声が横からかけられる。そこに立っているのは一人の女で、名を南野葉月^{みなみの・はづき}という。パンツスーツ姿で、髪は後ろでアップにまとめた清潔感のあるスタイルの持ち主なので、声と同じくらい冷たい視線も威力は大きい。

「ま、確かにいいことなだけどね。仕事少なくて済むし」

「その少ない仕事を投げ出してここにきているのは誰ですか」

ついに言葉まで冷たくなった。

「一応、神主^{しんしゅ}のほうが本業なだけどなあ」

「境内の掃除でもしてれば、文句は言わずにおこうと思ったんですけどね」

おまけに刺々しくなった。

上代は神主とは別に、とある組織の支部長という役職も兼任している。南野葉月はその組織での部下にあたる。どちらかというと管理をされているのは上司である上代のほうなのであるが。

「何もしてなくても組織はコストがかかるんです。こないだ遙ちゃんがジャームと一緒に電柱倒しちやっただでしょう。あれの修繕費と、情報操作工作費、ウチの支部、10日締めなんですから今日中に経費の計上をしていただかないとUGNからお金出せませんよ。まさかお賽銭に手を付けるわけにもいかないでしょう?」

「俺の引出しの力ギ、南野さんに預けてあるじゃない。代わりにハッコン押しといてよ」

まくしたてられるように言われるが、上代は全く動じない。そんな様子を見て南野はこれ見よがしに大きくため息をつく。

「目を通しておいてほしい書類もあるんです。最近UGNの財政、厳しいいんですから。お金の使い方とか、承認ルートとか結構監査されてるんですよ」

「ああ、アレね」

上代たちのUGNという組織は、最近、起きた大きな事件の解決にかんがりの予算を持って行かれた。さらに、その事件でスポンサーとなっていた企業離れも多くなり、財政は非常にひっ迫しているという話を聞いている。

おまけにUGNは生産的な活動で金銭を稼いでいるわけではない。個人、もしくは組織のスポンサーから寄付金を受け、公共的な活動をするNPO法人的な性格をもった組織であるため、スポンサー離れは直接活動に響いてくる。

そこまで説得されてようやく動く気になったらしい。上代は米袋

でも担ぐかのように、重そうに腰を上げると、ポケットに手を突っ込んで参道を鳥居に向かって歩き始めた。

その視線の先で、鳥居をくぐり、レスキュー隊を連想させる、動きやすさを重視し防弾チョッキを兼ねたベストを着込んだ男がいまにも転びそうな勢いで駆け込んできた。

「支部長おお!？」

「なんなの、高橋くんまで。厄介事なら要らないよ」

高橋と呼ばれた青年は、それじゃ何なら持ってきていいんすかと泣きごめいたつめき声とともに息を整えると、ガバツと顔をあげ、上司を大きな眼で見る。

「で、何？」

「た、大量発生しましたあッ!」

一瞬空気が止まる。何かを大きくすっ飛ばした報告に、後ろに控えた南野があきれてため息をつくのが聞こえた。高橋はいわゆる新人ある。それゆえに、真面目だが自信のなさゆえか突発的なトラブルに遭遇するとパニックに陥ってしまうのだ。

「何が？」

「じゃ、ジャーム! ジャームです!」

「いつ？」

「ひ、さっき? ええと、そう! ヒトナカヨシゴ一七四五時……でっす!」

ちなみにUGNに自衛隊のように時刻を読む風習はない。単に高橋の趣味が出たものと思われる。

「どこで？」

「中央商店街……のオフィスビル。シーレムビル……ですッ！」

「なんで？」

「わ、わかりません！」

「はい、よくできました」

つまり、いつ、どこで、何が、どうしたかをまとめると、「17時45分に江間中央商店街のオフィスビル『シーレムビル』において“ジャーム”が大量発生した。原因は不明」と、なる。後ろでペンを走らせる音がした。南野が状況をメモに書き留めたのだろう。現時点の情報としては十分か。

「ちなみに誰かもう向かってる？」

「いえ、ま、まずは支部長に報告をと思ひまして」

「別に俺に知らせず片づけてくれてもいいのに」

やれやれ、と肩を落とすとちらりと南野に視線を向ける。

「南野さん」

「はい。連絡ですね。遙ちゃん……“ウィザード”もですか？」

「ま、結構大ごとになっちゃってるみたいだしね。念のため」

相変わらず眠たげな眼を前方に向けて歩き始める。参道を抜け、鳥居をくぐると、上代は胸ポケットから煙草を出して、火をつけた。

「……ゆっくり行ったら、二人で全部終わらせちゃっててくれないかなあ」

「バカ言っでないで早く行きなさい」

胸一杯に煙を吸い込み、紫煙を吐き出す。

「大量発生……、ね。こりゃ誰か裏にいるかな」

放課後を告げるチャイムが鳴り、都立江間高校がにわかに活気を帯びた。帰路につく者、そのまま教室に残って遊びや雑談に興じる者、部活に駆け出していく者。

しんやき・はるか
城崎遙は強いて言えば雑談組に入っていた。いつもは帰宅しているところなのだが、今日はある人物に呼び出されて校舎裏にきているのだ。

用件は予想通りだった。

「あの、さ。最近、俺な……城崎のこと、イイなーって思ってさ、それで、……それでさ、城崎さえよければ、俺と付き合ってくれないか？」

遙にとって告白は初めてではない。誰もが認める器量良しで、成績、運動神経もトップクラス。加えてそれを鼻に掛けない性格は明るさも持っており、誰からも好かれている。よって、告白やナンパなどは遙にとって、よくあることの一つだった。

学校の噂では遙はすでに50人切りに達する勢いだそうだが、実際は高校に入ってから5人目だ。

「気持ちは嬉しいんだけど、……わたし、そういの、まだ考えてなくて。だから、ごめんね」

フツたのも5人目。告白してきた男子で魅力的に思える者がいなかったのも正直あるが、フツた理由はそれ以上に遙自身にある。

「……そ、そっか。まあダメ元で俺の気持ち伝えられれば、とは思

つてたから。気にしないでくれ。せめて、また明日から普通に接してくれよな」

告白してきた男子はそう言って気まずそうにそそくさと遙の前から去って行った。

「あ、遙出てきた！」

遙が校舎裏から出てくると、いつも一緒に帰っている智子と明美がやってきた。

「ね、どうしたの？」

「ううん、断っちゃった。やっぱりなんか付き合う気分になれなくて」

「うんうん。あの程度の男じゃ、あたしの遙はやれんのう！」

答えを聞いて、嬉しそうに頷いたのは、普段から「遙LOVE」を公言している智子である。とはいえ、同性愛的な意味ではないらしく、遙が男子と付き合うには構わないらしい。しかし、遙が苦しんだり悩んだりするのは我慢できないのだ、と智子は語る。

女性として平均的な体格をした遙より一回り小さい体で親みtainなことを言うこのキャラは背の高い明美と並んでクラスの名物的存在だ。

「でも、あいつ、3組の矢部だね。バスケット部で活躍してて結構かっこいいねって他の子が話してるの聞いたけど。結構レベルは高いんじゃない？」

明美が、智子が「あの程度の男」とばっさり切り捨てた男子を擁護するように言った。

男子と比べても背が高めなせい、時々遠くを見たままぼうつとしているように見える明美であるが、しかしその実かなり耳ざとく、他クラス、他学年の生徒の情報も大抵明美に聞けばわかってしまうため、クラス内では重宝されている。

「あたし的にはピンとこないのよね。確かにツラはいいし、運動神経もいいし、性格もまあ、悪くはなさそうだけど」

「これこれ、女の子が“ツラ”とか言わないの」

遥はたしなめるが、智子の言っていることは理解できる。今まで告白してきた男子も顔がいいのはいたのだ。そして性格、能力面でも特に文句はなかった。

ただ「ピンとこなかった」のだ。「なら、とりあえずお試しで」なんて言われても困る。友達として話している分には気持ち良い付き合いができるが、彼氏としてみると無理があるような気がする時点で終わり。遥はそう考えている。

——それに、その気があったとしても、遥には“恋愛ができない理由”がある。

「じゃ、どんな男子が智子にピンとくるのよ」

「あたしが思うに、少し変わったコがいいと思うのよね、遥には「変わったコ？」

「顔が不味くても、成績が悪くても、運動が苦手でも、貧乏でもいいのよ。はぐれ者でも、なんかキラリと光る何かを持っているみたいな」

勝手に人の好みのタイプを定義しないでいたきたい、と遥は抗議の声を上げたかったが、あまりにも智子の発言が的を射ていたので二の句が継げなかった。

そう、遙は恋愛を半ばあきらめながらも、やはり憧れはあり、待っている。自分のすべてを受け入れてくれるような人を。そして、そんな人はきつと“まともではない”。

「ね、今日カラオケ行かない？　そろそろ新譜追加されてる頃だし。あのCMの歌、入ってるかな」

「いいね、ここはあたしの坂本冬美をご披露しますか」

「智子、前から思ってたけどあんたの選曲洪すぎよ」

そうして談笑していると、遙の鞆の中に入れてある携帯が着信音を奏で始めた。

ちゃらりーん、ちゃらりらりーらー。

バッハ作「トツカータとフーガ 二短調」。某替え歌のおかげで人を天国から地獄に突き落とされる様が容易に想像できるメロディである。

「バイトの呼び出し？」

このメロディはある人物からの電話専用を設定しており、遙はこれを「バイト先から」と説明しているので、智子と明美はそのメロディが何を意味しているかをすぐに察してくれた。

「……そうみたい。ごめん、カラオケ行けないわ」

曲の雰囲気同様に暗い顔に落ち込んだ遙は、ごめんね、と手を合わせてその場から離れ、携帯電話の通話ボタンを押した。きつとジャームでも発生したのだろう。

「もしもし遙です。……え？　本当ですか？　……はい、すぐ向かいます」

ここから遙の非日常が始まる。

きっと自分にとって、非日常が現実で、智子や明美と過ごす日常は夢のようなもので、夢の世界を守るためには現実の世界で戦わなければならないのだ。

夕方の商店街は活気が戻る。たいていの町には大きめのショッピ
ングモールがあり、江間市も例外ではなかった。こうした昔ながら
の商店街はすたれ気味であるが、この商店街は数年前に外観の思い
切ったリニユールを行い、古めかしさを取り去ることで対抗し、
駅前という場所の利便さもあつて、行くには車が必要なショッピン
グモールを凌ぐ賑わいを見せている。

一樹は、奥にあるスーパーを出て、商店街のアーケードの下を歩
いていた。手には一本の醤油のボトルが入ったレジ袋が下げられて
いる。

特売醤油の合戦は凄まじいものだった。「特売」を目の前にした
主婦の勢いと執念は筆舌に尽くしがたい。あのパワーならトラック
の1台や2台、引っ張れるかもしれない。それでも一樹が醤油を確
保できたのはまさに行幸と言えよう。

（さて、父さんが仕事から帰ってくる前に晩ごはん、作っておかな
いと）

一樹には母親がない。話に聞いたところによると、一樹の出産
の際に、事故で亡くなつたのだと聞いた。

よって、一樹は物心がついたときから父子家庭だった。親子二人
の生活は、あまり暖かいものではない。父は一樹をよく思っていな
いらしく、それを隠そうとしていなかった。

もつとも、それには納得できる理由があるため、一樹は理不尽だ
とは思わない。生活費の面倒を見てもらえるだけありがたいと思い、
せめて家事は一手に引き受けている。

商店街の中心部であるアーケードを抜けると景觀にオフィスビルが混じり始めた。ここを真っすぐ進めば住宅地だ。その中に一樹が住む家がある。

そこで、一樹は腕時計を確認した。時計は午後5時半を少し過ぎたほどだ。6時には家に着けるな、と思った時、“それ”は始まった。

ひゅう、と一陣の風が一樹のいる通りを吹き抜けた。

かと思うと、あたりの空気が急に張りつめ、寒くもないのに、一樹の肌に鳥肌が立つ。

何だろうか、急に空気が変わったようだ。

どさり、と音がした。とっさにそちらに視線を向けると、人が倒れていた。大丈夫か、と声をかけようとしたとき、あたりを歩いていた町の人々がそろってその場に倒れてしまっている。

「な、何で……？」

何が起こったのかわからない。とりあえずこの場を離れなければ
と思い、一樹は走り出したが――

『少年。そこで立ち止まりたまえ』

――不意に、耳元で声をかけられた。

「えっ？」

驚いて、声の主を探そうと振り向いたとき、ドンッ、という轟音とともに目の前を爆発的な衝撃が走った。

ショックでよるめきながらも反射的にそちらに目をやると、オフィスビルの一つの入り口が見る影もなくなっていた。『SHEREM BUILDING』とアルファベット表記されたビルの看板はひしゃげ、その真下の扉は完全に失われており、その中からはもうもうと黒煙が立ち上っている。

あまり考えられないことだが、どうやら、オフィスビルは内部から爆破されたらしい。

状況がよくつかめず、呆然と現場を注視していると、ゆらりと立ち上る黒煙の流れが変わった。

（誰か出てくる……？）

避難してきたのだろうか。一樹の直感通り、煙の中からは3、4人の人間が出てきた。声をかけようと一歩近づこうとした一樹だが、彼らの表情が見えたたん、その足が止まる。

（なんかあの人たち、変だ）

ガシャーン、とガラスが割れる音が響き渡った。見ると、出てきた人間の一人が隣のビルのガラスを割っている。さらに他の一人は電信柱を素手で叩き折っていた。瞳は虚ろで、焦点が定まっていない。ただ、気の向くままに目につく者を壊している。彼らからはそのような印象を受けた。

（正気じゃない……？）

『うむ、完全に人間としての理性を失っているな』

「誰!？」

再び帰ってきた返答に振り向くが、やはり誰もいない。しかし――

『声を上げたのは良くなかったのではないかね?』

周辺に散って破壊活動を行っていた狂人たちが一斉に一樹に視線を向けた。まずい、今度の破壊活動の目標は自分だ。逃げようと後方を確認して驚いた。

いつの間にか狂人の一人が一樹の後ろに回り込んでいたのだ。

(まずい、囲まれた)

——狂人達が迫る。

連絡を受けた遙は、駆け足で現場に到着した。

騒動の中心と思われるビルまで50メートルになったところで空気が変わっている——すでに《ワーディング》が張られている——のが感じ取れる。それが敵のものか、味方のかは判別がつかなかった。

現場では、報告どおり“ジャーム”が十数体確認され、いくらかの破壊活動の痕跡も確認できる。

(死傷者は……)

遙が現場を一瞥する限り、見られない。しかしジャーム達の動きがおかしい。何かを取り囲んでいるようで、その中心には一人の男子学生が立っている。

「……萱嶋君!？」

クラスで見覚えのある顔に、思わず遥は声を上げた。しかし、彼は一般人のはずだ。なぜ、《ワーディング》の中で動いているのか。

(そんなことは後でいい、今は助けるほうが先!)

遥の判断は早かった。さらに走る速度を上げ、萱嶋一樹を取り囲むジャームのうちもつとも接近していた1体を力の限り殴る。

どこにどう踏み込み、そして体のどの点を狙うか、力学的、人間工学的に計算し尽くされた一撃は、遥の常人離れた膂力にさらに威力を加える。

殴られたジャームは短い悲鳴を上げて数メートル吹き飛ばされ、動かなくなった。

娠路上のジャームを片づけた遥は、囲まれていた萱嶋一樹のもとに駆け寄った。

「怪我はない、萱嶋君？」

「城崎さん……? どうしてここに……それに今のは？」

明らかに超人めいた力を見せられた一樹は戸惑いを感じているようだ。しかしゆっくりと説明している暇はない。遥は、かいつまんで要点のみ一方的に説明した。

「この世界はね、時々ああやって理性を失って、人外の力で暴れる人——ジャームが出てくるの。普通の人にはまず対処できない。それを退治できる力を持つ人もいるんだけど、その中の一人がわたし。ジャームが現れたって連絡を受けてやつつけにきたのよ」

説明をしている間に、遙は現状把握を行っていた。

ジャームは全部で14体。守りながら戦うには少し多い。上代支部長や“ウィザード”が同時に向かっているという話は聞いているので、ここは一樹を安全な場所に移動させることが先決のように思えるが、逃げたところをジャーム達に追われると、被害が広がりがねない。

一樹には申し訳ないが、少し付き合ってもらい、敵をひきつけておいた方が被害は少なくすむだろう。そう判断し、遙は一樹も含めて現場にとどまり、応援が来るまで持ちこたえる道を選んだ。

しかし、その判断を下した3分後、遙は猛烈に後悔することになった。

敵が増えたのである。しかも一気に60体にまでだ。次から次へと、いまだ煙の収まらない件のビルからゾロゾロと現れ、完全に遙達二人を取り囲む。

（な、何でこんなことになるのよ……！？ まさか、“ビルの中にいた人全員がジャームになった”って言うの？）

遙の経験上、これほど多くのジャームが一気に発生することはなかった。もつとも、15体出てきた時点でそれは言えていたのだが、もう逃げることもできないし、おそらくこの数相手では一樹を守り通すのは不可能に近いことだろう。この軽く絶望的な状況をよく把握できていないのか、一樹はあまり取り乱してはいないのは不幸中の幸いといえる。

ジャームの一団が遙たちに迫ってきた。ジャームは素手、あるいはどこかで拾ったらしい鉄パイプ、ナイフなどの武器を振り上げる。遙はとにかくクラスメイトは守り通さねば、と一樹の前に出て、攻

撃を受けるべく身を固くした。

しかし、その攻撃が届くことはなかった。遥と一樹の周りを、一匹の巨大な蛇がその半透明な身体で囲み、ジャームからの攻撃を防いだのである。

「……上代さん！」

「なるほど、こりゃ大漁だ」

現場に現れた支部長は、啞え煙草で相変わらず、やる気のなさそうに漏らす。

「上代さん！ アレ、お願いします！ 範囲攻撃できるヤツ！」

この大量のジャームを片づけるには、複数の的に一度に攻撃できる技が要る。しかし、遥にはそのような攻撃手段はなかった。しかし、助太刀に来てくれた上代ならば話は別である。

しかし、

「やだ」

遥の中で時間が止まった。

「……はい？」

「アレは面倒だからいやだ」

「ちょ、ちよっとちよっと、何を言ってるんですか上代さん！？ ジャームですよ、大量発生ですよ、えらいことなんですよ！？ 面倒もクソもないでしょうがッ！？」

予想すらしなかった拒絶の言葉に、遥は軽くパニック状態に陥っ

た。先ほどまで「女の子がツラなんて言っちゃダメ」と言っていた優等生モードも忘れ、口調も少々汚くなってしまっている。

もう、わけがわからない。いくら面倒臭がりとはいえ、この状況で範囲攻撃が必要なのは上代なら分かるはずなのに。

（ああ、常識の通じる日常の世界が恋しい……！）

若干現実逃避しかける遥の疑問に答えるように上代が言った。

「まあ、範囲攻撃なら俺より得意なヒトが来たからさ」

「おいおい、天下のUGNがジャーム退治を外部の人間に投げるのかよ。いい根性してるな」

また別の方向から、男の声が聞こえた。スーツにベストをかつちりと着こなしたその姿は見覚えがある。

「志波さん！」

探偵である志波徹は“オーヴァード”、つまり遥や上代と同じように常識を超えた力を持っている人間である。オーヴァードのことを知っている人間は非常に稀少なので、遥たちUGN江間支部は、事件の解決に調査が必要な場合、志波に依頼することが多い。

「ま、これも顧客満足度を上げる営業活動だから。俺達お得意サマでしょ？」

エフェクト

「この技、武器が壊れるんで俺もあんまり使いたくねえんだが」

「そのくらい、UGNで弁償するよ」

のんきなやり取りをしている間に、新しく加わった二人の戦力を少し遠巻きに眺めていたジャーム達が再び距離を縮め始めた。どう

やらいつまでたつても攻撃してくる様子がないので、脅威ではないと判断したらしい。

「ちっ、ぼんやりしてるわけにもいかねえか。上代、武器の弁償はキチツとしろよ」

「わかつてるって」

交渉成立、とばかりに志波は迫るジャームを見据えて構えると、懷から短刀を取り出した。短刀としては妙な刀で、刃より柄の方が長い。柄は、ほとんど

すつと短刀を正眼に構える。短刀の刃がするすると物理的に伸びてゆき、たちまち一振りの太刀と呼べる長さとなった。

「あんた達に罪はねえことはよくわかってる。だが、こつするしかねえんだ。行くぜ」

志波は駆け出すと、ジャームの一团に斬り込んでいき、集団の真ん中まで来ると、刀を逆手に構え、コンクリートの地面に突き立てる。

「勘弁しろよ」

ぼそり、と志波がつぶやくと、それに呼応するように刀がその身を震わせた。次の瞬間、彼を中心として数メートルの範囲内の地面のいたるところから刀の切っ先が飛び出し、ジャームそれぞれを刺し貫いていく。

数秒後、その志波の攻撃が納まったところには、彼の周りには一定の範囲内にいた30体のジャームが倒れ伏していた。

「す、すっい」

隣にいた一樹が、この光景に息をのむのが聞こえた。一般人の彼からしたら、いま起こった現象は、映画のCGか、遊園地のアトラクションでない限りは魔法としか思えない現象だろう。

「あれは《ギガンティックモード》っていつて、決まった範囲内の敵を攻撃する技なの。志波さんはあんな風に物質を直接操作する能力を持ってるのよ」

「まるで、ゲームやマンガの世界だね……」

「そう考えたほうがわかりやすいわね。もっともこれは、負ければ死んでしまうこともある、まぎれもない現実だけれども」

戦局が少し回復したが、探偵はため息をつく、刃がグネグネ曲り、途中で折れてしまった刀を地面にカランと投げ出した。先ほど本人が言っていたように、《ギガンティックモード》を使うことで武器が元の形に戻らなくなってしまったのだ。

空手になってしまった志波は右腕を一振りする。すると今度は袖の中から直刀が一本飛び出してきて、右手に握られた。

「今日はもうこれ一本しかねえぜ。さすがに丸腰は嫌だし、残りの始末は《ギガンティックモード》に期待はするなよ」

「いいじゃない。あと30体くらいだし、一回で片付くでしょ」

「あのジャームが、これ以上増えねえ保障でもあんのか、あん？」

てめえ、わかってて言うてんだろ、と志波がとぼける上代をにらみつける。

「わかったわかった」

敵が半分に減ったところで、ジャーム達の動きに変化があった。

また、何者かがシーレムビルから出てきたらしい。

「はっはっは、楽しそうだな」

今までのジャームとは一線を画す存在だった。白いＴシャツに迷彩色のカーゴパンツ、カーキ色のベストとラフでミリタリー的なフアッションで身を固めている。その目も他とは違って知性が宿っていた。

この状況でビル側から余裕を持って現れるのである、おそらく味方ではないが、正体がつかめない人物の登場に、遥と上代は訝しげにその人物を観察する。

たった一人、志波だけは違った反応を見せた。

「木島……！？」

「お、久しぶりだな、志波」

対する木島と呼ばれた男は、いろいろな感情が混じり、複雑そうな顔をしている志波に対して、実に朗らかな表情を浮かべる。

「元気そうで何よりだ。それよりなかなか危なそうじゃないか。俺がそっちにいればゾクゾクできたらうね」

木島という男はどうやら志波の関係者らしい。同じことを思ったらしい上代が志波に尋ねた。

「志波くん、彼、知り合い？」

「相棒だよ、探偵の。もう2、3年失踪したままだったんだが……。おい、木島。なぜいきなり姿を消した？　今まで何をやっていたんだ？」

志波は、木島から目を離さずに上代に答え、そして木島に聞いた。木島は、よくぞ尋ねてくれたとばかりに笑みを深くし、両手を広げて答えた。

「気付いちまったのさ。俺が何を求めているのか。そして、それを得るために行動してきた」

「どついう意味だ？」

「教えられない……、いや？ 志波は別にUGNじゃなかったな。なら、俺に協力するっていうなら教えてやってもいいぜ」

今の発言に、志波が身じろぎした。おそらく、「UGNには教えられる」という発言の意図するところに気づき、動揺したのだろう。

「お前……、まさかファルスハーツFHにツ……！？」

かつての相棒が、オーヴァードで構成されるテロ組織に所属している。それは確かに衝撃的な事実といえるだろう。志波が動揺を隠せなかったのも頷ける話だった。

だが、木島は首を横に振って言った。

「それも含めて教えられないね。それより、やっぱり協力は得られねえ？」

「論外だ。詳細も堂々と話せねえようなことに手を貸せるか。お前がこつちに戻って来い」

それはまず叶わないと思っていることだろう。だが、志波はそれでも口にせずにはいられなかったに違いない。

悲痛ともいえる言葉を、木島は「はっ」と鼻で笑って拒絶する。

「やだね。 “そっち側” にいても俺の望むものは得られねえしな。大体お前、俺に “こんな楽しい世界のこと” を黙っていたらう？ そっちに残っても、また何か隠されたり、ごまかされたりするだけだ」

意味深長な木島の物言いに、志波は苦しそうに眉間のしわを深くする。

言葉に詰まった旧友から視線を外した木島は、新しい遊びを思い付いたかのように、遙たち全員に対して話しかけた。

「……俺の事より、お前さん達ちよつとスリルが足りねえんじゃねえか？ もうちよつと楽しんでもらわないとつまらねえんだよな」
「何？」

木島が、ビルの入口から数歩横に移動した。そうしてできた通り道の奥、未だ煙が立ち込めるビルの中から唸り声が聞こえる。

「……いやーな予感がするなあ」

上代がそう苦笑して、懷から一枚の符を取り出した。さすがに、ここで出し惜しみはできないと踏んだらしい。

遙たちの視線が集中するビルの入口から現れたのは一匹の犬だった。しかし、身体は大型犬というレベルを超えてほとんどライオンに近い体躯であり、牙はむき出しで、その筋肉も愛玩動物のそれとはまったく異質なほど強力なことは見て取れる。

そして、その目はギラギラと輝いており、先ほどのジャーム達とおなじ、狂気に染まっていることが見て取れた。

「この研究室で可愛がられてたらしいぜ？ よう、犬さんよ。ちようどメシ時で腹減ったろう、目の前のどれか、好きなヤツを食ってもいいぜ？」

品定めをするように、木島の細い目が遙たちを一通り舐めるように動いたあと、彼は狂犬の首筋を叩いて狂犬に鋭く命じた。

「行けッ！」

狂犬は、なぜかある程度木島のいうことを聞けらしい。弾丸が打ち出されるように駆け出すと、狂犬は爆音にも似た咆哮を上げて一気に遙たちに迫ってくる。その狙いは――

「萱嶋君ッ！」

ほとんど反射的な行動だった。

遙は一樹と狂犬の間に立つと、狂犬の突進をその身に受けた。もともと、だれでもよかった狂犬は邪魔な遙にとびかかり、その勢いで押し倒すと、獣の本能そのままに遙の首筋に噛みつき、引きちぎる。

「あ……っッ！」

動脈を傷つけられた遙から大量の鮮血が噴き出した。

一樹の目の前が真っ赤になった。視界に入った遥の血はごく一部に過ぎなかったが、一樹に衝撃を与えるには十分だ。重要なのは血量ではない。

首筋に噛みちぎられた——これは、どう見ても助からない。

遥が自分を守った。

自分を守って、殺された。

自分のために、死んでしまった。

自分が、彼女を殺してしまった。

「う、う、ああ……」

何かを言わなければならないような気がして、口を開き、声を出す、言うことなど何も思い浮かばず、ただ、うめき声を漏らすことしかできなかった。

何か、何か出来なかったか。

彼女を、守るためにできなかったのか。

「萱嶋くんとか言ったか」

上代に話しかけられることで、一樹は茫然自失の域から引き戻された。

「城崎さんはまだ大丈夫だよ。詳しいことはまたあとで話す。だから、とりあえず落ち着きなさい」

上代の声は、場に合わない、緊迫感を感じさせない口調で、妙に落ち着きを与えるような響きを持っている。

話がよくわからないが、上代の言うには、遥は大丈夫らしい。落ち着いて狂犬の足に踏まれた遥を見ると、すでに首筋からの血は止まっており、傷口が急速にふさがっているのが目に見えて分かった。

(……これも、城崎さんの“能力”……？)

一樹が気づいたのに呼応するように上代が説明した。

「《リザレクト》という。俺たちみたいな能力者なら誰でも持つている能力だな。頭や心臓を吹っ飛ばされても何回かは生き残れるよ……“何回か”はね」

遥が助かったのはわかったが、まだ目の前には狂犬がいる。狂犬はすでに遥の命を奪ったと思っっているらしく、首筋を噛んで以降は攻撃をやめていた。上代や志波の敵意を感じ取り、危険を排除してからゆっくり味わおうとしているのだろう。血走った目を二人に配っている。

上代達が下手に動けば遥が生きていることに気付かれてしまう。放っておいても同じだ。そして、狂犬のほうも知能は高いと見えて、不意打ちができない今、一樹はともかく、残った上代や志波が一筋縄ではいかないことを感じてるらしく、戦局は膠着した状態となっていた。

なにか、何か出来ないか。

一樹が施行を巡らしていると――

『少年、少し私に身体を貸さないか？』

――ふたたびあの“声”が聞こえた。

もう、周囲を見回すことはしない。この声は、一樹の頭の中での

み響いている声であることは薄々理解していた。なら、頭の中で会話が出来るかもしれない。ために、話しかけるように言葉を考えてみた。

（君は……何？）

『“モリト”と呼ばれていたので、おそらくそれが名前だろう。要点をかいつまんで言うが、私は肉体を持たない存在だ。この騒動でどうやら君の中に入り込んでしまったらしい』

想像通りの答えが返ってきた。これだけ異常な光景を見せられたのだから、驚きつつも頭は意外に冷静だった。

（僕の体を貸してくれ、ってどういう意味？）

『君の体には“力”がある。でも先ほどから様子を見てみると“力”の使い方どころか、“力”を持っていることすら知らないようだ』
（“力”……僕に？ 何の話？）

尋ね返しながらも、一応、どういうことなのか、見当がつき始めていた。つまりは、遙達と同じような力ということだろう。

『熱を操る能力だ。私はその力の使い方がわかる。君の体を少々貸してもらえれば、目の前の化け物を片づけてやる』

あまりに都合がよすぎて、悪魔のささやきのようにさえ聞こえる、とても甘美な提案だった。信用してもいいかは迷うところだ。言い方を変えれば、“モリト”は体の主導権を明け渡せと言っているのだから。

一樹の躊躇を見透かしたか、答えが帰らないうちに“モリト”は言葉を重ねてきた。

『私は今は君と半分同化している。君の考えていることも少しはわかるのだ。君はこう思っている。何もできない自分が悔しい。自分も役に立ちたい……。君が私に身体を貸すのは君がこの状況で役に立てる唯一の手段だ。さあ、これは選択だ。どうするかね？』

そうだ、自分はどうでもいいのだ。貸した体に乗っ取られてしまっても、誰に惜しまれるものでもない。

そして、それが唯一の役に立てる手段であるのならば……。

攻撃を受け、刈り取られていた遥の意識が回復した。そのすぐ後に見たのは、狂犬と対峙する一樹の姿だった。彼の名前を呼ぼうと思ったが、まだ喉が完全に修復されておらず、声が出ない。

すでに狂犬は遥に興味は失ったらしく、すでに体の上から移動している。一番存在感の低い一樹を狩るに適当と見たのか、彼を中心に周囲をぐるりと歩いて襲いかかる隙を見ていた。

すでに上代は体勢を整えている。おそらく、狂犬が襲いかかった時に何らかの行動に出るつもりだ。志波も同様で、いつでも飛びかかるように腰を落としていた。

遥自身は動けない。血を失いすぎたのか、まだしばらく立ち上がることさえできないだろう。

しばらく膠着状態が続いていた。しかし、その状況を変えたのは、予想外の人物、萱嶋一樹その人だった。

「交渉成立だな。自分をないがしろにするのはあまりほめられたことではないが、賢い選択だ」

一樹の雰囲気ガラリと変わったのが感じられた。彼の周りの空気がゆらりと揺れ、見慣れた淡い光が彼を包んでいる。

やはり彼も、オーヴァードだったらしい。

狂犬は、彼の様子の変貌に、唸り声をあげて牽制をする。だが、一樹はお構いなしに、狂犬と正面を向かい合い、一步踏み出した。すると狂犬は反射的に一樹にとびかかった。遥と同じように押さえつけて一氣に止めを刺すつもりだ。

しかし、一樹は飽くまで冷静だ。

「完全に狂っているな……あまり気は進まないが、滅す他はあるまい」

一樹が左手に冷気を生み出して狂犬にぶつけると、狂犬は身体全体を瞬時に霜が覆われ、完全に凍りついてしまった。

「君に罪はない。せめて一瞬で葬ってやろう」

次に右手に炎が発生し、これも狂犬に向って放たれた。炎は火柱となって狂犬を包み込む。凍ったものを急に高熱を与えれば、それは碎け散る。それは狂犬の体も同じだった。

炎に包まれると、断末魔の声を上げる暇もなく、狂犬の全身は碎け散り、わずかな灰を残してその場から消滅した。

その力を目の当たりにした全員が驚きに満ち溢れる中、今度はジヤームの一団が一樹に襲いかかった。恐怖に駆られたのだろうか、全員で攻撃すればなんとかなれると思ったらしい。

さすがに、それは避けられないと思うはずの手数で、実際に一樹はろくに身動きも出来ずにその攻撃を受けてしまった。しかし、その攻撃が当たったのかと思いきや、ゆらりと一樹の姿が揺らめき、ジャーム達を取り囲んでいる円の外に姿を現す。

局部的に大きな温度差を発生させることで層気楼を人工的に作り、ジャームに一樹の位置を誤認させたらしい。

「次は君たちが相手だな。少々数が多いが、私にかかれば、終わりは見えている。覚悟したまえ」

再び、一樹の身体に光がともる。
が、一樹が再び攻撃することはなかった。攻撃に移る前に、目の前のジャームの集団を囲むように光で円が描かれていく。

「たった一人に寄ってたかつては感心しないね」

別の方向から声がしたかと思うと、その円の中のジャームが、突然巻き起こった火の玉と、電が入り乱れる嵐に包み込まれた。その威力は絶大で、ジャーム30体はなすすべもなく倒れ伏していく。数秒後に嵐が治まったとき、そこにはもうジャームは1体も残っていないかった。

全員の視線がその嵐をおこした人物に集まる。遙や上代は見知った人物だ。そしておそらく志波は話には聞いているだろうが、実際に会うのは初めてだろう。

視線の先にいたのは一人の男だった。しかし、オーヴァードの遙たちをもつても奇妙な格好で、背広姿の上に紺色の外套を羽織がいつり、頭にはシルクハットをかぶり、大きなミラータイプのサンングラスが目元を隠している。

「あれ？ もうあらかた片付いちゃってるじゃないか。ちょっと遅くなっちゃったかな」

「“ウィザード”、遅い。お前後で説教ね」

「嘘！？ 仕事抜け出すの大変だったのに！ 異議あり！ 僕、イリーガル、イリーガル！」

上代と、妙にテンションの高いその男とのやり取りに、志波が反応する。

「“ウィザード”？ そのノリの軽い変態がか？」

「変態……、初対面なのに君、ひどくない！？」

“ウィザード”が初見で変態扱いされたことに抗議する。

「ま、“ウィザード”のことは置いておこう。遊びは終わりだ、木島。一緒に来てもらうぜ、事情を聞かせてもらう」

ようやく立ち上がることできた遙も含め、5人の視線を浴びた木島は、ふっ、と不敵に笑った。

「いやはや、あんたが噂の“ウィザード”かい？ 町が危機に陥るとやってきて、救ってくれる江間市最強のオーヴァードって」

「ははは、江間市最強ってのが分相応でいいでしょ？」

「はいはい、遅刻したヤツは黙ろっね」

上代から制止され、しぶしぶ“ウィザード”が黙ってさがる。

「じゃあ、そっちにいるガキは？ 噂に聞いてた通りのサラマンドーだから、最初そっちが“ウィザード”だと思ったんだが。そりゃ

ま、話に聞いてたのは30〜40代だって話だったから、年齢的に合わねえとは思ってたんだけどよ」

「知りた」

知りたいのはこつちだ、と上代は発言しようとしたのだろう。それを遮って話したのは一樹だった。

「“ういざーど”、とは何のことを話しているのかわからんが、私は“モリト”と呼ばれていた存在、だ」

遙は話についていけなかった。本人は“モリト”と名乗っているが、しゃべっているのは萱嶋一樹という少年のはずである。

彼女の思考をよそに、“モリト”と聞いて反応したのは、木島だった。

「“モリト”……へえ、アンタが？　いないと思ったらこんなところにいたのかい」

「何か知っているらしいな、木島。後の話は帰って、久しぶりに一杯飲みながら、ゆっくり話そうぜ」

友好的な話ぶりだが、明らかに志波は臨戦態勢だった。状況をみると、木島はFHであるかどうかはともかく、このシーレムビルにおいて、木島が行った何らかの行為が、周りに倒れ伏している60体のジャームと1体の狂犬を生み出したのは、ほぼ確定的であるからだ。

「はん、一杯って、下戸だったてめえが酒の一杯でも飲めるようになったのかよ」

「当然烏龍茶に決まっているだろう。酒よかよっぱど苦いのを淹れてやるよ」

そして数瞬にらみ合う。

「……やめておこう。この状況じゃ、負けが確定してる。スリルつてのは、少なえまでも可能性があるから生まれるもんさ。烏龍茶はまた今度にさせてもらっぜ」

そう言っつて、木島は肩をすくめると、木島の体の輪郭がぐにやりと歪んだ。そして、そのまま形を失い、液状になって地面にしみ込んだ。

「待てッ、木島ッ！」

志波が反射的に駆け出すが、すでにシーレムビルの正面入り口からは彼の姿は消えていた。

木島がいなくなった空間を見据える志波をよそに、遙と上代が注目したのは一樹だった。木島がいなくなった今、この場で異分子と呼べるのは、萱嶋一樹、否、自称するところの“モリト”だからだ。

だが、彼は頭痛に耐えるように顔を歪めると、片膝をつく。

「く……、慣れん身体を動かしたから、か」

そう言っつと、どさり、と一樹はその場に崩れ落ちた。

シーレムビルにおける騒動が落ち着いた後、上代は南野に連絡し、ビル前に倒れているジャームの死骸の片づけを初めとする事後処理を依頼した。既にそのことは想定して南野は手配していたらしい。連絡をするとな分もしないうちに事後処理のスタッフが駆けつけ事後処理を始める。

それを見届けた後、気を失った一樹を含めた上代たち5人はその場を離れ、江間神社の隣にあるUGN江間支部のオフィスまで移動した。

《リザレクト》で回復したとはいえ、一度致命傷まで負った遥と気を失った萱嶋一樹は、医療スタッフに診察を受けさせた。その診断結果は両方とも異常なし、とのこと、気を失った一樹については、医務室のベッドで休ませ、今、上代たちはそれを囲むようにして顔を突き合わせていた。

彼らは戦闘の疲れからか、ここまでほとんど喋っていなかったが、空気清浄機のそばで煙草を吸っていた上代が、灰皿の中に灰を落としながらぼそりと呟いた。

「なんだか厄介なことになってきたなあ……、このまま何もなかったことにして無視しちゃうか」

「できるかーッ!？」

反射的に突っ込んだのは志波である。

「じよ、冗談ですよ」

「……まあね。放っておけば余計面倒になりそうだし」

何だ今の間は、と遙と志波の上代を見る目は怪訝そうに細められる。それに否定する理由のなんと消極的なことか。

「……うん」

今の騒ぎが刺激になったのか、一樹が不意に身じろぎをした、そしてゆっくりと目を開く。

全く覚えのない場所で目覚めたせい、一気に意識が覚醒したらしい。目を大きく見開くと布団を跳ね飛ばすような勢いで身を起こす。

「こ、ここは……!？」

「UGN江間支部の医務室よ」

答えたのは遙である。以前からの知り合いの存在が緊張を和らげたのだろうか。緊張してつりあがっていた肩が、大きな息とともにゆっくりと下がった。

「何があつたかは覚えてる？」

「あ、そうか……あのビルで化け物が出てきて巻き込まれて……、城崎さん達に助けられたんだ。あ」

そこでようやく助けられたことに思い当たったのだろう。一樹は居住まいを正すと、丁寧の上代達に向かって頭を下げた。

「あの、どうもありがとうございました」

「いいや、こちらこそ悪かったね。何か巻き込んだじゃって」

ぐし、とガラス製の灰皿に煙草の火を押し付けて消しながら、上代が答える。

「巻き込んだ……といえますと？」

「俺たちの組織ね、UGN……ユニバーサル・ガーディアン・ネットワークっていうんだけど、活動目的の一つは、さつき君が見たような連中が起こす事件から、君達一般人を遠ざけ、守ることにあつてね。それでも巻き込んでしまったのは不手際としかいいようがない。だから、申し訳ない」

と、上代は一樹に向かって頭を下げた。だが、すぐに顔を上げてしれっと言った。

「……っていうのは建前だけだね」

「オイ」

「途中まで、途中まで本当に真面目な話だったのに……！」

UGN外のはずの志波がツツコミをいれ、遥はがっくりと首を落とす。

「まあ、なんだ。とにかく君は普通にあそこを通っただけなので、一切迷惑を掛けたとか思わなくていいから」

取り繕うように言って、話は終わりだとばかりにひらひらと手を振った。

話の区切りがいいところで、遥が割り込む。

「あ、と。萱嶋君、忘れてたけど改めて紹介するね。ここにいるのがUGN江間支部・支部長の上代さん。その隣にいるのが、探偵の志波さん。それから、奥にいるのが……」

と、そこで遙の声が止まる。その視線の先にいるのは、背広にフ
レームの太い黒ぶち眼鏡という、いかにも冴えないサラリーマンと
いう雰囲気の中で、全く見覚えのない人物だったからだ。

「……あ、あの、どなた？」

「あ、私ですか？ その、なんと申しましょうか……」

弱々しい口調で答えかけたサラリーマンに口を挟んで答えたのは
上代だった。

「“ウィザード”だよ。さっきさんざんカッコつけてたでしょ」

一瞬、時間が止まった。

「うい、“ウィザード”だと！？ この胃の弱そうなオッサンが！
？」

「もう、いい加減にふざけるのやめましようよ、上代さん。こんな
世の中に疲れてそんなオジさんを巻き込んで、よりにもよって“ウ
ィザード”だなんて」

先ほど木島もちらりと漏らしていたが、“ウィザード”は江間市
最強のオーヴァードとして、UGNの中では非常に有名なUGN外
部の協力者、イリーガルエージェントである。

炎と氷の技を使った戦いぶりは華麗、かつ強力で単独でも相当の
規模の事件に対処できる。どういうわけか、一般人に見られる心配
のない《ワーディング》内でも変装して現れ、その正体は誰にもわ
からない。

そついった謎の多さも、彼を有名にしている要因の一つだった。

「わたし、“ウィザード”はジョニー・デップみたいなイケメンの
ナイスミドルだと信じてたのに……」

なぜか落ち込んでいる遥の代わりに、上代が“ウィザード”を指
す。

「そんなわけで、このうつ病寸前の中間管理職っぽいオッサンが“
ウィザード”ね。訳あって本名は伏せているので“ウィザード”か、
もしくは普通にオッサンと呼んでやって」

「あの……、みなさん、ホント容赦ないですね……」

どこか犠牲者がでた感が否めない自己紹介が終わったところで、
上代が、サイドテーブルにあったポットからお湯でインスタントコ
ーヒーを淹れて差し出した。

「コーヒー、どう？」

「あ、いえ。これ以上、ご迷惑をおかけするわけにもいきませんし、
そろそろお暇しようと思います」

一樹はコーヒーを辞退すると、立ち上がり、サイドボードに立て
かけてあった自分のカバンと醤油ボトルの入ったスーパールの袋を手
に取る。

「え？」

まさか、そこで帰ると言い出すとは予想していなかった上代及び
一同は目を丸くして一樹がぺこりと深々とお辞儀するのを見ていた。

「まだ話は終わってないんだけど」

「いえ、僕とこれ以上関わってもロクなことになりませんよ」

一樹はそう言っで、どこか影のある苦笑を残すと、そのまま黙ってその部屋を後にした。その態度はどこか頑^{かたく}なで、この場にいる誰もそれを止めることはできなかった。

ドアが閉まった直後、上代は携帯電話を取り出すと、南野の番号をダイヤルする。

「南野さん？ 例の彼、帰っちゃったんだけどさ、誰かに言って監視付けといてよ。え？ いや諸事情でオーヴァードの話はできてなくてさ。いや、ごめんごめん。とにかくお願いね」

ぱちり、と折り畳み式の携帯電話を閉じてポケットにしまうと、代わりに煙草を取り出し、一本取り出す。

「ウィザード、火」

「オーヴァードの力をマッチ代わりにしないで下さいよう……」

ウィザードはため息をつきながらパチン、と指を鳴らすと、上代の煙草の先に小さな火が走り、タバコから煙が立ち上り始めた。その一連の動作を見て、志波がしかめ面をする。ハードボイルドな雰囲気を目指しているが、煙草の吸えない探偵である志波には今の一連のやりとりがうらやましかったのだろう。

「さて、と。これからどうするかねえ……。とりあえず調べるのはあのビルの事、萱嶋少年のこと、それからあの木島とかいうヤツのこと……かな」

「……木島の事は俺に任せてくれないか」

その話になるのを待っていたのだろう、すかさず志波が口を挟ん

だ。

「……いや、志波君にはどっちかということ、少年の方を調べてほしいんだけど」

「何でだ!？」

「いや、だって一般人のプライバシーを侵害するのが探偵の得意技でしょうが」

「全国の探偵をケンカ売ってんのかお前は。えれえ癪^{しゃく}に障りやがる」

志波の口元がひくつく。

「だが——」

「木島の事については、ジャームになっているか、FHに属しているか、あるいは両方の可能性が高い。UGN経由で調べた方が話は早いでしょ」

言い募ろうとする志波に対し、上代は理論的に返す。だが、志波はまだ納得した様子は見せない。志波がこの上代の提案に反対している一番の理由を指摘する。

「志波君が心配するのはわかるよ。要するに、UGN（俺たち）が黙って木島を処分することが心配なんでしょ？」

「……ちっ」

どうやら図星のようだった。志波は小さく舌打ちすると目をそらす。

UGNの方針は、一般人に対し、できるだけ“世界の真実”を知らせず、表向きは超自然的能力の持ち主が戦いを繰り広げているなどということのない、普段通りの世界として取り繕うことにある。

対して、F Hという組織は、個人にもよって行動原理は大分違うが、共通しているのは、自分の欲望を達成させるために手段を問わない。一般人にオーヴァードやジャームの存在がバレることも、一般人に被害が及ぶことも恐れず、オーヴァードとしての能力を使って事件を起こすことなど何でもないのだ。

またジャームも同じだ。自分の欲望、衝動のままにその強大な力をふるう。

そのために、U G Nは、事件を起こしたF H構成員やジャームに対して厳格な処分、つまり殺してしまうという処置をとることがある。

実際、今回シーレムビル前の戦いで倒したジャームも、元々はビル内で働いていた家族も恋人もいるであろう一般人も多く含まれていたと考えられる。それを上代達、U G Nは殺してしまった。もつとも、その戦いには志波も参加していたが。

名も知らないジャームならともかく、木島は志波の相棒だ。知らない間に殺されるのだけは我慢がならない、ということだろう。

「大丈夫。奴に対する処置が『捕縛』であれ、『処分』であれ、その場にはあんたにも参加してもらおう」

「……本当だな？」

「約束する。何せ人手不足でね」

それが本音かよ。

「それで、木島って昔からオーヴァードだった？」

志波が探偵としてU G Nを手伝うようになったのは、最近のことではない。確かに志波には昔相棒がいたはずだ。ただ、その相棒は

オーヴァードではなかったために、基本的にU G Nは彼とは接触しなかったはずだ。

「いや。失踪するまで、ヤツはオーヴァードじゃなかったはずだ」
「確か、あの木島って人、何か気付いたって言ってましたね」と、遥が木島の言動を思い出す。「普通に考えると、あの人が“世界の真実”に気がついた。その時に、オーヴァードになったのでしょね」

ほとんどのオーヴァードはU G NかF Hに属することになる。

独立した探偵である志波もイリーガルエージェント、つまり正式なエージェントではない外部協力者としてU G Nを手伝い、オーヴァードとして必要なバックアップをU G Nから受けている。

大抵の場合は一般人からオーヴァードに覚醒した後、最初に友好的に接してきた組織に所属することになる。木島の場合も、知らない間に覚醒し、最初に声をかけ“世界の真実”を教えたのがF Hだったのだ。

「あと彼は求めているモノに気がついた、と言っていました。問題はそれが何か、ですね。志波さんは何か心当たりは？」

遥の問いに、志波は腕を組んで壁にもたれかかった姿勢のまま首を振った。

「いや。オーヴァードになってから気がついたってヤツも言うてたろ」

「ここで考えても仕方がない……か。とにかく、その望みとやらは木島の所属してるF Hセルの行動指針と一致するものがあるんだろうね」

FHは“セル”と呼ばれるグループ単位で動くことが多い。人数は不定だが、利害の一致する者同士が組んで活動するものが多いようだ。

「失踪した時の様子は？」

「分らん。本当に突然だった。後でヤツが調べていた依頼をもう一度当たってみたが、アイツがどこで何を見たのか、手がかりも何もありやしねえ」

「とりあえず、当たった場所つてのを後でリストにしといてね。何か引つかかるかもしれないから」

会話が一区切りついたところで、もう一本煙草に火をつける。

「あとは萱嶋少年か」

「気になるところは二つだな。一つはあの極端に人を避ける態度。もう一つは、力を使った時に出了、あの人格だ」

「“モリト”……と名乗ってましたね」

ウィザードがはじめて口を挟む。

「デュアルフェイス
“戦闘用人格”……でしうか」

“戦闘用人格”はオーヴァードに見られる現象の一つで戦闘時に限って出てくる人格がある状態があることを指す。そちらの人格は大抵、普段の人格に比べ、オーヴァードの能力の使い方に長けている。

「結論を出すにはまだ早い。城崎、学校での萱嶋君の調子は？」

「今日見たとおりですよ。付き合ってもほとんどないみたいだし。あ、でもなんか皆避けてる感じはしますね」

「ほう、そりやまた学生らしい陰湿な話だな。いったいどうして？」

上代の問いに、遥が首を振った。

「すみません。あたし、あんまり人の陰口聞くの好きじゃなくて」
「そ。健全で結構。でも今は情報が必要だから、明日学校で調べてきてね。……よし、今日のところはこんなものか。UGNはビルのこと、木島の事。志波君と城崎さんは、少年の事を調べるということで」

そこで上代は、空になったコーヒークップと、吸い殻が2、3本突っ込まれた灰皿を持って立ち上がった。

「じゃ、みんなよろしくね」

一樹が家に帰れたのは、午後8時過ぎ。とつぷりと日の暮れた後のことだった。住宅街にある一軒家で、二人で暮らすには広すぎる。実際、使っていない部屋もいくつあった。

父親の大樹はすでに仕事から帰宅していた。居間で新聞を広げており、目の前には空になった茶わんや皿が並んでいる。母親は、一樹が生まれたときに死んでしまったので、家事の類は慣れている。

一樹が居間に入ると、大樹は新聞から顔をのぞかせた。

「帰ったのか」

「うん、ただいま」

一言だけの会話の後、父親は新聞を元の位置に戻す。

一樹の分の食事は用意されていなかった。

『随分冷たい父親だな』

簡単な食事を自分で用意して食べ、自分の部屋に入ると同時に、例の声が話しかけてきた。

「しょうがないよ。母さんが死んだの、僕が生まれたからだし。父さんと母さんは大恋愛結婚だったから、母さんを失ったのがすごく悲しくて、僕が憎くてたまらないんだと思う」

『だからといって、君に罪はないとは思うが』

「まあ、そうなんだけどね……っていうか、何で僕ら普通に話してるの!？」

愕然として一樹は頭を抱えてその場にうずくまる。気を失ってしまった後、話しかけてこなかったのも、すっかり忘れてしまっていた。

「そういえば……えーと」

『“モリト”と呼んでくれたまえ』

「分かった。モリトはどこからきたの？ 幽霊……じゃないよね？」

『それが……私にもよくわからない』

先ほどの自信を帯び、モリトの毅然とした口調が急に弱くなった。

『ずっと真つ暗な場所にて、誰かと会話していたことはおぼろげに覚えている。しかし、正直に言つて、君の心の中に移動した時以降の事しか明確に思い出せないのだ』

「そうなんだ……」

『あるいは、あの“ゆーじーえぬ”とやらに聞けば、何かわかるかもしれないがね』

だが、ああいう形で話も聞かずに離れてしまった以上、今さら協力は求められないだろう。

『何故、君はあの時彼らの協力を拒んだのだね？』

夕方のあの異常な状況、自分に何が起こったのかまるでわからない。そんな状況では、普通は事情を知っていそうなUGNから情報と協力を得ようとするだろう。

『見たところ彼らは、腹に一物がないとは言い切れないにしろ、悪

い人間ではなさそうだったが』

「別に、アレはあのU G Nの人たちを疑ってるってわけじゃなくてさ。僕、あんまり人と関われないんだ」

『人嫌いなのか？ 人と接するのが恥ずかしいとか』

「そうじゃなくて……、どうも僕って“関わる人みんな不幸にしちやう”らしいんだよね……」

『どういうことかね？』

モリトが聞き返すが、一樹はしばらく考えたあと、首を緩やかに振って答えた。

「……さあね。みんなそう言ってるんだ。父さんですらそういうんだから間違いないんだと思うよ」

誰から言い出したのかはおそらく、誰にもわからない。だが、父は言った。

——お前の存在が周囲の誰かの幸せを奪っている。そのことを忘れるな。

父の場合は実際に一樹が生まれることで妻という幸せを失っている。そして、火事でせつかく建てた一軒家も失ったという過去もある。それでも一樹を遠ざけないのは、父親としての責任感なのだろう。手放そうとしても手放す先がない、という事実は置いておいて、そしてその話は、父親以外からもささやかれることになった。

『それは、ただの伝聞や濡れ衣ではないのかね？』

「それが嘘でない、と確信が持てないんだよ」

そうでない、と確信が持てない限り、一樹はむやみに関わる人を

増やすわけにはいかないのである。

このまま話しても埒が明かない、と判断した一樹は話題を変えた。

「ところで、僕に能力があるっていつてたけど、あれってどういうこと？」

『まれに人間の中に、世にはびこる鬼や魑魅魍魎ちみもつりょうを退治するための能力を持っている者がいるのだよ。君はその一人だ』

「ちみ……もうりょう？」

『もつとも、今日見た“ゆーじーえぬ”とかいう連中は“じゃーむ”と呼称していたようであるがね。また、形態もそう化け物じみたものではなかった』

一樹は、あの、人とは思えぬ常軌を逸した目をした人間たち、そして自分が倒したあの狂犬のことを思い出し、背筋に冷たいものが走るのを感じる。

『君が持っているのも同じ種類の能力だと考えられる。能力にはいろいろ種類があるが、君の場合は先ほど言ったように熱を操る力だ。具体的に言うと、自由に炎を出したり、氷を出したりできる』

「ということは、僕やモリトはあのジャームっていうのをやってけるために存在しているの？」

『いいや、わからない。私は私の目的を忘れてしまった。そして明らかに君の目的でもないだろう』

能力や才能を持っているからといって、即目的に結びつくとは限らない。100メートルを10秒未満で走り抜ける人間がいたとして、それは即刻、陸上界でトップをとるために生きているわけではないだろう。

『よくわからないが、しばらくはこのまま静観したい。それまで君

の心の中に厄介になることになるが、構わないだろうか？』

「僕は構わないよ。いい話相手ができたと思うようにするし」

モリトは一樹の心の中にいる。だが、一樹にはそれは不快に思えないことだった。

もともと人嫌いではないが、周りの雰囲気から人付き合いを絶っている一樹としてはここまで話ができる相手ができたこと。一樹にとって、それは単純にうれしいことだったのだ。

空腹で目の回りそうな四限目がようやく終わり、昼休みの時間がやってきた。他の女子がやっているように、遥もいつものグループで自分で作ってきた弁当を広げる。

ちなみに今日の弁当は、卵やレタス、ハムを挟んだトーストサンドに、ウィンナーに生春巻、それに卵焼きにアボガドサラダという内容であった。

「私は悲しいわ……遥。秀才なのに、運動もできる、よくモテル！ 拳句の果てに料理も上手だなんて！ 神様はアンタに何物あたえりや気が済むのよ……！？」

そうして、嘆くのは遥の弁当箱から卵焼きを一切れさらって口の中に入れたばかりの明美である。

「ちょっと、勝手に人のおかず取らないでよ！？」

「この卵焼きひとつとっても、出汁巻きにして手え込んでるし、やつぱり遥、いい嫁になりそうじゃのう！」

明美に気を取られている間に、智子も一切れ、大きく開けた口に放り込む。女の子仕様の小さな弁当に入るおかずは限られているので、卵焼きはそれで打ち止めだった。

「アンタ達自分のお弁当食べなさい！ 自分の！」

「でも遥偉いよね」。親元から離れて、親戚の所でバイトしながら独り暮らしでやってるんでしょ？ じゃあ、家事とかも全部できるということね……。あたし、たまには遥の弱点も見たいわ」

遥はUGNチルドレン、つまり事情があつて身寄りがなく、UGNに預かられている身である。寮暮らしという扱いにはなっているが、実際はワンルームマンションの一室を貸し与えられて生活しているのだ。したがって世間から見れば、明美が言つた通りの事情になる。

「高校生で独り暮らしって珍しいのかな？」

「そりゃ、うちは都立だしね」

都立江間高校は、近隣の公立高校からすればレベルは高いが、ありふれている平凡な学校である。わざわざ他の地方からこの高校に通おうという生徒はいないはずだ。あとは家庭の事情くらいだが、高校生の子供を置いて海外赴任をしているなんて親は、漫画やアニメならともかく、現実にはいないだろう。

「鍵っ子で半ば独り暮らしの子なら何人かいるみたいだね」

さすがに事情通の明美は、クラスを見回しながら平然と言う。

「萱嶋くんは？」

「萱嶋？　なんでそこでその名前が出てくるの？」

智子が怪訝な顔をして遥の顔を覗き込む。智子の“遥の保護者ゼンサー”が働き出したらしい。

「昨日商店街で見かけてさ、お醤油買ってたから。自活してるのかな？」

事実、彼を見かけたとき、そう思ったのである。

「いや、あそこは確かお母さんがなくなつて、父親と二人暮らしだつて聞いたよ。だから、ただのお使いじゃないかな」

「あ、そうなんだ」

「残念、独り暮らしならあたしがご飯作りに行つてあげたのに……、なんて思つてない？」

遥の返答に続いて、智子が尋ねた。まだ疑っているようだ。

「ないつてば」

「でも……まあ、萱嶋はよくわからないところがあるから、一概にダメとは言えないんだけどね」

遥の否定は聞いていないらしい。

「あたしはよしの方がいいと思うけどな、萱嶋は」

箸に挟んだ俵型のおにぎりを見つめながら明美がつぶやく。

「何か良くない噂でもあるの？ 萱嶋君」

「……遥知らないの？ 結構有名な話なんだけど『萱嶋一樹に近寄ると不幸になる』って話」

「不幸？」

「そ。それがまことしやかなのよねえ」

一番古い事例は小学校でのボヤ騒ぎだった。幸い、植木の一部が燃えただけで建物にも損傷はなかったのだが、火元には出火原因となるようなものは全くなかった。つまり、誰かのいたずらの可能性があつたのだ。

騒ぎは休み時間の事で、誰がやっていてもおかしくない状況であつたが、そんな中で出火場所に一番近いところにいたのが萱嶋一樹

だったのだという。

無論、証拠もなく一樹は咎められることはなかったが、誰もが一樹が火をつけたのだと思っていた。

それから、時々一樹のそばで事件が起こるようになった。誰かの持ってきていたゲーム機がなくなったり、ノートが水浸しになったり、壁に落書きがされていたり。

そのいずれも、一樹が不可能な時間には起こらず、そして決定的な証拠も証言も上がらなかった。

だが、そのたびに周囲の者の心の中で一樹の罪が静かに積み上げられていった。

「そ、それ本当に萱嶋君がやったの？ 普段見るとそんな感じしないけど」

「本当だとしたら、相当腹黒いわね」

「そうそう、そこが不気味だっていう話。それで一番有名なのが中学の時の事件なのよね」

中学生のある時、家庭の事情も一樹の噂にプラスされるようになった。家が一度全焼したからである。また、同時に「一樹の母は、一樹が生まれた時に亡くなった」という情報も広まった。

そうになると、一樹がいじめの標的になり始めるのに時間はかからなかった。もはや暗黙の了解として一樹は家を燃やし、母親を殺した、そして小学校での数々の事件を起こした罪人なのである。

机に落書き、上履きはずぶぬれ、ノートは破かれ、誹謗中傷は流れた。今から思い起こすと何とオリジナリテイのない陰湿なイジメであることが。

だが、一樹はそれでも全く変わらずに日々を過ごしていたのであ

る。反応がないのはいじめる側としていじめられっ子の無反応ほど面白くないものはない。

そこで、直接攻撃に出た男子がいたのだが――その時に事件が起こった。

その男子が言いがかりをつけて胸倉をつかもうとした時、その男子のシャツがいきなり発火したのである。

当然大騒ぎになった。

幸い、便所が近くにあったので、すぐに水を汲んできて火は消し止められたが、一樹とその男子は共に担任教師に呼び出され、事情聴取を受けることになった。

男子は「一樹が火をつけた」と当然主張したが、一樹は火の元になるようなものは一切持つていなかったし、そして一樹が男子に対して何もしていないことは同じクラスの目撃者からの証言で証明されていたため取り上げられなかったのである。

例の男子の発火現象の事件で、一樹は何もしていないことは証明されていたが、それでも一樹とあの現象の間に因果関係がないとは誰にも言いきれなかった。

萱嶋一樹には得体のしれない何かがある。
あいつに関わるとどうなるかわからない。

そんな共通認識を持った周囲からの一樹の扱いは変わった。徹底して無関係を貫こう、ということになったのである。

一樹も、必要以上に周りに近づこうとはしなかったため、彼が完全に孤立するのに一日もかからなかった。

「遙は別の中学からきてたけど、この高校、同じ中学から結構来るからね。それが今でも続いてるわけ」

（炎、か……）

盗難事件などは知らないが、ボヤ騒ぎや発火現象などの事件は、おそらく一樹の熱を操る能力に起因したものだろう。

「あたしは風評とかあんまり好きじゃないけど、こう重なると無視できない感じだし、あんまり近づかない方がいいんじゃない？」

「ひよっとしたら超能力者とかなのかもね、その発火現象とか。発イロキネシス火能力とかあるじゃん。ちよっと面白いかも」

智子の言葉に、遙は動揺を隠せたかどうか自信がなかった。

「でも、だとしたら、本当に萱嶋がやってることになるよ。それを涼しい顔をしてやってるなら相当のワルだね」

「な、なるほど。さすがに面白くても悪漢に、遙のカラダを任せるわけには行きませんな……」

「……ちよっと、他人のカラダの扱いを勝手に議論しないでくれる？」

実際どうなのだろう。

能力に起因するとして、コントロールできているか否かは一樹の扱いを決定するにおいて、とても重要な要因ではある。

（確か、志波さんも萱嶋君の事で調べてるんだっけ。一回話した方がいいかな……？）

「——なるほどな」

シジマ探偵事務所の応接用のソファに身を沈めながら、志波はその厳つい顔をしかめながらウーロン茶を口に含んだ。

その向かいにはスカートの短い裾を気にしながら、居心地が悪そうに遥が座っている。

遥は学校が終わった後、その足でシジマ探偵事務所に赴き、志波に昼に聞いた一樹の噂について報告したのだった。

「昨日の感じだと、オーヴァードの能力の事は初めて知ったっぽい
が、それも含めて演技だと考えると相当の腹黒さではあるな」

「普通に能力が漏れ出している、と考えると、それだけ強力な能力
を持っているってことだし、早くUGNで制御習った方がいいと思
いますしね。志波さん、そちらはどうでした？」

「情報屋に聞き込みとか丸投げしてあるんだが、まだ結果は帰って
きてねえな。そろそろだとは思うんだが」

ここで話す内容がなくなり、二人の間に沈黙が流れる。

大体、今時の女子高生と何を話せというのだ。気にはなるが、質
問できない年頃の娘を持つ親父の気持ち、今の志波にはよくわか
る。

新しい情報もないようだし、そろそろ帰ろうかと遥が腰を浮かし
かけたところで、ふと思いついた志波は話しかけた。

「気付いたのはたぶん俺だけじゃねえと思うけど、昨日萱嶋の能力、
誰かに似てると思わねえか？」

「“ウィザード”……ですね。おそらくシンドロームも同じサラマンダーのピュアブリードでしょうし」

流石に聡明な遙は気づいていたらしい。とはいえ“ノイマン”（知能強化能力）を持っていなくてもそれくらいは気づけるのだろうが。

オーヴァードの能力は現在12種類の“シンドローム”と呼ばれるタイプに分類されている。遙が言った“サラマンダー”もそのシンドロームの一つで熱操作能力を意味するのだ。

そして、オーヴァードは通常1種類ないし2種類のシンドロームを持っている。たとえば志波が持っているのも電気を操る能力である“ブラックドッグ”と、物質を変化させる能力である“モルフェウス”の二つだ。

このシンドロームを二つ持っている状態を血統に例えて“クロスブリード”という。よって、志波の能力を言い表すときは「ブラックドッグ/モルフェウスのクロスブリード」という表現をする。

そして、シンドロームを一つしか持っていない状態を“ピュアブリード”という。クロスブリードに比べてできることの幅は狭いが、大抵その分強力な能力を持っていることが多い。

「それに戦い方も。似てるしな。まあピュアブリードは戦略は限られてくるし、偶然の一致と言っちゃえばそれまでなんだけだよ」

“ウィザード”は温度差を利用して戦うことが多い。たとえば、攻撃対象を凍らせてから炎をけしかけることで堅いものでも壊してしまうような、そんな攻撃が得意なのだ。

一般的にサラマンダーのピュアブリードはどちらかというと炎か

氷、どちらか一方に特化しているケースが多いのであるが、萱嶋一樹もどいうわけか、同じような戦い方をしていた。

「“ウィザード”と萱嶋君……何か関係あるのでしょうか？」

「ま、それは気にするところじゃねえな」

会話がもう一区切りつくのを待っていたかのように、客の来訪を告げるチャイムが鳴った。志波が応答に立ちあがろうとすると、その前にチャイムを鳴らしたのであるう人物が事務所の中に乱入してくる。

「やつほー、志波ちゃん。不景氣イ？」

「何なんだその挨拶は……。つーか、チャイム鳴らしたんなら大人しく出てくるまで待ってるよ」

「ほっほ、何を今さら。アタシと志波ちゃんの仲じゃない。今さら隠すこともないでしょう？ 何？ 何かやましいことでも……」

機関銃のように喋る情報屋が、志波の大きな体に隠れていた事務所内を覗き込んだ時、遥と眼が合う。

「……志波ちゃん」

真顔になったスガノがまっすぐに志波を見つめる。

「……何だよ」

「いくらなんでも女子高生を手箆めにするのは都の条例違反だわ。あたしもついてったげるから潔く自首しましょう。大丈夫、これは正せる過ちよ」

「やかましいッ！ やっぱりロクな想像してやがらねえなデメエは！」

怒鳴って、志波は己の肩をつかむスガノの手を振り払う。

「あ、あのう、この方は……？」

突然の闖入者に、いささか戸惑い気味に遥が尋ねた。

「情報屋のオカマだ」

「はい、スガノよ。よろしくね、城崎遥ちゃん」

「あれ？ わたしの名前……」

投げキッスとともに、名乗ってもいない名前を先に言われ、自分が名乗るタイミングを逸した遥はやはり調子を崩されている様子だ。志波の認識ではUGN関係者で遥はまともな方だ。といっても比較対象は上代と南野くらいじゃないのだが。

そんな常識派が、いきなりこの強烈な印象を持つ情報屋に出会えば、いくらノイマンの頭脳でも回転が少々狂ってしまうらしい。

「そりゃ、江間市で“ブランドラゲーン白き龍人”の名前くらい知らなきゃ情報屋は名乗れないわ」

「性格はアレだが、情報は確かだ。ここに來たってことは、情報は集まったってことでもいいのか？」

「そうね。結構ボロボロ出てくるんで楽しかったわ」

そう言っ、スガノは手にしていた封筒を志波に差し出す。

志波はそれを受け取ると、さっそく中身を改める。

「……結構詳しいこと書いてやがるな。別に本人に話きいたわけじゃないんだろ？」

「あるでしょ、“口の端には上らなくても、皆知ってる暗黙の話題

”つて。萱嶋って子の話題ってまさにその典型ね。2、3件回つたらすぐそのくらいの情報はとれたわ。あとは裏を取るだけだったからちよるいもんよ」

「ほう……、ま、こいつは後で読ましてもらおうとして、一応口頭で説明してもらおうか」

スガノの報告は、一樹の家庭事情から始まった。

「ある意味オーヴァードらしい家庭よ。母親がなくなった一人っ子で父子家庭なのね。それで、話によると一樹君は父親に憎まれているらしいのね」

親子で話しているところさえ滅多に見ないらしいが、たまに話しているのを聞いても父親の一樹に対する言葉は非常に辛辣だったのだという。

だが、一樹の父親に対する態度は甘えこそしないものの父親を氣遣う、至って普通の態度であり、その一方的な親子関係がさらに萱嶋家の歪みを見せていた。

「……萱嶋君、そんな家庭だったんだ……」

「どうして父親が子供を憎んでるんだ？」

「それがすごい話なのよ。母親が亡くなったのは、一樹君を生むときらしいの。ここまではよくある話。でもね——」

現代でこそほぼ安全に産めるようになったとはいえ、それでも出産は母親にとって命がけの行為である。産後の肥立ちが悪く、亡くなるということも珍しくない。

「——なんと死因が“焼死”、なのよね」

「焼……死……？」

意味がうまく飲み込めず、志波は間抜けに問い返してしまった。

「よく都市伝説でもあるでしょう、いきなり人体に自然発火して焼死しちゃうつて現象。分娩中にそれが起こって大変な騒ぎになったらしいの。あわてて火を消し止めたけど母親は助からなかった。黒焦げになった母体から奇跡的に子供だけが助かったらしいわ」

それは先ほど遥が学校から聞いてきた話と合致する。いじめていた男子のＴシャツに発火した事件。

まず間違いなく一樹が持つサランマンダーの力によるものだろう。ということは一樹は生まれながらのオーヴァードということになる。

本人に自覚がなかったとはいえ、よくぞここまでUGNから隠れおおせてきたものだ。

「それは本当の話なのか？」

「病院関係者はちょっと口が堅かったし、１７年も前の話だから職員もだいぶん入れ替わって話は聞けなかったんだけど、葬儀屋さんから話が聞けたわ。遺体が酷く損傷してて、葬儀でも最後のお別れはなかったって話よ。それに警察にも証拠写真が残ってた」

見る？ と、スガノが内ポケットから小さめの封筒を出して小さく振るが、志波は丁重に断った。仕事柄、凄惨な場面には今までも何度か立ち会っているが好んで見たいものではない。

「それからもね、奇妙な事件がたくさん起こるようになったの。小さいころの一樹君と会った人が亡くなったとか、一樹君を見かけた日に空き巣に入られたとか」

「言いがかりじゃねえのか、それ」

流石に空き巢や死人は、サラマンダーの熱を操る能力とは関係がないだろう。

「そうね、亡くなった人はクモ膜下出血、空き巢もただの偶然で犯人も捕まってて『戸締りが甘かったから』って供述してたらしいわ。まあ、“祟り”と同じね。理不尽な不幸に対して“不幸を運ぶ少年”っていうのは理由づけに便利な存在だったんだわ」

学校での悪戯の数々もそうなのだろう。本当の犯人は、どうせ一樹がやったことにできると思って、わざと一樹の周りで実行していたのだ。

「でも、やっぱり母親を焼死させたのはあの子の能力だし、逆にいえば説明がつかないもので、炎や氷で説明できるものは全部あの子から出てきたものだともいえるのよね」

例えば、一樹の家には異様にボヤが多いのだという。多くは消火器で処理できる程度のものであるが、一度家が全焼したこともあるという。

その時の出火場所は、火とは全く関係ない靴箱からだった。

また、この周辺では度々水道管が止まってしまうことがある。一度原因を調べてみたところ、真夏であるというのに水道の一部が“凍結”し、水の流れを堰きとめていたかららしい。

「これらの事件はおそらく一樹君が原因だと言えるわね」

「……本人の意思なのでしょうか？」

不安げな遥の問いに、スガノは大きく手を振って否定の意を示し

た。

「まさか。火事や水道の騒ぎのほとんどで、一樹君は被害を受けているのよ。わざとやっているとしたら理由がないわ」

学校のボヤや、Ｔシャツの発火事件は、悪戯でやる範囲かもしれない。萱嶋家で起こっている事件はその影響は一樹自身に返っている。

よほど頭が悪くない限り、わざと、ということは考えられない。

「……一応、彼が人との接触を避ける理由、は判明しましたね」

「なるほど、大半はデマとはいえ、火があつたから煙が立ってたわけだ。一応根拠があつたから、みんな萱嶋を避けてたし、本人も周りに関わろうとしなかった。自分の周りで事件が起き過ぎていることは萱嶋自身が一番感じてたことだろうしな。……オーヴァードの世界にやよくある話だが、この場合はちょっとばかり不幸を堪能しすぎてるな」

だが、その不幸の原因の一つは強力なサランマンダーの能力である。これはU G Nで能力制御の訓練を受ければ解決できる問題だろう。議題には上がっていなかったがU G Nは早急に彼に接触し保護を申し出る必要がある。

「もう一つ、あの人格か……“モリト”についてはわからんままだな」

「そっちの方はまるで情報はなかったわね」

情報屋が肩をすくめながら、あっさりと認めた。

「ヒントがあるとすれば、あのビルなんだけど、これが全部ペーパー

「カンパニーでね。一応取引の記録とかはあるんだけど、全部あのビルの会社内で循環してるのよ。だから全体でみれば利益は出てなくて、法人税だけ納めてるわ。まあ、ばれにくくはしてるんだけど、会社を維持する手続きだけやってる感じね」

「登記簿はどうです？」

企業を立ち上げているからには法務局で商業登記を行っているはずだ。その中には代表の名前、住所などが記載されているはずだ。

「ダメ。全部名前だけ貸してる感じね。どこからか頼まれて、お金をもらってペーパーカンパニーを維持してるみたい。ヤミではそういう業者もあるのよ。ビル本体もU・G・Nが封鎖してるし……正直今のところお手上げね」

志波が覚えている限り、スガノという情報屋が「お手上げ」というのは二度目である。最初は、木島が失踪した時に調査を依頼した時だった。

あの時も、手がかりが全てまやかして、本当の痕跡は何一つ残されていなかったのである。

「ビルの事なら、上代に聞いた方がいいかもしれねえな。ちょうど謎の一つは解けたことだしよ」

そう言って、志波は、ハンガーに掛けた上着を取りに立ちあがった。

「ぬぬ……」

遥と志波が、現時点での報告にUGN江間支部の支部長室を訪れたとき、珍しくパソコンのディスプレイをにらみながら上代は唸っていた。

窓の外は既にとつぷりと日が暮れている。

「どうかしたのか？」

ひよい、と志波が上代がディスプレイを覗き込む。

「いや、このハートが4以上がどうしても積みあがらな」

「ダメエ、人が働いてるときにソリティアやってんじゃねエッ！」

それにも構わず、上代はカチカチと左上に詰まれた山札をクリックして、もう一回りカードをめくると、

「ダメだな、これは詰まってる」

と、肩をすくめて、そのゲームのウィンドウを閉じる。

「で、成果はあった？」

「一応、萱嶋君がどうして人を避けるかの理由は分かりました」

そういつて遥が、自分が学校で聞いてきた噂と、先ほど志波の探偵事務所でスガノから聞いた情報をあわせて、一樹の持つサラマンダー能力がいくつかの事件を起こし、それが火種になって他の事件

も一樹の所為にされたため、周囲も本人も、萱嶋一樹が周りのものを不幸にしてしまうと思い込んでいる、という旨の簡潔な報告を行う。

さすがに、このやる気のない支部長の扱いに関しては、志波よりいつも顔を合わせている遥のほうが一日の長があるようだ。

「よって、萱嶋君も他の人を不幸にしないように極力人に関わらないようにしているようです」

「もう一つの“モリト”って人格のほうは今のところは手詰まりだ。そっちはビルのはうは何か分かったか？」

「それがなにもわからないのよ」

まさかの無収穫宣言に、志波の眉根が寄せられる。

「まさか一日中パソコンで遊んでたわけじゃねえだろうな」

「俺もそこまで根気良くないよ。さすがに飽きる」

飽きなきややるのかよ、と言いたげな志波の目をよそに、上代は机の上においてあった資料を差し出した。

「遊んでたわけじゃないよ。今、シーレムビルには誰も入れないんだ」

「そりゃ、お前らが封鎖を」

「そういう意味じゃなくって、“危険すぎて誰も入れない”の」

ま、読んでみて、と上代が再度資料を示すと、遥がそれを手にとって音読した。

「現在シーレムビルには特殊な《ワーディング》が発生しており、中に入ったスタッフに急激な侵食率の上昇が確認された。通常の《

ワーディング』と違い、その中に入るとレネゲイドウイルスが異常に活性化し、一般人、オーヴァード関係なくジヤーム化してしまう模様……？」

実はオーヴァードというのは“病人”である。その病原体はレネゲイドウイルスというレトロウイルス（DNAを書き換えることのできる種類のウイルス）だ。

20年前に中東で見つかった遺跡から、世界中に拡散し、罹患者であるオーヴァードの数はその日を境に爆発的に増えることとなった。UGNという組織も、そのオーヴァード人口の増加に対応するように結成されたのである。

このレネゲイドウイルスが引き出す病気は、苦しみを患者に与えることはない。特殊な場合や精神的なものを除いて病気に罹^{かか}ることはまずない上、致命傷を負ってもあつという間に治ってしまう脅威^{リザレクト}の再生能力まで身についてしまう。

そして、その“症状”として発現するのが“エフェクト”と呼ばれる超人的能力である。

遥の異常な膂力、そして卓越した頭脳も、志波の電子を操り、物質を変化させる力も、レネゲイドという病気がもたらす症状なのである。

その症状の傾向、つまりノイマンやモルフェウスといった能力者のタイプを“症候群”^{シンドローム}と呼ぶのは能力の裏にそういった背景があるからなのだ。

そうして聞いていると、レネゲイドは超人になれるいいことずくめの病気ということになるが、やはり病気は病気である。

このレネゲイドウイルスに侵されると、常に悩まされるのが“ジヤーム化”への恐怖だ。

シーレムビルで戦った、人の形をしているのに人とは思えない者たち——ジャームも実はオーヴァードである。レネゲイドウィルスが全身、そして心まで侵食しきった時、オーヴァードは人からジャームへと変貌を遂げる。

ジャームは、心の欲求の赴くままに行動する。そこに倫理観や法律などの歯止めはかからない。他人の事を気にすることなく、自分が“そうしたいからそうするだけの存在”となってしまうのだ。

いったん人がジャームとなってしまうと、現在のところ人の心を取り戻すことはできない。つまり、ジャーム化した時、オーヴァードは人として死ぬのである。

この病の進行度合いはどれだけ身体をレネゲイドウィルスが侵食しているかを表す、“侵食率”であらわされる。侵食率は状況によって上昇したり下降したりするのだが、100パーセント以下に下がらなくなってしまうと、ジャーム化したと判断される。

オーヴァードはその超人的な力と引き換えに、自分が自分でなくなってしまう恐怖と戦うことになるのだ。

遙が読んだ報告書の意味するところは、ジャームでないオーヴァードにとって、毒ガスの充満する場所にマスクなしで入るようなものだ。

あのシーレムビルから大量にジャームが発生したのも、この現象が発生したときにシーレムビルに居合わせてしまったからであると考えられる。

「そんな《ワーディング》があるのでしょいか？」

「少なくとも今まで実例は報告されてないね。しかし俺達が強いジャームと会った時、レネゲイドが活性化することがあるでしょ？」

それと同じで、この《ワーディング》の発生源に対して俺達は無意識化で強く動揺しているんじゃないかな」

俺の推測だけどね、と上代は最後に付け加えた。

侵食率は動揺、怒りや恐怖、憎しみといった暗い感情を抱くことで上昇しやすいとされている。強敵と対峙する時など、緊張感や、敵対心などで心が満たされ、レネゲイドが活性化しやすい傾向にあるのだ。

「じゃあ、あのビルの中には誰も踏み込めねえってことか」

「ジャームを除けば、だけどね」

上代はまっすぐに志波に向かって言った。表面には出さないが、志波には強い衝撃が走っていることだろう。

あのシーレムビル前の戦いの時、“木島俊平はあのビルの中から出てきた”。ということは木島はすでにジャーム化している可能性が、ほぼ確定的と言っていいまでに高い。

「でも、いくらなんでも上昇しすぎじゃないですか？ この数字」

上代が遙達に出した資料では、中に入ったスタッフはほんの30秒中に入っただけで60パーセントもの侵食率の上昇をマークしたそうである。幸い、100パーセントを超える前に脱出したため、ジャーム化は免れたそうだが、ウィルスの鎮静化のためにしばらくは動けない状態だそうだ。

「ま、そうだろうね。俺もあまり認めたくないところだけど、他人のレネゲイドウィルスに関してここまで劇的な変化が起こせる実例がなくはないんだよね」

「実例？」

「それが妙な符号でさ、いやな予感がするんだけど、シーレムの綴り覚えてる？」

“実例”の話からそれていることを疑問に思っているのか、遙が上代に紙とペンを借り、『SHEREM』と大きく書いた。

「こうでした」

すると、上代はその紙を受け取り、その文字一つ一つから始まる矢印を描いていく。

「ちょっと調べてみたんだけどさ、SHEREMって単語、どの言葉にもないのね。人の名前というわけでもなさそうだし、どこから来たのか気になってさ。アナグラムを試してみたわけ」

そして、矢印の先にその元になる文字を書き、並べ替えた後の単語を示した。

「『HERMES』……だと!？」

「あの“銀なる石”事件のですか？」

“銀なる石”事件は、近年起こったオーヴァード事件の中で最も大きなものの一つで、大人のオーヴァードなら誰でも知っているほど有名な事件である。

レネゲイドウィルスが鉱石状に結晶化したものを“レネゲイドクリスタル賢者の石”と呼ぶ。この賢者の石はオーヴァードの力を強化する石であり、数々の事件のキーとなった非常に重要で扱いの難しい石だ。

“銀なる石”は他に例を見ない特殊な賢者の石と考えられている。

これを作り出したのが『ヘルメス』というレネゲイド関連の研究集団である。彼らの目的は、オーヴァードの力をさらに極限までに高めた存在“プライメイト・オーヴァード”の創造にあった。その

過程で生まれたのが“銀なる石”だ。

“アルス・マグナ計画”と銘打たれたその研究は、やがて一つの誤算から、一人の人造生命体を生みだすことになった。その人造生命体はプライメイト・オーヴァードとなるべく、“銀なる石”の受け皿となるべく作られた。

しかし、本来自我を持つはずのない人造生命は、“銀なる石”の影響によって意思を得て、計画に反発し、“銀なる石”の圧倒的な力を持って、ヘルメスの研究所は壊滅させられたのである。

その人造生命体は“鴉”^{カラス}と名乗り、研究所の崩壊後、しばらくして全てのオーヴァードからレネゲイドウィルスをなくすために、活動を始めた。その過程で、東京近郊の臨海都市である鳴島市を中心に起こったのが、一般に言われている“銀なる石”事件である。

事件の最後には“鴉”は、“銀なる石”で、ほぼ完全に近いプライメイト・オーヴァードの力を手に入れ、“中にいるものからレネゲイドウィルスを抜き出す《ワーディング》”を広範囲に展開し始めたのである。

それだけならこの世からレネゲイドウィルスがなくなって全てが終わるはずだったが、レネゲイドウィルスを抜き出す際に、身体に大きな負担をかけ、約6割のオーヴァードが死亡してしまうことから、UGN鳴島支部のメンバーを中心としたエージェントに“鴉”は倒され、この事件は幕を閉じたのだった。

この事件で重要なのが、プライメイト・オーヴァードの力の一つとされる“他者のレネゲイドウィルスの操作”であり、最後に展開された“中にいる者からレネゲイドウィルスを抜き出す《ワーディング》”だ。

「起こっている現象はまるきり逆だけどね、イヤな符号でしょ？」

「……まさか、あの中に“銀なる石”があるってのか」

「状況証拠すらロクにない思い付きだから、可能性がくはないってレベルだけどね」

「いや、案外当たっているのかもしれないね。少なくとももう一つ符号があります」

そう発言したのは遙だった。彼女は資料を真剣な表情で眺めながら言った。

「その事件を引き合いに出すと、“モリト”に関しても、戦闘用人格でない、もう一つの可能性を示すことができるんです」

「そのココロは？」

「協力型レネゲイドビーイング”です」

“レネゲイドビーイング”とは、レネゲイドウィルス自体が意思を持つ生命体を指す。通常は、ウィルスに侵されてオーヴァードとしての力を得たとしても、あくまでその力を使う意思はウィルスに侵された者自身であるが、レネゲイドビーイングはそうではなくウィルス自体が意思を持って能力を使う。その存在はヒトを指すヒューマンビーイングに対応して、レネゲイドビーイングと呼ばれることになった。

レネゲイドビーイングの在り方には三種類ある。自身の肉体を持つ“独立型”、媒介となる人や物を乗っ取って使役する“支配型”、そして寄生してその本来の持ち主と身体を共有する“協力型”だ。

三つ目の“協力型”は宿主と共生するレネゲイドビーイングの人格が入れ替わる様が戦闘用人格と似ており、今回のケースに当てはまる。

なぜ、レネゲイドビーイングが前述の“銀なる石”事件に関係す

るのかというと、事件の中心である“鴉”がレネゲイドビーイングと考えられていることと、この事件の中心人物となったオーヴァードの少女にも協力型レネゲイドビーイングと考えられる“三郎”と呼ばれる存在が一緒にいたことが報告されていたためである。

「なるほど、今回初めて“モリト”が出てきたのはシーレムビルとの戦いときに初めて萱嶋君と“モリト”が接触したからか」

シーレムビルがヘルメスの建物だとしたら、“モリト”はそこで何らかの目的をもって創られていたとも考えられる。そこにあの騒ぎである。

あの事件がヘルメスにとって誤算だったのか計画のうちだったのかは分からないが、とにかく事件によって実験体である“モリト”が研究所の外に出たところに萱嶋一樹というオーヴァードがいた、と考えるのが自然な気がする。

「だとすればビルに入れない今、一番の木島の興味の対象って萱嶋じゃねえのか。確か木島は“モリト”を知っているようなことをいつてたぜ」

「確かに言っていましたね」

「俺も聞いたよ、そういえば」

その時、支部長室の電話が鳴り響いた。

上代は、音とともに光る外線のランプを、数秒見つめ、遥と志波に向かって言った。

「どうしよう、悪い予感しかない」

どうやら、話しているうちにモリトの常識が相当昔のものであるということが分かってきた。

『あの、絵が動いている箱は何かね？』

『なんと、火を使わずに部屋をここまで明るくできるのか』

『この苦い飲み物は茶か？ 茶にしては黒すぎるが』

『高い建物だ。よく倒れないものだな』

『あの牛車は牛が中に入っているのかね？ それにしても早い牛なのだな』

『あの娘達のひらひらした衣服のすそは短すぎないかね。脚が丸出しではないか。そもそも、何故娘たちが家の外まで出てきているのだ？』

などなど、今朝登校してからは、一樹の頭の中からはモリトの驚きの声が絶えない。一樹としては疑問に思ったことがないことまでいちいち驚くので、新鮮だったが、あまりに続くので少し疲れてきたくらいだ。

その時代が特定されたのは、歴史の時間だった。歴史の教科書をモリトの望むままにパラパラとめくっていると、『む、これは都のことだな』^{てんぎょう}と言いついたのが平安京のページである。

年号は「天慶」^{てんぎょう}までは知っていたが、「天曆」^{てんりやく}を知らなかったことから938年から946年の間、平安の最初期、朱雀天皇の時代がモリトの最後の記憶のようだ。

ただ、知識はあっても経験的な記憶は全く失われているらしい。歴史的に何があったかは覚えていても、自分がどう関わったかは全く覚えていないようだ。

場所的にはモリトは関東で多くの時間を過ごしていたようだった。相模、武蔵などの国の事はよく知っていても京の都の事は、詳しくは知らなかったからだ。関東を制圧し、朝廷に反旗を翻して独立王国を築いた平将門の乱についても詳細をよく知っていた。

「つまり、モリトは平安時代に生きた人の幽霊？」

『幽霊なら、死んだときからずっといるものだし、記憶ももつとあるのではないかと思う』

「じゃ、転生？　こう、記憶を持ったまま生まれ変わる、みたいな」
『それなら肉体もなければおかしい』

とりあえずの二人の話題はモリトの正体だった。ひょっとしたら、UGNの誰かに聞けばもう少しわかるのかもしれないが、本当のところはどうだっていいのだ。こうやって事実を重ねて考えることが面白いのである。

人と話すのがこんなに楽しいとは思わなかった。

一樹は今まで「他人と関わってはいけない」というプレッシャーの下で生きてきた。父親を含む、誰と話すときも本当に必要なことなのか吟味して会話をしていたのだ。

ところが、モリトは生物学的にはヒトではない上、いやでも四六時中一緒にいるような状態だ。一日以上経過した今となっては、一樹はモリトに関しては“どのみち関わりを避けることができないのだから”と半ば開き直りのような心理で、言葉を選ぶこともなく、気軽に話すようになっていく。

そうして、必要なことも不必要も思うがままに話すこと、それは一樹にとって初めての喜びだったのだ。

『そろそろ宿題に手をつけなければならぬのではないか？ 確か数学と古典で出ていただろう？』

「そうだね」

学校の授業中は、さすがにモリトも黙っていたものの、その内容は初めて知ることばかりであつたらしい。元から持っていた知識と知性で、それを感じることはできないが、平安時代までの古典や歴史以外は、全く無学な状態だつた。

宿題を勧めたのも、じつくりと教科書を読みたいからではないだろうか。

どのみち宿題はしなければならないので、ベッドから降りて机に向かおうとした、その時だつた。

窓も開いていないのに、急に風が通つたように体感温度が下がり、鳥肌が立つ。

一樹は、この感覚をつい昨日経験したばかりだつた。

『む、結界が張られたな』

「またあの怪物が出てくるんじゃない……」

「ああ、そうしても面白かつたかもしれねえな」

不意に窓のほうから声をかけられた。反射的にそちらに視線をおくると、そこには男が一人立っている。Ｔシャツに迷彩色のカーゴパンツのミリタリースタイル。

間違いない、あのシーレムビルるときにただ一人出てきた男、木島俊平だ。近くで見るとひよろりとした細身だがその身は堅い筋肉で引き締まっているのが分かる。

「……僕に、何か用ですか？」

いやな予感しかしない中、緊張で声が出てこず、一樹はやっと適当な言葉を搾り出す。

木島はさすがと土足で室内を横切り、ベッドに腰掛けて煙草に火をつけた。立ち上り始める紫煙に、一樹は特に隠さず嫌な顔をする。

「お前のこと、少し調べさせてもらったぜ。なかなか不幸じゃねえか。俺もオーヴァードの世界に足を踏み入れてそれほど経ってねえが、自分の持つてる能力で不幸になったやつはたくさん知ってる。友人に裏切られたり、家族に化け物扱いされたり、な。お前の場合あんまりハッキリしなかったのが不幸に拍車をかけてるな。わけもわからず“近づくと不幸にされるぞー”って避けられてよ」

「だから、僕に何か用ですか？」

答えになっていない、と暗に意味をこめて、一樹はもう一度、少し語調を強めて質問を繰り返した。

おっと、と木島は、大人しそうな一樹が見せた激情の一端をあざけるように両手を軽く挙げて制すと、ベッドのサイドボードに置かれていた珈琲カップに勝手に煙草の灰を落とす。

「いやあ、不幸な萱嶋一樹くんを応援してやろうと思ったのさ」

「……応援？」

「そう、お前は友達もいない、家族も、ありやいないに等しい。人間関係的にお前は居場所がないだろ？ “俺たち”に協力してくれたら、そいつを作ってやろうってんだ」

「つまり、居場所が欲しければあなたたちに手を貸せ、というのですね？」

「わかってるじゃねえか、俺たちにはお前の力が必要なんだよ」

今まで気にしていないふりをしていたが、実は一樹は自分はいま恵まれていないのではないかと疑問に思っていた。だれも、自分を好意的になど見てくれない。

一樹が人間関係を避けるのは、自分が迷惑を掛ける危険もさることながら、決定的に嫌われるのが怖かったという理由もあるのである。

必要とされている。

その事實は、どれだけ嫌な相手でも一樹の心に揺らぎを与えるのに十分だった。

『誘いに乗るな。奴があビルで何をしたかを思い出せ』

その揺らぎを見抜いたのか、耳元でモリトの声がして、一樹ははっと我に帰った。

そうだ、あのビルの惨劇を生み出したのは、おそらくこの目の前の男だ。彼に協力するということは、あの事件に類することを手伝わされるということを意味する。

「お断りします。犯罪の片棒を担ぐなんて冗談じゃない」

「いいや、犯罪じゃないね。俺たちがやっていることが計画通りに行けば、“全てのオーヴァードが居場所を得ることになる”。俺たちのしていることは感謝されるべきことなんだぜ」

「信じられません。少なくともあのビルの出来事でもたくさん人が死にました。いくら居場所を作るためとはいえ、あれほどの犠牲を平気で出すなんて」

「一般人はいいんだよ。アレは俺たちを排斥する側だ。だから、UGNだってオーヴァードの存在を公表していない」

確か上代もUGNの目的は一般人からオーヴァード関連の事件を遠ざけることにある、ということを書いていた。

そう考えると、UGNがオーヴァードの存在を隠すのもわかる気がする。何しろ、オーヴァードと呼ばれている者たちの戦闘能力は一般人ではまず対抗できない。そんな化け物のような存在が、自分たちの中に隠れているとわかれば、気が気でないだろう。

初めて入った大陸で、キリスト教徒達が聖書にない生物を見た時、恐怖のあまりその生物を殺して回ったのと同じように、一般人がオーヴァードの存在を知れば、オーヴァードを探し、排斥し、あるいは弾圧するのかもしれない。

「ま、UGNが隠しているのは正解だと思うぜ。今のまま公表してもオーヴァードにとってロクなことにならねえ」

「だったら何であんな目立つような真似を？」

「言つたろ？ オーヴァードの居場所を作るのさ。公表しても、一般人に排斥されねえような状況を作つてな」

「どうやって？」

「そいつは秘密だ。俺たちに協力するつてんなら教えてやつてもいいぜ」

一見、「オーヴァードの居場所を作る」というのは行動指針として立派なように聞こえるが、木島のこれからしようとしていることは、あまりいいことに聞こえない。

「言つたでしょう、お断りします、と。あなたこそ、人に危害を加えることなんて止めてください」

毅然とした一樹の答えに、木島は理解しがたいものを見るように眉をしかめて見せた。

「思ったよか頑固だねえ、お前さん。一般人が、俺たちオーヴァー
ドをどう見るかはともかくよ、何でお前が一般人をなんでそんなに
気にすんのよ？ くっだらねえ噂広げてお前を不幸にしてる張本人
だろうが」

昨日、今日で分かったことだが、母親が死んだことや不審火の類
は確かに一樹に起因するものらしい。だが、それ以外は全て、気味
悪がられて疑われやすくなった一樹に濡れ衣を着せたものらしい。
それは、一樹がどのみち証明できないと、大して弁明をしなかつ
たのもあるが。

一樹が無反応なのを見て、木島はにやり、と口元をゆるめて言っ
た。

「大体、あの父親もひでえもんだ。家つてのは、こうもつとあつた
けえモノだろ？ ところがお前の親父さん、ロクにお前さんと話し
たりしねえし、召使い同然に扱ってるらしいな」

ぞくり、と一樹は自身の中を何かが走るのが感じられた。

「でも義理堅いんだねえ。愛する妻を殺して、時々ボヤ騒ぎを起こ
す息子を抱えてよ。あれも“義務感だけで”、父親やつてるって感

——」

その時、木島の加えていた煙草の火が、不意に大きくなり一気に
燃え始めた。木島はあわてて煙草を取り落とすが、煙草は床に着く
前に燃え尽き、灰となる。

「これ以上、話すことはありません。帰ってください」

「おろ？ 怒ったか？ 父親の話をしたから？ お前、やっぱりそれなりに――」
「帰れッ！」

今度は一樹から直接炎が上がり、木島に襲いかかった。ところが、木島はにゆるり、と身体の輪郭をゆがめるとその炎をかわす。

『一樹、落ち着け。力が漏れているぞ！』

「おお、すげえ炎だな。怒ると出てくるのかい。なかなかいねえんだぜ、そんなでたらめでエフェクト出せるやつ。やっぱりお前って」

――平気な振りして、父親にさえ愛されてねえのが辛いんだろ。

「黙れええっ！」

また炎が上がる。木島に向かってではない、一樹を中心に炎が渦巻いているのだ。先ほどの攻撃は一瞬だったので燃え移ることはなかったが、流石に今度は布団や紙類から燃え始める。

「おっと、ちょい揺さぶりすぎたかね、もう話聞ける雰囲気じゃねえみたいだし、今日はお暇するか」

ひよい、と広がる炎をバックステップで避けると、窓をがらりと開け、窓枠に足をかける。

「あーあ、部屋が燃えまくってんじゃねえか。また親父さん痛手だな」

からかうような言葉に、一樹が木島を睨みつける。炎はその意識に従うように木島に襲いかかった。

だが、木島はひよい、と窓の外に一度ぶら下がって炎をよけて見せる。

そして、自分を睨みつける一樹の視線を正面から受けて続ける。

「これだけは言うておくが、もうお前はオーヴァードなんだ。オーヴァードが普通の人間と混ざって暮らしていくことなんかできねえよ。今のお前自身がそれを証明してるじゃねえか」

その言葉を最後に、木島は窓の外へと跳躍し、夜の闇の中に姿を消した。

問題は、木島が去った後だった。攻撃対象であつた木島が去つても一樹の能力の暴走が止まらないのだ。

「こ、これどうしよう、モリト！」

『心を鎮める。今、この能力は君の感情に応じて大きさを変えている。君が落ち着かなければ炎も収まらないぞ』

そう言っている間にも、机に、ベッドに、タンスに次々と火が燃え移り、部屋全体が炎に包まれている。一樹自身もその炎に焼かれて多少の火傷を負っていた。

がちやり、ドアの開く音がした。火がはじける音、火が起こす熱風の音が耳をつく中、その音はやけに一樹の頭の中に響いた。

開いた扉の向こうに立っていたのは――

「と、父さん」

「一樹……！？ これは……」

父・大樹は目を見開いて一樹の部屋に視線をめぐらす。それは、一樹を中心に炎が渦巻き、そこから部屋中に飛び火しているという光景だ。常識的にあり得ない、どう判断してよいかわからないのだろう。

「くっ」

やがて、大樹はずかずかと燃え盛る部屋の中に踏み込んだ。

「……!？」

危ない、と父親を留めようと、声を出そうとした時、不意に大樹の体から力が抜け、その場に崩れる。

「やれやれ、無茶するね」

崩れ落ちる大樹の身体を支えて言ったのは、外套にシルクハット姿の男だった。

「あなたは確か、“ウィザード”」

崩れ落ちたのは彼が《ワーディング》を張ったためらしかった。

「やあ、萱嶋一樹君！　みたところ、ちょっとばかり大変な状況になっているようだねー。積もる話もあるんだけど……とりあえずこの状況を何とかしないとね」

相変わらず、妙にテンションが高い様子でそう言うと、ウィザードは右手を挙げてパチン、と指を鳴らした。その音波に乗せられる

ように冷気が波状に広がり、燃え盛る炎をその低い温度をもって消し止めていく。それは一樹が発していた炎も同じだった。

炎が収まると、その場が静まり返り、静寂が戻る。半焼した一樹の部屋とは裏腹に窓の外に広がる光景は、それが当然であるかのように全くいつも通りの風景が広がっていた。

状況が終わったことを知ると、一樹はその場に崩れ落ちるように膝を落とす。

膝をついたまま、一樹は焼け焦げた部屋を見回す。一樹はあまり自分のものを持っていなかった。だが最低限のものとして与えられた勉強机やかばん、衣服、教科書がみんな燃えてしまった。それも自分の出した炎が全て燃やしてしまったのだ。

——もうお前はオーヴァードなんだ。オーヴァードが普通の人間と混ざって暮らしていくことなんかできねえよ。今のお前自身がそれを証明してるじゃねえか

木島の言葉が胸に刺さる。

「……落ち込んでるね」

そこに声を懸けたのがワイザードだった。

「これが……オーヴァードの力なんですか……？」

「君の場合は少しばかり強力すぎるけどね。もうわかったと思うけど、これまでの君の不幸の原因はその能力が原因だ」

母を失ったのも。

そのために父親に冷たくされるようになったのも。

そして、周りの人々に避けられて生活することになったのも。

「結局は原因は僕……だったんだ」

「正確には君の力だ。そこで本題に入るんだけど、君、僕の弟子になりなよ」

その、ウィザードの提案に、一樹は俯けていた顔を上げる。

「僕なら君にその力の制御を教えてあげられる。力を制御してしまえばさつきみたいに力をあふれさせて、望まない破壊をすることもなくなると思っただけだ」

言いたいことを言っただけを待っているのか、それからしばらくウィザードは黙ったまま一樹を見つめる。

『いい話ではないか？ 少なくとも君の力とこのウィザードとやらの力は酷似している』

今まで二度、ウィザードが能力を使うのを見たが、両方とも氷や炎の技だった。つまり、能力的には一樹とウィザードは一致しているわけだ。ウィザードが一樹を弟子に言い出したのも、能力が似ているからなのだろう。

しかし――

「それは……できません」

「何故だい？ 今言った通り、君の不幸の原因は君の力だ。制御できれば、その不幸は取り除くことができるんだよ？」

「ダメです。……僕は、誰とも関わっちゃいけないんだ」

それは理屈ではない。積み重ねられてきた一樹の心だった。幼い

ころから、近づけば不幸になると言われ、極力人との関わりを避けてきた。

長い間そうしてきた。そして人と関わることは、一樹の心に刷り込まれてきた、侵しがたい禁忌^{トラウマ}なのだ。

「勘違いするんじゃない」

不意に頬に衝撃が走った。じん、と熱を帯びたところで、一樹はウィザードに頬を打たれたことに考えが至った。ウィザードを見ると、テンション高くいつも笑みを浮かべてた口が堅く引き結ばれている。

「これは必要なことだ。君はこのままでは周りに迷惑をかけ続ける存在になる。他人が怖いからって、力を制御する訓練から逃げ出すことは僕が許さない。言っておくけど、これは君の意思がどうだろうと関係ない。君が逃げても追いかけるし、力づくでも訓練はしてもらうよ」

そう言っ、本気だということを見せつけるように、目の前の男は手の中で炎を生みだして見せた。

「で？ 一応聞くけどどうする？」

ウィザードは出した炎を握りつぶしその手を一樹に差し出す。

他人から手が差し出されたのは初めての事だ。だから、一樹は少し頭が真っ白になっていたらしい。気がつく^と差し出されていた手を、目を丸くして見つめていた。

初めての事でも、こういうときはどうすればよいかは知っている。

ゆっくりと右手が持ちあげられ、一樹はウィザードから差し出された手を握り返した。

不幸への転落とはあの日の萱嶋大樹の事だった。ようやく口説き落とし、大事に大事にはぐくんでその末の結婚が暗いものであるはずがない。

愛する人とともに暮らす幸せ、それは日に日に積みもり、喜びはより大きなものへとなっていく。子供ができたとき、そして子供と暮らす未来を妻と一緒に考えたあのころは間違いなく人生最良の日々だった。

もちろん現代になっても、出産が命がけのものであると認識していた。しかし、直前の検査でも異常はなく、何もかも順調で無事に出産を終えた後、家族3人そろって未来を疑うことはなかった。

——あの瞬間までは。

その年で初めて雪が降った日だった。真つ暗闇の窓の外、ちらちらと大きな牡丹雪が落ちていくのを眺めながら大樹は分娩室の前で赤ん坊の産声が上がるのを待っていた。

重々しいステンドレスの扉の奥で、妻が陣痛に耐えて頑張っているのが信じられないくらい静かだった。外に降る雪もその静寂を作るのに一役買っていたに違いない。

自分が生まれた時もそうだったのだろうか。すでに亡くなった父母の顔を思い出す。彼らにとっては初孫だ。生きていたらうっとうしいくらいに可愛いがられていただろう。

その様子を想像して、ふっと笑った時、静寂は切り裂かれた。期待していた産声ではなく、悲痛な叫喚だ。

思わず大樹は分晩室へと踏み込んだ。バタバタと医者、看護婦が駆け出してくるとともに大樹を異様な熱気が包み込んだ。中が赤く揺らめいている――部屋の奥で何が起きているのか、はすぐに分かった。

先ほどすれ違った人の中に妻の姿はなかった。そのことが、炎の上がる部屋から逃げ出そうとする人間としての本能を忘れ去り、奥へと足を進めさせた

分晩室の奥には寝台があり、その上に人影が見える。炎に包まれ、影しか見えなかった。

思わず妻の名を呼んだ、すると炎の中の影は苦しげに身を震わせながら起き上がる、

目があった。大樹の背筋に寒気が走る。輪郭すらはつきりと見えないのに眼だけはやたらとはつきり見えた。その瞳には苦痛、悲しみ、絶望、今まで妻が見せたことのない、強く、暗い感情に満ちていた。

口が動いた。声が出ないのか、耳にはどんな言葉も届かない。その動きははつきり見えたが、何を言っているのかはわからなかった。

最後に手が動いた。緩慢な動作で、大樹の方に伸ばされる、その手を取らなければと、彼は思ったが体が動かなかった。差しのべられた手の向こうに先ほどから見つめあったまま動かない瞳が見える。

茫然としたまま、いくらかの時間が過ぎた。炎の中の影の目はゆっくりと閉じられ、最後に、伸ばされた腕も力なく下ろされる。

不意に大樹自身の周りに煙が立ち込め、立っていられなくなった。せき込みながらうずくまると、意識を保っていられなくなる。

妻が死んだのは直感的に理解した。もう、あの幸せの日々は戻ってこないのだと。だとしたら、もう死んでもかまわない。大樹はそう考えて、目を閉じ、意識を手放した。

炎に包まれる分娩室に赤ん坊の産声が響いたのは、その時のことだった。

「父さん」

目を覚ました大樹に声を懸けたのは、この17年間できるだけ見ないようにしてきた一人息子だった。

一見病院だが、それにしては目に映る施設が貧相な気もする。どこかの施設の医務室といったほうが納得できる景観だった。

窓の外が見えたが、真っ暗だ。サイドボードにおかれた時計は1時を回ったところで、自分が気を失ってから4時間も経っていないことが見て取れた。

火災の夢を見たせいか、喉が渴いた、とおもつと一樹が水差しからグラスに注いだ水を差しだしている。大樹は礼も言わずに受け取ると、その中身を一気に飲み干した。

「あ、目覚められました？」

一樹は一人ではなかった。その後ろに背広姿の男がパイプ椅子に座っている。なぜか手に携帯ゲーム機を持っているが、やる気のなさそうな目のせいか、とくに不自然そうには見えない。

「あ、ちょっと待ってくださいね。今セーブしてしまうので」

「それは私がやっておきますから、早く話して下さい」

そう言って、秘書のように彼のそばに立っていた女性が携帯ゲームをひったくる。

「私はユニバーサル・ガーディアン・ネットワーク
UGNの上代と申します」

そう言って名刺を差し出してくるが、その名刺には全く違う企業の名前が書かれている。秘書風の女性も同じ組織の南野と名乗った。

「事情がありましたね。本来の役職は名刺には書けないのです。その連絡先で私共に通じますので、連絡がしたい場合は、そちらにお願いします」

「ユニバーサル・ガーディアン・ネットワーク……とはどのようなお仕事をする企業なのですか？　なにやら私の息子が迷惑をお掛けしてしまっているようですが」

「とんでもない。むしろ迷惑をおかけしたのはこちらの方で。……」

萱嶋さんは気を失うまでの事を憶えておられますかね？」

無論だ。おかげで要らない悪夢まで見る羽目になった。

「四の五の説明するのは面倒……じゃなくて苦手なので結論から申し上げます。貴方の御息息である一樹君は普通の人間ではありません。オーヴァード、と呼ばれる超能力者です」

そこから、オーヴァードとはレネゲイドウィルスという病原体に侵された人間であること、レネゲイドウィルスが活性化したまま固定されてしまうことでジャームと呼ばれる化け物に変化してしまう可能性があることなどを簡単に説明する。

「今回、私共が一樹君を認識するにあたって、少し周辺を調査させていただきました。……無論、奥様のことも含めて。薄々お気づきかもしれませんが、これは強力すぎる一樹君の能力が漏れ出したものだとお考えください。ここで大事なのはこれは病気の引き起こした結果ということで、そこに一樹君の意思はない、つまり一樹君には責任がない、ということになります」

そこで、上代は反応をうかがうように、大樹に視線をよこす。だが、災厄の中心だった少年の父親はまったくそれを受け止めるだけで、特に反応を返さない。

「本来、私も、このオーヴァードの存在の事実を、一般の方には知らせることはありません」

そこで南野がフロアに入った。

大樹にレネゲイドの真実を知らせる選択肢をとった意味である。本来のUGNの方針からすれば身も心も一般人の大樹がオーヴァードの事件を目撃してしまったわけだから、記憶処理を施して事件のことは忘れさせてしまふところだった。しかし、上代はその選択肢を取らなかった。つじつま合わせが面倒くさいから、とやる気のない支部長はおどけて言っていたが、これは明らかに一樹の状況を配慮してのことだった。

「この話をしなければ、貴方はご子息の事を誤解したままになる。オーヴァードは他にもいますが、大半は家族を何らかの形で失っています……。なるべくなら一人でもそうした人数は減らしたい。そう考えてお話ししました」

「……オーヴァードとやらの家庭問題を解決するのがUGN、ということですか？」

大樹の質問には上代が答えた。

「私共の活動は全てのオーヴァード関連の事件の処理と、オーヴァードの保護・支援にあります。何しろオーヴァードがジャーム化すると、現状ではもはや“処分”……つまり殺害してしまうしか対処法がありません。またジャーム化したオーヴァードは一般人に甚大な被害を与えうる、大変危険な存在だからです。」

そのため、私もは把握しているオーヴァードだけでも、ジャーム化しないように手立てを打っていく必要があるのです」

「……話がつながらない。何故、ジャームとやらにしないようにするために、息子に対する認識を改めようとしているのです？」

「いい質問です」

待っていたかのように上代が笑みを浮かべる。

「レネゲイドウィルスが活性化し、オーヴァードがジャームに近づくのは、“日常から離れたとき”です。例えば、今回のようなオーヴァード絡みの事件。これは非日常の世界に身を投じて事件に当たるわけですから、当然日常から離れることになります。」

あと、もう一つ例をあげると、オーヴァード本人が日常の世界を拒否するときですね。“あまり日常でいいことがないと、人は非日常に逃げたくなる”。辛いことがあるとお酒を呑みたくなくなるというのに似ています。オーヴァードの場合はその度が過ぎると、今までの人間関係も、思い出も、そして倫理観もなく、ただ自分のやりたいことだけをやる化け物になってしまうのです。」

余計なお節介かもしれませんが、あなた方親子の関係は、お互い辛い思いをしていると思います。私共はこの家庭環境は、少し危険だと考えている」

それでも一樹がジャーム化しなかったのは、本人のポジティブな

性格・思考もあるが、自分がオーヴァードであるということに自覚がなかったことにある、と上代は考えている。ところが、今回一樹がが巻き込まれたシーレムビルの事からで、一樹は自分がオーヴァードであると知ってしまった。

それによって、レネゲイドウィルスが刺激されて能力がより強大化し、今夜のような事件がおきてしまったのだ。

「レネゲイドウィルスが活性化したとき、沈静化を図るためには日常における人間関係が大切です。しかしながら、今までの経緯で一樹君に関わられている方はあまりにも少ない。だから、父親である貴方には、一樹君を日常につなぎとめておける存在になっていただきたいのですよ」

上代は、最後の下りの説明の間、大樹の目をじっと見つめていた。そして、大樹はすい、と視線を外してしまう。

「私には自信がありません。別に一樹のことを憎んでるわけじゃないが……どう扱っていいかわからない」

一樹がただの人間でないことは、大樹にはよくわかっていた。家で起こるボヤ騒ぎ、水周りの凍結。これらの現象の原因が一樹にあることはわかっていた。

怒らせる、悲しませる、楽しませる、いかような感情の起伏でそれが起こるかは分からない。だから、大樹はなるべく一樹に触れなかった。

「萱嶋、手を出してくれ」

上代は、一樹に向かってそういった。そして、それを大樹の目の前に出させる。

「まずは触れてあげてください」

差し出された手を見た。その手の先に一樹がまっすぐに自分を見つめる目がある。

あの時と同じだ。炎に包まれた妻の手と、その向こうにある目。

あの時は体が動かなかった。

手をそろりと動かし、一樹の差し出された手に近付けていく。一瞬、一樹の手が炎に包まれている光景が脳裡をよぎり、目の前が真っ赤になった気がする。

差し出された手を握ろうとする手が、直前で動かなくなった。まるで、そこに壁があるかのように。

触れる直前で止まった手を見て、一樹の表情が目に見えて沈んだ。

——私に拒否されるのがそんなに哀しいのか。

今までもろくに話さず、他人に限りなく近い関係だったというのに。

視線を交わすのが精一杯のまま、時間だけが過ぎていく親子を見かねたように上代が言った。

「……貴方がた親子には少し時間が必要なようだ」

そして、一樹の肩に手をかけて見せる。

「今ので、考えが固まりました。御子息は一時私共で預からせていただきます」

「……そちらで？」

「先ほどもお話しした通り、一樹君はとても強い力を持っている。そして今夜のように暴走する危険を常に孕んでいるわけです。そこで、能力を制御する訓練を受けてもらう予定です。こちらから通うことも可能ですが、貴方がたは少しの間離れていたほうがいいと思いますので、訓練の間、一樹君には私共の施設で預からせてもらいます」

そのまま頷いてしまうのは冷たいと感じたが、引き留める資格は自分にはない。

「……息子を、よろしくお願いいたします」

せめてもの、と大樹はできるだけ深く上代に向かって頭を下げた。

「父さん」

一樹が大樹に話しかける。不意のことで大樹はやや慌てて顔をあげた。

「あの、えーと」

目が合って話そうとしたことを忘れてしまったらしい。しきりに目を泳がせたあと、照れた様子でたった一言だけ言った。

「行ってきます」

だから、大樹も一言だけ返した。

「気を付けてな」

上代と一樹が合流したのは、ウィザードによって一樹の暴走がおさめられたそのすぐ後だった。そのころには一樹はウィザードの弟子となってレネゲイドの制御を学ぶ決意を固めていた。やはり能力の暴走を目の当たりにし、自分の危険性が身にしてみたからだろう。ちなみに、一樹と一緒にいたウィザードはどうしたかというと、現場を後処理部隊に任せてUGN江間支部に向かう途中で別れてしまっていた。これから一樹に能力の制御を学ぶ師匠になることもあり、父親に挨拶して然るべき立場であったが、一般人の前には極力姿を現さないポリシーから途中の道で別れてしまっていた。

UGNで一樹の面倒を見るにあたって、彼をどこに住ませ、父親の説得はどうするかを上代は考えた。考えた末に出たのが先ほどの父親へ真実を話す道だった。

受け入れなければUGNのほうで一樹を預かる。受け入れるのなら自宅からUGNのほうに通えばいいと考えたのだった。

「らしくないことをしましたね」

「本当、よくこんな面倒事を引き受ける気になったよ」

一樹を連れて医務室を出た後、足跡が響く夜の廊下で、南野がかけた言葉に上代は答えた。

一般人にレネゲイドの真実を教えるというのはUGNの活動上、知っている人間を管理しなければならぬため、非常にめんどろな手続きがある。

また、下宿も世話しなければならぬえに、ここまで首を突っ込んだからには、萱嶋親子を当たり前の関係にしてやるために最大の努力はしなければなるまい。

南野が言った通り、オーヴァードは家族を失っている場合が多い。そして、その大半は死別したり、あるいは決定的に拒否されたりで、もはや関係の修復が不可能になってしまっている。

上代が父親に告げた、一人でもそういったオーヴァードを無くしたいというのも、本心だが、それ以上にまだ繋ぎとめられる親子関係を放っておけなかったのだ。

「萱嶋。噂で言うほど、親父さん、お前さんを嫌ってるわけじゃないらしいね」

「そう……ですか？」

少し自信がなさそうに一樹は言った。

「ウィザードから聞いたが、今夜の事件のとき、お前さんを連れ出そうと炎の中に飛び込もうとしたらしいし、何度もボヤだの水道管の凍結だのやられても、一度も手放そうとしなかった。普通なら気味が悪くて一緒に暮らせないよ」

調査では父親は一樹に家事の一切をやらせていたようではあったが、殴るなどの虐待を加えたという情報はみつからなかった。あるいはどこかに預けてしまうなどして、手放してしまう手もあった。しかし、実際はそうではない。

父親だから仕方なく、ということもあったかもしれない。

妻を失わせた原因であることは確かであり、そのことを恨んでいたことも事実だろう。

それでも、そういった感情を表にすることなく一樹をここまで育てたのは、それらを押し退ける何かがあったからなのだ。

「ところで、萱嶋君の下宿はどうするのですか？ 上代さんがされるというので、私は手配していませんが」

話が一区切りついたところで南野が尋ねた。

「ああ、それなら心配ご無用。これから送って行くところさ」

そう言つて上代は何やら含みのある笑みを浮かべる。

ただでさえ、面倒なことは徹底的に避ける上代が、わざわざ本来南野がやっている仕事をやったというのだ。そんな上代の腹に一物がないわけがなかった。

——同時刻。江間市のオフィス街。

街頭が照らすさびしい夜道を、一人の男性会社員が歩いていた。街路樹を植えたまっすぐな道路を挟むオフィスビル群は静まり返っている。

江間市は紡績が盛んな都市だった。江間市のある盆地は良質な桑畑があり、蚕を育てるために使われている。養蚕農家は朝が早く、夜も早い。蚕から採れる生糸を扱う卸売商社は、朝は普通だが、その分夜は遅く、時期によつては仕事が終わる時間が10時を回る。そろそろ終電の時間が近い、その男性会社員は仕事をやりきった満足げな表情で、やや早足に商店街を抜けて駅へ至る道へと足を進

めていた。

しかし時間が遅いにしても静かすぎる。いくら終電近い時間とは言え、同じように居残りをしていた会社員がちらほら見えてもおかしくない。

ひゅう、と冷たい風が走った。9月に入って夏が過ぎようとしているとはいえ、今年は残暑が厳しく、オフィスの冷房はまだまだ忙しいというのに。

会社員は、なにやら薄気味悪さを覚えた。こうなってしまうと人は何もかもが疑わしくなる。街頭のかすかな瞬きも何やら悪いものを運んできそうに思えたのである。

不意に、地面が暗くなった。明るさは変わらない。“後ろから延びてきた影”が会社員の足元をすり抜けて目の前まで伸びたのである。

何の、影だろう。

振り向いて目視すればそれが幽霊だろうと妖怪だろうと現実になっってしまう、そんな気がした。

そんなわけがない、振り向いて、確認して、安心してしまいたい。しかし、幽霊ということはないにしても、通り魔や強盗、ということは十分にあり得る。振り向いて、目が合ってしまったら、意を決して襲いかかってくるかもしれない。

振り向きたい気持ちと、それを押し留める気持ちがせめぎ合う。

勝ったのは前者だった。妖怪の類ではあるはずがない、通り魔や強盗だとしても、気づかれないようにこっそり後ろを確かめればい

い。

そう考えた会社員は、靴ひもがほどけたふりをしてしゃがみ込み、脇の下から後方にそろりと視線を送った。

視界に映ったそれを目にしたとき、最初、自分が何を見ているか理解できなかった。思わず、あからさまに後ろに振り向いてしまう。

“それ”は、人ではなかった。四本足で歩いていたからだ。

だが、獣でもないのはつきりしていた。何しろ、“人の顔”を持っていた”からだ。

蛇の巻きついた、この世のものとは思えない獣の体に張り付いた人の顔は、にい、と笑った。

発達した犬歯が見える。人というには顔はしわくちゃで、どちらかというと猿の顔にちかい。

「こん

に

ち

は

」

夜なのに「こんにちは」、そしてなぜか壊れかけたスピーカーのようにとぎれとぎれに話す、老爺とも老婆ともとれないしわがれた声。

返す言葉など思いつくはずもない。ましてや、背後を向いて逃げ出すことなど。

だから、その物の怪としか思えないそれが歩を進めて近づいてきても、動くことができなかった。

遠くからはわからなかったが、その獣のそれぞれの部位は知っている動物のものらしい。縞模様をもつ強靱な脚は虎のものだろう、体は少し自信が持てないが狸のそれに近い。体に取りついていいると思っていた蛇は尻のほうでつながっており、つまりはこの獣の尾の

ようだ。

昔話で聞いたことがある。この化け物の名は――

会社員に正面から近づき、口付けでもしそうなくらい近くまで顔を寄せる。

目の前が異形で埋まる。

獣はその間もずっと口をぶつぶつ動かしていた。最初は途切れ途切れにしか聞こえなかったそれも、今ははっきりと耳に届く

「こんじょうにくしや ひとのちほしや きえぬはうらみか このやみか」

今生憎しや 人の血欲しや 消えぬは恨みか 此の闇か

「こんじょうふかしや かのにくほしや いえぬはいたみか このやみか」

恨性深しや 彼の肉欲しや 癒えぬは痛みか 此の病か

「こんじょうくらしや このたまほしや みえぬはかげりか このやみか」

魂精暗しや 子の霊欲しや 見えぬは陰りか 此の已か

恨み歌が脳裡を満たす。それは空気に満ちた空間に水が侵食するような感覚で、次第に会社員の思考を奪っていく。

夜に恨めしい啼き^な声が聞こえる。

その啼き声の主は――

こんじょうにくしや ひとのちほしや きえぬはうらみか この
やみか
こんじょうふかしや かのにくほしや いえぬはいたみか この
やみか
こんじょうくらしや このたまほしや みえぬはかげりか この
やみか

今生憎しや 人の血欲しや 消えぬは恨みか 此の闇か
恨性深しや 彼の肉欲しや 癒えぬは痛みか 此の病か
魂精暗しや 子の霊欲しや 見えぬは陰りか 此の己か

こんじょうにくしや ひとのちほしや きえぬはうらみか この
やみか

こんじょうふかしや かのにくほしや いえぬはいたみか この
やみか

こんじょうくらしや このたまほしや みえぬはかげりか この
やみか

今生憎しや 人の血欲しや 消えぬは恨みか 此の闇か
恨性深しや 彼の肉欲しや 癒えぬは痛みか 此の病か
魂精暗しや 子の霊欲しや 見えぬは陰りか 此の己か

「ぬ、ぬえ鵺」

頭の中に閃きがよみがえる。脳裡を支配する恨み歌が一瞬にして
引いて行くのを感じ、一瞬のまどろみの間に、目の前の獣は跡形も
なく消え失せた。

残ったのは閑静なオフィスビル街と何事もなく道を照らし続ける

街頭と照らされ続ける街路樹、その真ん中に立ちつくす会社員自身だけ。

忘れていたように、五月の夜空に虫の鳴き声がどこからか聞こえ始めた。

夜に奇妙な声で啼く獣がいる。それは鵂である。

鵂の頭では猿の顔が嗤^{わら}っている。

鵂は胴では狸の体が息衝^{いきづ}いている。

鵂の肢では虎の脚が地を踏みしめている。

鵂の尻では蛇が獲物を見定めている。

貴方は鵂に遭ったとき、背を向けて逃げてはいけない。虎の脚に引き裂かれてしまう。

貴方は鵂を見たとき、声を上げてはいけない。尾の蛇に噛みつかれてしまう。

貴方は鵂の声を聞いたとき、近づいてはいけない。猿の牙に食われてしまう。

ただ待たなければならない。

鵂は恨み歌を歌う。

それを十度以上聞いてはいけない。魂を取られてしまう。

貴方は鵂と会ったとき、その名前を忘れている。

恨み歌を十度聞く前に、貴方はその名前を思い出さなければなら
ない。

志波徹の朝は早い。大抵夜明け前、遅くても7時前には目を覚ます。探偵といえば起床は昼ごろ、日がな一日寝ぼけ眼で客を待っている、というのが志波の目指す探偵の姿だったが、やはりハードボイルドには縁遠い男なのか、どんなに眠たくても7時以降までは寝てられない体質なのだった。

シジマ探偵事務所は、雑居ビルの2フロアから成り立っている。下は事務所で、上は資料の保管庫と志波自身の住居となっている。

（まだ、トーストと卵が残ってたな。ベーコンがあれば上等だが……どうだったか）

寝起きの朦朧とした頭で、朝食の献立を考える。“ふわりと鼻をくすぐった香ばしいにおい”で、すっかり志波はベーコンエッグを乗せたトーストが食べたくなっていた。ベーコンがなければ買いに行こう。何ならコンビ二のものでも構わない。

顔を洗い、髭を剃り、さて作るか、とダイニングに入る。

やはり探偵といえば、生活感のない散らかり放題の埃っぽい部屋に住むべきだろう、と志波は考えているが、志波のダイニングは、簡素だがモノトーン調の家具お揃えた清潔感のある部屋だ。潔癖症というほどでもないが、なんとなく片付いていないと気が済まない。

「あ、トールさん、おはよう！」

「や、勝手に上がらせてもらってるよ」

「なっ、」

上代と萱嶋一樹が、食卓についていた。

志波が嗅いでいたトーストの匂いはここから発せられたものだったらしい。小さな食卓にはベーコンエッグとトーストの乗った皿が並べられている。

「ごめんね、ツールさん。台所勝手に使わせてもらったよ！でも食材は自分たちで買ってきたやつだから安心してね」

「……卵は賞味期限も近かったから、使ってもらってもよかったんだけどよ。しかし何か昨日見たのと、えらく印象違わねえか、お前」

まるで別人のように明るく元気いっぱいの一樹に、志波は戸惑いを見せる。

「うん。これからは、ふれんどりに生きていこうと思って。……」

タメ口はまずかった？

「いいや、気兼ねが要らなくて助かる」

「そうだよな、これからお世話になるんだし、気まずいのはもうこりこりだからさ」

そう言つて、一樹がコーヒーを渡す。

「確かに一緒に暮らしてるヤツと気まずいのは辛い——ってちょっと待て！」

お世話になる？ 誰が？ 誰の？

「惜しい、もう少しでコーヒーを噴き出すのが生で見られるところだったのに」

「芸人みたいなリアクションを期待するんじゃない？ 一体何の話だ上代ッ！」

なんとなく、話が通らなさそうになってしまった一樹（期待のシンに備えて雑巾まで用意していた）に代わり、上代に話を振る。上代は、優雅に足を組み、かぐわしい香りを放つコーヒーを一口飲んでいた。モノトーンのシックな家具に妙に似合った仕草だ。

「とりあえず本気の話だだけ付け加えておこうか。家事に関しては足は引つ張らない。お買い得だよ」

「家事一般、一通りできます！ 今ならコーヒーのおかわりがつきます！」

目いっぱい手を挙げて話に乗る一樹。変わりすぎである。

「それだけで納得できるか！ とりあえず理由を聞かせろ」

一応一樹が家を出ることは、上代に連絡したときに伝え聞いていた。だが、UGNで住居をあてがうことなど容易な仕事のはずである。何だっかわざわざ男やもめの探偵事務所に預けようとするのか。しかも、申告によれば、一樹は家事も一通りこなせると言っているし、他人に預ける意味などない。現に遥などはUGNによって用意された住居で一人暮らしをしている。

「理由も何も、昨日志波さんが言ってたじゃないの」

「俺が？」

「木島の今一番の関心は“モリト”と関わりのある萱嶋だって」

確かに言っている。

たちまち言葉に詰まった志波に、上代が2本の指を立てた手を志波に突き出していった。

「今、萱嶋には二つの危険がある。一つが能力の暴走、もう一つが敵の襲撃」

報告によると、昨夜は二つ同時に起きたという。一樹が伝えた、その時の木島の言動を見れば近いうちに最低一度は木島は一樹の前にやってくるはずだ。

「その二つの事態に対処するために、オーヴァードが近くにいたほうがいい。それが理由だよ」

「……なおさらU・G・Nで預かったほうがいいんじゃないか」

「木島に用があるんでしょ？ あんたにとっても渡りに船ってやつじゃない？」

一応反論をして見せたものの、帰ってきた答えは凶星だった。正直、木島を探し出す手段は今のところ一樹を囷にするしか思いつけなかった。

「わかった、交渉成立だ。後で空いてる部屋を片づけて空けてやる」

皮肉なことに、部屋は空いていた。“もともと2人で住んでいた”からだ。

「ところで志波さん、昨日は遅くまで動き回っていたみたいだけど、何か見つかった？」

昨日、木島が一樹に接触したとの情報を受けた後、志波と遥はそれぞれ街の中に散った。暴走すれば一樹の戦闘能力は非常に高い。接触してさほど経たずに木島は退散するだろうと上代は踏んだのだ。そうになると、逃走ルートを絞り込んで待ち伏せしていたほうが木島を捕まえられる可能性は高い。そこでオーヴァードの能力を制す

ることに長ける上代が暴走する一樹を保護する役に回り、攻撃能力の高い遥と志波が木島の捕縛する役として絞り込んだ逃走ルートに待ち構えていたのだ。

もつとも、どんな隙間にでも入り込めるエグザイル（肉体変化能力）持ちらしい木島はあっさりとその待ち伏せをかわしきったうえ、一樹の暴走も先行したウィザードが抑えてしまっていたが。

志波はそれでもあきらめず、木島を捜すために街中をうろついていたが、ついにその姿をとらえることも適わなかったのである。

「木島の足取りはつかめてねえ。でも妙な噂を聞いたぜ」

「噂？」

「関係あるかどうかはわからねえが、“^{ぬえ}鵺”が出たつてよ」

「鵺？」

怪しい人物を見かけていないか、警察の知り合いに尋ねてみた時に得た情報で、昨日江間警察署には「鵺が出た」という電話通報が相次いだのである。

はじめはいたずら目的かと思われたが、全く関連のない複数の人物が口をそろえて、同じような通報をしてきたので署内は一応見回りをしてみることにしたのである。

いたずらの次には集団幻覚などが疑われたが、その可能性も却下された。町中に何人もの被害者が見つかったのである。

獣に襲われたものもあれば、全くの無傷で倒れていたものもあり、被害者の間にも関連性は見られなかったので、全く別の事件として取り扱ってもよいくらいだったのだが、それを結ぶ一本の線は見出された。

「その線とは？」

「都市伝説だよ。聞いたことねえか？ 鵜の恨み歌を十回聞かねえうちに名前を思いださねえと…… ってやつ」

「ああ、魂を抜かれるんだっけ」

「僕も知ってるよ。逃げたら後ろから襲われるし、近づいても噛みつかれるんだよね。クラスの人が話してるのを聞いたことがある――直接聞いたことないけど」

妙な哀愁を漂わせる付け足しをしつつ、一樹も話に加わる。

それは、江門市では比較的一般的な都市伝説だった。よそでは啼き声だけだが、この町では恨み歌を歌うのが特徴的な話だった。

「確かにその話と、被害者の状況は一致してるねえ」

「無傷で助かったやつもいて、そこから警察に通報が行ったらしい」

「その人たちは十回恨み歌を聴く前に鵜の名前を思い出せたってか」

「…… ちよつと気に入らないねえ。目撃者が多すぎるし、話がきれいにまとまりすぎてる」

「『鵜はそんな怪異ではないはずだ』」

急に口調を変えて断言したのは一樹だった。

自分に視線が集まったのを受けて、慌てて捕捉する。

「あ、今のは僕じゃないよ。モリトがそう言ったんだ。そのまま伝えるね。『鵜は私の知識の中でも確かに猿面に、狸の胴、虎の脚に蛇の尾をもっている。しかし歌を歌うというのは私の知識の中にはない』」

「…… 歴史に実在した鵜とは、別だということか？」

上代の質問に、一樹が視線を数秒外す。おそらくモリトと“交信”しているのだろう。彼の中にモリトと呼ばれる存在が規制してい

ることは一樹自身から聞いている。

やがて一樹は再び上代と目を合わせると、こくりと頷いた

「『その通りだ』ってさ」

それは些細なようで、重要な情報かもしれない。少なくとも鵜と
いう怪物が世の中に“蘇った”わけではない。恨み歌の伝説を元に
“作りだされた存在”なのだ。

「蘇るときは勝手に蘇るかもしれんが、作り出されたとなると必ず
作ったやつがいる、という話になるな」

「タイミング的にあのシーレムビル的事件と、木島の関わりを疑わ
ねえわけにはいかねえな」

探偵が同意し、次のアクションは決まったようだった。鵜の対処
だ。捕獲もしくは退治をすることで敵の出方を見る。

そこで、ちらりと一樹に目をやる。

「萱嶋は、とりあえず今回は戦いには参加はさせない。いいな？」

「まあ、仕方ないかな。暴走したら大変だし」

一樹はまだレネゲイドの力の制御をマスターしていない。オーヴ
アードは、覚醒したても本能的に戦い方を知っているものだが、
一樹の能力は少し違うらしい。

何が起るか分からない以上、強力でもその力をあてにすること
はできなかった。

「でも手伝いはしてもらう。これから学校でしょ？ 遙にこのこと
を伝えて学校で広まってる噂を集めるように言っというてよ」

子供たちに広がる噂というものは荒唐無稽だ。だが、それゆえに常識に縛られない情報を手にすることができる。

「うん、わかった」

妙に明るい笑顔で一樹は頷いた。ただの伝令とはいえ、少しでも役に立てるのが嬉しかったのだろうか。

「で、俺と志波さんは学校以外の調査だ。また見逃すと面倒くさい。今夜中に木島の件も、鵜の件もケリを付けよう」

ガラリ、と教室の扉を開け、自分の椅子に重力に任せて身を落とした遙はふう、と疲れに満ちたため息をついた。昨日は上代、志波と別れた後、夜遅くまで街中を回って姿を消した木島の情報を集めていたのだ。

自分の部屋に戻るころには日付が変わり、そして、その時点で今日提出の課題があることを思い出したのだった。

忘れたと言ってしまうえば、それまでかもしれない。だが、遙はやらなければならぬと自分を叱咤した。自分で日常にかぶっている優等生という仮面はできるだけ汚したくなかった。

そんなこんなで課題が仕上がったのは3時過ぎ。ノイマンの持つコンピュータ並みの計算能力、記憶能力をもってすれば、わからない問題などはなかったが、如何せん量が多すぎた。一週間の期間があったのだが、ここ数日の事件ですっかり忘れてしまっていたのである。

「ぐうっど、もーにーんぐつつ！ おはよう、みんな！」

突如教室に響き渡った声に、遙は落ちかけていた^{まぶた}瞼を見開いた。その声の主を認めて、遙はさらに目を丸くする。

「おはよう阿形くん、おはよう稲垣さん、おはよう柏木くん！ おはよう澤田さん！」

すれ違った一人一人に陽気に声をかけて教室を回っているのは、

「おはよう原口さん、おはよう溝内くん！ おはよう、おはよう！」

昨日までただの一言もクラスメイトと言葉を交わしたことがないのではないかと思われる、根暗の代名詞・萱嶋一樹ではないだろうか。

その他のクラスメイトも啞然として、教室を横切っていく一樹に視線を注ぐ。

一樹は注目を浴びるのを承知の上らしい、ゆつくりと教壇に上ると、いきなりチョークをつかみ、黒板に大きく文字を書き始めた。

『脱 不幸を呼ぶ男』

なぜ星マークなのかは本人にしか分からない。いや、本人にも分からないに違いない。

とにかく一樹は丁寧な字で、そう書き終わるとくるりと振り返り、教師よろしく教室内を見渡す。

「僕に関われば不幸になる！ って噂は聞いたことあると思うんだけど……いろいろあつて、今この時より！ 真っ向から否定させていただきます！ 僕は不幸なんか呼んだりしない！ というわけで！ これからみんなにいろいろ話しかけるようになるかもしれないけど、変な目で見たり、避けたりしないでほしい！」

片手を挙げて、全世界に向かうように、一樹は宣言した。

僕の言いたいことは、以上！ と、一樹は一礼をして教壇を降り、自分の席に座る。彼が教室に入る前にあつたざわめきはなかなか戻ってこなかったし、一樹に話しかけようとする者もいない。ただ、ヒソヒソと話す声が教室内に複雑に響いている。

「萱嶋君」

遙は、実はすぐ前の席であつた一樹に声をかけた。

「一樹、でいいよ。僕も遙って呼ぶから」

「後生だから呼び捨てはやめて、“一樹君”」

一樹が一変していきなり遙のことを呼び捨てにしたりなどしたら、どう勘ぐられるかわかったものではない。

「残念。いきなり呼び捨てにして、クラスのみんなが驚くのを見たかったのになあ」

朗らかに笑う一樹は、昨日までの影は欠片も見当たらない。

「何があつたの？ って聞くのは野暮？」

「野暮、野暮。男の秘密は聞かないのが女の理ことわりだぜ！」

親指まで立てたポーズで振り返る一樹。なぜか遙にはちらりと見えた歯がキラリと光った気がした。

「ところで、法彦さん（上代）からの伝言があるんだけど」

「何？」

「学校で広まつてる噂を集めてほしいんだって」

「鵜についてね？」

遙も昨日、街を駆け回った結果、鵜が出たという噂は聞いた。その話がただの眉唾物というわけではないことも。

警察も動いていたという話だから、その話を上代がつかんでいないわけがない。今日にでも情報収集の指令は下るものだと考えていた。

「さすが」

「少し考えれば分かることよ。ま、うちのクラスには“歩くニュースキャスター”もいるんだから」

ニュースキャスターは普通、歩くのではないだろうか。

噂をすれば影、とはよく言ったもので、そこによく見知った顔が教室に入ってくるところだった。

「遥……」

小さい体をふらふら揺らしながら寄ってきたのは智子だ。しかしそのあとに続いてくると思われた、明美の姿はない。

「おはよう、珍しいじゃない、智子が一人なんて。明美は？」

智子と明美は、遥を加えた三人の中でも特に仲がいい。家が近いこともあり、お互いが幼馴染であり、クラスの中でも二人で1セットと認識されている。幼稚園のぶどう組からクラスも離れたことがないらしい。

しかしすこし様子が変わった。能天気でいつも朗らかに笑っている智子にしては表情が暗い。

「遥……あたし、どうしよう……？ どうしてあげたらいいかなあ……？」

「智子？」

今にも泣きそうな顔で智子は遙の胸元にしがみつき、すすり泣き始めた。

「智子？　ねえ、落ち着いて。何があつたのかを教えて？」

「明美が、明美が、昨日……鵜に襲われたんだって……！」

その言葉を聞いた時、遙の背筋にひどい悪寒が走った。思わず身を震わせる。

「そ、それで、明美は……？」

「意識不明の重体だって……！　体はどこも悪くないのに、息が荒くて苦しがって……。きっと鵜に魂を抜かれちゃったんだ……！　もうあたしどうすればいいか……！」

よほど明美を失うのが怖いのだろう。いつものポジティブ思考が微塵も見えない。

そのまま口をつぐんで黙って涙を流す智子の頭を撫でながら、遙もまた頭の中に広がる動揺と戦っていた。

（明美を……、巻き込んだじゃった）

遙には家族がいない。オーヴァードに覚醒した際に失くしたからだ。UGNチルドレンとして一人暮らしをしているのもそのためである。

よって、遙にとっての日常は学校生活のことであり、そして智子と明美のことだ。遙がオーヴァードとして戦う理由も、智子と明美だ。彼女らとの生活を失わないために、彼女は非日常と戦っている。

その守るべき日常の世界が、壊れかけている。

（見落としてた……）

守りたい、と言っておきながら明美と智子の動向は、このシーレムビル的事件から続く非常時に全く気にしていなかった。非オーヴアードである二人はあらゆる意味で事件に関連性がない。だから、危険に巻き込まれる可能性は薄いと思っていた。

だが、わずかに可能性はあったのだ。それは車に乗っていて交通事故に遭うのより低い可能性だろう、だが、ゼロではなかった。

この2人を絶対を守ることを念頭に置いておけば、2人の動向を把握し、危険から遠ざけることもできたのではないか？

ぐるぐると脳裡を巡る後悔の渦が、遥の思考を支配していく。だが、それを断ち切ったのは一樹の妙に能天気な調子の質問だった。

「あのさ……明美ちゃんはまだ生きてるんだよね？」

「な、何よアンタ、いきなり」

「生きてるんだよね？」

拒絶しようとした智子にさらに質問を重ねる一樹。智子はこの状況を突っ込む気力もないらしく。それを肯定するように頷いた。

「だったらどうすればいいかなんて一つしかないよね。どうやって明美ちゃんを治せるか」

「でも、それはお医者さんにしか」

「明美ちゃんは鷗にやられたんでしょ？ 周りの大人の人はどう言ってるの？」

「鵠にやられた」とは認めていないだろう。昨日の騒ぎと症状から、鵠にやられたのは間違いない、と他人事で物をとらえている人間が言っているだけだ。

当事者として事件の処理に当たっている関係者たちは、集団幻覚症状や、単なる偶然といったところで片づけているだろう。事実、智子は「明美の体はどこも悪くないのに」と言っていた。つまり、
“医者は明美が意識を失った原因を突き止めていない”のだ。

「……遙ちゃんはどう思う？」

話の水を向けられて、ようやく遙は自分の思考を取り戻す。

「……私も、いろいろ話は聞いたんだけど、昨日現れた鵠はほぼ都市伝説通りの特徴みたいだったわ」

そうだ、まだ終わっていない。

「だから、都市伝説をもう少し詳しく調べれば、“魂を奪われた人の治し方”が分かるかもしれない」

明美はまだ死んでしまったわけではないのだ。取り返しは付く。

「都市伝説に詳しい人って、学校内にいるのかな？」

「……明美なら知ってると思うんだけど、智子、心当たりある？」

智子は、何やら様子の違う一樹と、そんな彼と前からの知り合いのように話す遙に怪訝な表情を浮かべながら、少し考えてやがて首を横に振る。

「うつん、分からない……でも、江間市の都市伝説を集めた本なら読んだことあるよ」

ピンポイントな書籍の情報に、遙と一樹は思わず顔を見合わせた。

＊＊

そんなわけで二人は昼休みに学校の図書室に来ていた。智子の話によると、この学校の図書室でその本を見つけたのだそうだ。

題名は『江間伝説』。

作者もわからず、聞くからにマイナーそうな本ではあったが、図書室もそれほど大きくないので、すぐに見つけることができた。隙間が多く、ばらつきのある本棚の中からそのA4判の薄い本を取り出す。

装丁は普通、というか市販のものと比べると若干拙い。^{つたな}出版社の名前も書いていなかったので、自費出版のものなのだろう。出版年も明らかではないが、紙の劣化具合から10〜20年ほど前のものだろう。

「著者は——コーマン・アシャ……？ 日本人ですらないのね」

「ラファディオ・ハーンみたいに日本に興味を持って書いたのかな」

パトリック・ラファディオ・ハーン、別名・小泉八雲はギリシャ生まれの新聞記者である。仕事で日本に来て、やがて帰化し、結婚

もした。帰化したことから彼の日本への興味は並々ならぬものであったが、とくに彼が興味を示したのは怪談話だった。

妻・節子から聞いた怪談を中心に、彼の著作には怪談が豊富にまとめられている。

この、コーマン・アシヤという人物も同じように日本に、とくに伝説の類に興味を持って書いたのだろうか。

遥は早速ばらばらとその本をめくる。不親切なことに目次はなかった。仕方なく素早くページを捲り、とにかく鵺に関する単語が入っている箇所を探す。

そして、遥は『鵺の恨み歌』と題された項にたどり着いた。

「これね」

冒頭に書かれていたのは、江間市でよく知られる話だった。鵺の特徴と、恨み歌に関する記述。そして、鵺と遭遇した場合に助かる唯一の方法が記載されている。遥が望む、魂を取られた人間を助ける方法は書かれていなかった。

次にこの伝説の中の鵺がとっている「恨み歌を聞かせて魂を抜きとる」という行動についての考察が書かれている。

江間では、この特徴に沿う鵺の出現は数例報告されている。著者は、その前後の出来事を調べた結果、次のような共通点を見つけた。一度目は江戸時代に山火事を起こした直後に現れた。次は、村を広げるため森の木の大伐採を行った後だった。

つまり、人間の手で江間を囲む山に何らかの損害を与えた場合、と考えることができるのだ。

鵺は、そのための代償を受け取るために現れる、自然の取立人のような存在なのだと、著者は語る。つまり、恨み歌はその代償であ

る魂を人から抜き取るための道具なのだ。

「どこに持っていかれるの？」

「それは書いてないわね。ただ気になることが」

そういつて、遙が一樹に見せた部分は、鵺の出現は解決、未解決、いずれの場合も二日目の夜を最後に鵺が現れなくなっている、という記述がある。

未解決のまま鵺が去ったとき、昏倒していた者たちはみな示し合わせるように息を引き取ったのだという。

「昨日が一日目だから、二日目って今日か」

つまり、今夜中に鵺をどうにかしてしなければ、明美の魂を取り戻す機会が失われてしまう、というわけだ。

そしてその次からは、バージョンが違う鵺の伝説が描かれていた。

都市伝説の鵺は、散文詩のような語り口の物語であるが、こちらは昔の事件を調べたレポートのような形式の文章だった。

時代は明治初期。江間市の歴史では養蚕業を礎に村から街へと発展していく過渡期でもあった時代だ。出てくる鵺は、今回江間市に出現した鵺と特徴的には似ている。そして、この話の中で起きている事件と同じで、魂を抜かれたように昏倒する人間が続出し、生き残った者は「鵺に襲われた」と訴えているという内容だった。

このころ、江間市には退魔師がいたらしい。名前は明らかではないが、その退魔師によって、鵺は退治され、昏倒していた人たちも目を覚ましたのだという。

「結局のところ、倒せば魂は戻るのかな」

「……そうみたいね」

「弱点みたいなのは載ってないかな？」

それらしきものは載っていた。鶴たちは松明のようなむき出しの炎を持った人間を襲わなかった。そして、件の退魔師も炎を持って撃退したという。

その一文を目にした遙は、視線を隣の熱操作能力者サラマンダーに向ける。

「あ、僕今回戦えないよ。まだ能力の制御法を先生から教わってないから」

一樹は顔の前で手を振って答える。彼は以前からのオーヴァードであるが、自覚をしたのはつい一昨日のことだ。オーヴァードとしては全く訓練を受けていない。戦いに参加するのは危険だろう、と遙も思っていた。

しかし、彼を計算に入れなくても、江間市にはサラマンダーの中でも能力の高い“ウィザード”がいる。

話の中の退魔師というのも、ウィザードみたいなサラマンダーのオーヴァードだったのだろうか。

（ちょっと、いろいろ出来すぎな話よね）

「おや、川橋さんじゃないですか。旦那さん、捻挫の具合はいかがです？」

「ええ、ええ、神主さん。先日いただいたお守りのおかげで、もうすっかり。今日は釣りに行ってるんですよ」

「そうですか、でも捻挫は癖になりやすいですから心配ですね。あとで迎えに行つてあげるとよいですよ」

「ああ、そうですねえ。お心遣いありがとうございます」
「いえいえ、お大事に」

それは、神社の神主と、参拝に来た初老の女性の平和な会話だった。だが、それを目撃した志波は、驚愕に目を見開いている。

「……猫を被るってレベルじゃねえだろ、アレは」

普段やる気など欠片も見せない眠たげな表情とは対照的な、爽やかな笑顔。そんな描写の笑顔を恐ろしいと感じたのは人生で初めてのことだ。

自覚をしているのか、上代は私立探偵の反応に対し、さもあらんとあつという間にいつもの表情に戻る。

「まあ、気持ちちは分かんんでもないけどね。氏子は大切にしないでこの商売成り立たんのよ」

上代の本業は先祖代々から受け継がれてきた神主の仕事である。この江間市で唯一の神社であり、規模も大きいことからUGN支部長という責務の傍らでこなすような仕事ではないとは思うが、それでも何とかしているところが上代の凄いところだろう。

「大体何の用で神社なんだ？」

「ああ、昔の資料とか残ってないかな、と思つてさ」

そう言つて上代は境内の奥に進み、そこに建てられていた古ぼけた社務所へ向かつていく。社務所なら、参道沿いに先ほど見かけたので、こちらはあまり使わないのだろう。中からも周囲からも人の気配はなかった。

骨董品のような錠前を、筆のような大きな鍵でガチャリと開ける。

ゴトゴト、と木の引き戸を開ける。中は当然電灯など付いていなかったが、入口から差し込む光がうつすらと中を照らす。

そこは倉庫に使われているようで、いくつかの棚が見え、その上にさまざまな道具が乗せられている。が、あまり見慣れない形をしており、それがなんなのかまでは分からない。中は真つ暗とは言わないが光源は入口から差し込む光だけだ。資料漁りをするには明るさが足りない。

「なにぶん、昔からの建物をそのまま使つててさ、電気通つてないんだこれが」

そう言つて、上代は社務所の中に入ると、窓を片っ端から開けていく。ついでに入口わきにある棒を使つて、天井をつついたかと思うと、上からも光が差した。今は真昼間なので、それだけで十分に明るくなり、全体が見渡せるようになる。

「へえ、窓開けるだけで大分違うな」

「電灯がない時代の建物だからね。明かり取りの工夫は今の住宅の比じゃないの」

手前のほうには祭具の類が多くみられたが、奥のほうは古い本がたくさん詰まっていた。上代は目的の本に目星がついているらしく、迷わずに奥のほうに歩を進めた。

そこに並んでいたのは和綴じの本で、どうやら手記の類のようだった。背表紙には手書きで日付が書かれている。

「志波君には俺の能力のこと話してたっけ？」

「いや、見たことはあるが」

上代は、自分の領域を展開し、その中で水でできた蛇のような幻覚を操って精神攻撃をするオーヴァードだった。物理的な攻撃力は皆無だが、その水蛇に絡め取られた者は、レネゲイドの制御に大きな枷をはめられることになる。また、一応物理的にも効果は及ぼし、水蛇の体を使って、ある程度敵の攻撃を防ぐことができるのだ。

それにより、敵は相当力が削られるため、上代一人いるだけで、部下の帰還率が全く違ってくるといわれ、ついたコードネームは“アクエリアス 神水の結界師”だ。

「あの水蛇ね、ウチの神社の主神で“みづはるめのみこと 彌都波能賣之命”っていう神様の力をちょこつとつかった……って“設定”でね。あの技はうちの神社で代々引き継がれるものなんだ」

レネゲイドウィルスクス ソリスのことが知れ渡ってから、この力も領域支配能力と薬物創造能力の力で実現しているものだと分かり、八百万の神々など何も関係もないということが分かった。

だが、レネゲイドウィルスは遺伝で伝染するということはともかく、シンδροームは血縁関係はまるで関係がない。だが、レネゲイドのことを知ってから、上代は家の系譜をさかのぼって調べてみたことがあったが、先祖代々から同じシンδροームを受け継いでいるようだった。

代々この水神の力を借りる技を引き継いでこれたのは、やはり神懸かった何かがあると、上代は感じている。

「で、まあ、退魔師みたいなことをしてきたわけ」

江間市は周りを山に囲まれた盆地の街である。昔から大きな道が山間に通っているため、交通の不便は少なく、街はそれなりに発達したが、少し歩けば森が深くなることから、科学が発達する前は、神隠しや怪異の報告が多かった。江間市に都市伝説が多いのは、そういった背景があつてのことだ。

そんな中、江間神社の神主である上代家は、その水神の力を持つ退魔師の技を持っていたことから、そういった怪異などの対処をしていたのである。

「で、結構ウチの家系ってマメらしくてさ。退魔の記録とかいちいち残ってんのよ」

そこまで話せば、ここに並ぶ本の正体も知れる。

「確か、城崎が言ってたのって、昭和初期だったな。とすると、この辺か」

そう言つて、上代は資料の中から一冊取り出して、ぱらぱらとめくりだす。

「報告にあつた、鵜を退治した退魔師って、お前の先祖だったってことか？」

「いいや、炎を使つたつて言うから、上代じゃないね。……ウィザードのほうだな」

「……なんでその名前が出てくる」

高笑いをしながら外套をはためかせるウィザードを頭に浮かべながら、志波は聞き返した。

「俺も、こうやって記録を振り返ってみて初めて知ったんだけどさ、いつの時代にもいるんだよ。炎と氷を使う退魔師が」

「……ウィザードはずっと生きてるって言いたいのか？」

それが不可能ではないことを志波は知っている。オーヴァードの中には“エンシェントレネゲイト古代種”と言って、はるか昔から生き永らえている者もいるのだ。ただし、それは極稀な例であるため、そうそう見つかるものでもないが。

その質問に、上代はちらりと志波と目を合わせると、首をゆっくり横に振った。

「いいや。誰にも言っていないけど、ウィザードとは古い付き合いなんだ。奴の子供のころも知ってる。生まれた年も、家もね」

「……そんな誰にも言っていないこと、俺に言ってもいいのかい？」
「別に隠している情報じゃないしね。ただ、話す機会がなかっただけで」

窓を全開にしたこの倉庫を吹き抜ける十月の風のように、上代の答えは涼やかだった。その後、上代は黙ったまま日誌のページをめくり続ける。

「これだな。鶴退治のことが書いてある。『昭和七年八月九日。夜中二人事不省二陥ル者相次グ。口々二鶴ノ名。怪異発生ト見テ、捜査開始ス』」

以降、余計な描写をせず、淡々と事実のみを書き連ねる形で捜査

の様子は書かれていた。

そして、今日高校で遙と一樹が調べてきたことに関しても触れられている。

「『北へ向カウ鵜ノ進路カラ鵜八二日目ニ鵜沼ヲ通ルト判断。彼ノ地ニテ待チ伏セル』」

「ウズラ沼……？　どこのことだ？」

志波は私立探偵という商売柄、江間市内の地名はほぼそらんじられるが、ウズラ沼という名前の沼には覚えがない。

「北見山の麓にある沼だよ。地図には載っていないくらい小さいが、底なし沼で江間市では冥界に繋がってるという言い伝えもある」

北見山は盆地となっている江間市を囲む山の一つだ。名前が示す通り、街の北にそびえたっている。江間市は東西に道が開けているが、南北の山間は険しく、道路は通っていない。故に南北、とりわけ北の山はほとんど手つかずの奥深い森が広がっており、めったに人は立ち入らない。

「やっぱりこの鵜も恨み歌を歌うヤツか？」

「いいや、事件後の考察として、鵜の特徴がまとめられてるけど、恨み歌については触れていない。もしそんな特徴的な行動をする怪異なら、そう記述してたはずだ」

「やっぱり、都市伝説の鵜は若干創作が入ってるんだな。それで、本当に来たのか？」

「そうらしいね。『氷炎^{ヒエン}ニ協力ヲ依頼。共ニ鵜沼ニテ鵜ヲ迎撃、之ヲ討ツ』とある。それで、倒れてた人たちも無事意識を取り戻したんだとさ」

それ以上の情報がないかと他の資料も当たってみるが、鵜の記述はそれきり見当たらなかった。

上代は、ぱたりと日誌を閉じて本を棚に戻す。

「氷炎” ってのは……」

「この時代のウィザードのことだろうね」

ウィザードから直接話を聞いたわけではない。しかし、上代は半ば確信を持っていた。

おそらく、ウィザードは“サクセサー伝承者”なのだ。弟子を持ち、戦い方を伝えて、技を永らえさせている。その証拠に、ウィザードは今“弟子”を取ろうとしている。上代家のように血縁には縛られていないようだが。

上代が成人し、戦えるようになってから、ずっとウィザードと共に怪異と戦ってきた。おそらく先代も同じように。そうして、上代家とウィザードの伝承者は肩を並べてきた。なぜか途切れることなく、そしてこの江間市を離れることもなく。

——まるで、一人でも欠けるのを恐れているかのように。

「とりあえず、そのウズラ沼に行けば、鵜を待ち伏せできるんだな？」

「そうとは限らないんじゃない？ 自然発生したらしいこの記録の事件とは違って、今回は木島とシーレムビルの事件が背景にある。そこまで忠実に再現してくれる保証はないね」

「それもそうだな。もう一枚、ウラがとれるような情報があれば……」

……

その時、ぶーん、ぶーんと、虫の羽音のような音がした。志波の携帯の振動音である。ポケットに入れてあったのだが、この倉庫が

静かすぎて、小さな振動音でも十分にあたりに響く。

志波は上着の内ポケットから携帯電話を取り出すと、手慣れた手つきで折りたたみ式の携帯電話を開き、発信者を確認すると耳に当てる。

「志波だ。……ああ、お前か。頼んどいた件、どうなった？ 何？ 固いこと言うんじゃないよ。俺だって何度もお前に情報提供してるだろうが。何も機密をリークしろってんじゃないねえ、一般人でも手間暇かけりゃ調べられることを合理的に手に入れようとしてるだけだ。——ああ、ちよつと待て。確認する」

志波は、話しながら携帯電話を肩と耳で挟むと、持っていたカバンからB5サイズのノートパソコンを取り出し、棚の空いているところに据えて立ち上げる。

メールソフトを実行してすぐ、電子音とともに「新着メールが1件あります」というバルーンがディスプレイ上に表示される。急いで送った割には余裕を利かせて、件名は「読後、焼却のこと」と書かれていた。

そのメールに添付されていたのは地図だった。それも江間市のもので、あちこちにマークが走り、時刻が書かれている。会話の内容からして、今回の事件の発生分布を現しているものだろう。

「ああ、間違いねえな。ありがとよ」

そう言って、電話を切ると、志波は、ノートパソコンのディスプレイを指して上代に簡潔に報告した。

「ちよつと警察の知り合いに頼んで、今回の事件の分布を地図に落としたのを送ってもらった。まあ見てみるよ」

「この中で一番最初に事件が起こっているのは桑原町……。それから製糸工場前、西の歩道橋、東江間町、消防署前か。順路ははつきりしてるな。東西にばらつきすぎなのは気になるが」

志波は画面を切り替えた。次の画面も示されている事項は変わらなかったが、事件の時刻に沿って、点と点を線で結んだものだ。街の南から、東へ西へと反復横とびのように北へ北へと向かっていく様子が分かる。この点のパターンを先に伸ばすと、そこにあるのは――

「ウズラ沼」

「そこまできれいに向かってるわけじゃねえが、最終的にはその付近になるだろうな」

「裏付ける……とまではいかないけど、判断材料は揃ったってところだな。そろそろ夕刻に入る。連中も動きを見せる頃だ」

そう言って、上代は携帯電話を取り出すと、遥の番号を呼び出した。

放課後になって門をくぐった瞬間を見計らうように、上代から連絡が入った。「敵をウズラ沼にて迎え撃つので参加するように」との指令である。

ウズラ沼という地名に覚えはなかったが、地図が添付されており、それを見る限り、名前は知らなかったが心当りのある場所だったので、迷うことなく辿り着けた。

舗装された道路から、北見山に入る山道に切り替わって程なくしたところで、左側に沼が見える。それがウズラ沼だ。まだ森は深くはなく、日光なども十分に入ってくるが、よどんだ水の所為か、ひどく陰気な雰囲気のある場所で、怪談の類の舞台としては、十分に雰囲気がある。

そのほとりで上代と志波が立っているのが見えた。他の人員の姿は見えない。

「萱島は？」

「指示通り、待機するために支部のほうへ向かっています」

「随分素直に従うんだな。普通、あの年頃だったら戦ってみてえと思うモンだろうに」

少し拍子抜けした様子で志波が言った。

「あんまり志波さんみたいに血の気の多いタイプじゃないみたいだし、自分の暴走がどれだけ迷惑を掛けるか分かっているんだろ。賢明だね」

「ところで、ウィザードは一緒じゃないんですか？」

「連絡はした。場所が遠いので少し遅れるそうだ」

ウィザードは外部協力員であるイリーガルエージェントだ。普段は一般企業に勤めており、必要に応じて協力を求めている。いつでも動ける体制の正規のエージェントとは違い、現場に遅れることも多い。

「……これでこなかったら笑いものだよねえ」

上代は手の中で煙草の箱を弄びながら言った。火をつける気はないらしい。上代は愛煙家だが、いくつか吸わない場所を決めていると遥は聞いていた。神社の境内などでは煙草を取り出すところすら見ない。

「当たってることを祈るしかねえな。連中の何が目的かはわからねえが他に何を狙ってるのか検討もつかねえときてる。どの道俺たちはここにくるしかねえのさ」

そう言つて、志波は戦の前の腹ごしらえとばかりにチョコレートバーを齧りながら言った。存外に甘党らしい。

「これはわたしのカンなのですが、どうも誘導されている気がしてならないんですね」

「だから、ちゃんと連中はここに来るってか？ ……しかしカンじやなあ」

「いいや、なかなかいいカンしてると思うぜ。さすがは“白き龍人”だ」
ブランドラゲーン

その声に、遙達3人の心にざわめきが走る。開けた沼の前の広場、月光に照らされていつの間にか立っていたのは――

「木島……！ やっぱりテメエが絡んでやがったか」

複雑な感情を噛み潰したような、低い声で言う志波をよそに、上代が一步木島のほうに踏み出す。

「萱島から聞いたよ。あんた、オーヴァードの居場所を作ろうとしてんだって？」

「おうよ。お前さんたちもどうだい、一口乗らねえか？」

「遠慮しとくよ。 “あんたの後ろにいるペット” とはどうも気が合いません」

その言葉に反応するように、木島の背後にあった森林の中で闇が揺らめいた。そのまま音もなく月光の下に現れる。それは虎の脚、狸の体。蛇の尾、そしてサルにも似た老人の顔。

「ひつ」

その違う動物を掛け合わせた異形は、化け物の類と戦いながらいるはずの遙さえも、悲鳴を上げかけてしまうくらいの気味の悪さがあった。既存の動物が混ざっているという、形成の歪みには生理的に受け付けないものを感じる

だが、遙はその悲鳴をかみ殺さなければならなかった。あらゆる恐怖を乗り越えて “それ” に立ち向かわなければならぬ理由があった。

「その……趣味の悪い獣が鵜ね。あなた達がどういふつもりかは知らないけれど、見過ごすわけには行かない。あなた達の奪った明美

の魂。絶対に取り返させてもらわう！」

鵜に魂を奪われた明美は、鵜を倒さなければ助けられない。親友を失う怖さに比べれば、目の前の怪異がどれだけグロテスクでも立ち向かっていける。

腰を低く構える遙に続いて、志波も木島をにらみつけながら刀の鞘をはらう。

「こんな化けモンを飼うのが、オーヴァードの居場所を作ることになるのか？ 俺の知ってるテメエはもうちょっと分かりやすいヤツだったんだがな」

「じきに分かるさ。……ここを生き残れたらの話だけだな！」

カーゴパンツのポケットに手を突っこんだままの木島を中心に、一陣の風が吹いた。その風が通り過ぎた後は、鉄の匂いに似たかすかな異臭を含む空気がその場を支配する。

その木島の《ワーディング》を合図とするように、鵜の虎の脚が今にも飛び掛かれるような、低い体制をとる。そして、その背後から尾の蛇が“四匹”、その身体を伸ばし、離れたところにいる遙達にその牙を剥けて襲いかかってきた。

狙うは、全て上代である。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

高く、暗い、この世のものとも思われぬような声で、鵜が雄叫びをあげる。その鳴き声は音波としてぶつかる全てに纏わりつくような粘っこい、かつ不快な響きだ。

その雄叫びを背中に受けた蛇も、呼応するように口を大きく開け

て威嚇音を発し、のたうち回るようび暴れながらも倍の勢いで上代に迫る。

「どうやら、鵜のあの雄叫びは蛇の攻撃を支援するものであるらしい。」

「上代のオッサン。アンタが戦闘に出てこられると面倒だったのは聞いている。先に片づけさせてもらうぜ？」

「アンタにオッサン呼ばわりされるほどトシ取った覚えはないんだけどね」

木島の言葉に、ため息交じりに答えると、上代は札を指で挟んだまま、手で印のようなものを結ぶ仕草をする。

「妨げ給え！」

挟んだ札がぼんやりとした光を帯びて上代の手の中から飛び出した。それは迫りくる蛇をするりと抜け、鵜の額に貼りつく。

「オオオ……！」

すると、鵜は啼くのをやめ、その身を震わせるようにして自分に張り付いた札を払い落とした。結果、支援の啼き声を失った蛇たちは速度と力強さを失う。

「護り給え！」

続いて上代が印を結ぶと、襲い来る蛇と彼に間に現れたのは一匹の水蛇だった。半透明なその胴体で蛇達の攻撃を引き受ける。

「おお、存外固エじゃねえか」

「伊達に“結界師”なんてコードネームはもらってないよ。それに、今回は出し惜しみをするつもりもない」

上代の返答に、木島がからからと笑う。

「結構！ 戦いが楽しくなる分には歓迎だ」

「悪いな。その楽しみは長く持ちそうにないぜ」

そう言ったのは、木島が上代に気を取られている間に接近していた志波だ。

「化け物共々、刻んでやらあッ！」

鞘を抜き払った日本刀を、逆手に構え地面に突き刺す。シーレムビル前の一戦でも見せた、複数の敵に攻撃できる技、《^{エフェクト}ギガンティックモード

》だ。

鶴、木島共々飲み込んで、地面から刃が間欠泉のよう勢いよく噴き出し、容赦なく刺し貫く。あたりを血煙が舞い、その中心にいた志波が返り血に染まった。

だが、そのまま油断なくかつての相棒をにらみつける志波の顔が苦痛にゆがむ。

「ッ……な……！？」

見ると、志波が浴びた返り血の一部が槍の形に固形化し、彼の腹部を貫いていた。

「ククク、手負いの俺はちよいとばかり手ごわいぜ？」

「ぶ、“ブラム”ストーリーカー”か、テメエ」

ブラム「ストーカー（血液操作能力）はシンドロームの一つだ。吸血鬼ドラキュラを生み出した作家の名から取られていることからわかるように、吸血鬼を連想させる、血液を利用した能力が最大の特徴である。

血塗れ、傷だらけのままの木島が嗤^{わら}う。今度は右手に血液を集め、大きな鉤爪^{かぎづめ}をつくると、それを志波の胸に突き立て、豪快に投げ飛ばした。

「まだ《リザレクト》利くんだろ？ 立てよ相棒オ！」

投げられた志波は、数度地面を転がったが、そのまま地面にふす間もなく、膝立ちの状態まで立て直す。

「……誰が相棒だ、木島ア！」

「男の友情は拳の語らい。だとしたら殺し合うなら、相棒が親友じゃねえか？ 俺、お前とやっと初めて分かりあえた気がするぜ？」

おどけたように言った木島は、腕を組んでUGNの面々に目を配る。

「さて、志波に一撃くれてやったのは良かったが、いまいち攻撃が利いてねえみたいだな。もう少し楽しませてやってもいいか」

いたずらを思いついた子供のような含み笑いを浮かべ、木島はパチンと指を鳴らした。

その音に呼応するように、虎の脚がその身を震わせた。その震えが体を伝い、志波の刀で斬り付けられた尾の蛇がゆらりと体を起こす。そして、弓から放たれた矢のようにまっすぐに、今度は遥めがけて襲いかかる。

遥は、回避行動を取らなかった。その白い首筋に噛みつかんとす

る蛇は、その部分をガードした遥の腕に食らいつく。

だが、その牙が遥の体に食い込むことはなかった。

「ああ、そういえば嬢ちゃんは“白き龍人”だったっけな。“獣化”すれば堅^{ツル}エ鱗もあるか」

そこに立っていたのは遥だった。だが、その姿は人間とはかけ離れたものだった。学校の制服は着たままだだったので、胴体は分らないが、その四肢は乙女の柔肌の代わりに堅そうな白銀のウロコに覆われ、尻には尾、手には鋭い鉤爪^{かぎづめ}が生えている。そして頭は髪の毛の代わりに角が2本生え、可憐な唇は子犬くらいなら丸飲みできそうな大きな顎に変わり、岩石でも砕けそうな牙が並んでいる。白い全身の中、ただ1点、燃えるように紅い眼が噛みついた蛇越しに鵜を睨みつけていた。

遥のシンドロームの一つ、キュマイラ（肉体強化能力）の《完全獣化》である。キュマイラは大きな臂力を持ち、白兵戦に絶大な戦力となるシンドロームであるが、キュマイラをキュマイラたらしめているのは、そのシンドロームを持つ半数以上の者が持つエフェクト《完全獣化》だった。

このエフェクトは、全身を人外の異形へと変化させるものだ。その姿は個人差が非常に大きいが、大抵は獣化後、ただでさえ高いキュマイラの身体能力がさらに飛躍的に向上する。

遥の《完全獣化》は前述したとおり、彼女のコードネーム通りの姿だ。

獣化した遥はいまだに牙の刺さらない腕を加えたままの蛇を振り払うと、その長く伸びる体に沿って鵜に接敵し、下段に構えた右手

をその猿の顔めがけて逆袈裟に振り上げる。その一撃は狙い^{あやま}過たず眉間を傷付けた。

「グユ!？」と、甲高い悲鳴を上げて怯む鶴だが、遙は続いて右手を振り上げた勢いを持つて、体を回転させそのまま後ろ回し蹴りへと連絡し、その猿顔の側面、人間で言うところめかみに当たる部位を恐ろしく正確に蹴り抜いた。

龍の膂力で急所を責められてはたまったものではなく、鶴はその場でもんどり打つてのたうち回る。

その様子を見降ろしていた遙は己の体を確かめるように、視線を自らの体に這わせる。

「――久しぶりだな、この姿になるのは」

そのあまりの変貌ぶりに、木島はポカンと眺めていたが、やがて遙に負けないくらい大きく笑いだした。

「クク……ハッハッハ！なるほど、^{デュアルフェイス}“戦闘用人格”か！初めて見るけど、あの大人しそうな嬢ちゃんが、見事に変わるもんだ」

“戦闘用人格”は先にも述べたがオーヴァードが稀に見せる二重人格症状だ。一般の多重人格と違う点は、そのオーヴァードの侵食率が高くなれば切り替わりやすくなる点であり、そしてオーヴァードの能力の扱いに長けている。

切り替わった遙は笑われたのが気に食わなかったのか、ギロリと紅い眼を木島に向ける。

「笑っている暇があるなら首でも洗っている。このケダモノを片付けたらすぐに殺す」

「けだ……！？ ギャハハハハ！ 性格が変わったと思ったら語彙まで素敵になってやがる！ ますます面白え！」

その無遠慮な笑い声に口をはさんだのは上代だった。

「あんまり人を手放しで笑うもんじゃないよ。人にとっては笑い話でも、本人にとっては一番の苦しみということもある」

「あ？」

木島の注意が、上代に向いた。その視線の先で、上代は淡く燐光を放つ札を示して見せる。

「そろそろ、お楽しみも終わりにしようか」

上代が札を印を結ぶ指にはさむと、彼を護るように囲う、幻影の水蛇が初めて木島に視線を送った。

「甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸

（きのえきのと ひのえひのと つちのえつちのと かのえかのと みづのえみづのと）

一二三四五六七八九十瓊音

（ひふみよいむなやことにおと）

掛巻も畏き産霊之大神達の奇しき神霊に依りて

（かけまくもかしこきみむすびのおおかみたちのくすしきみたまによりて）

現出座る水の神彌都波能賣之命は

（あれいでませるみづのかみみづはのめのみことは）

汝此瑞津宝を以て 蒼生を鎮納よ

（いましこのみづのたからをもつて あおひとぐさをしづめおさめよ）

上代の素早く、しかし優雅な動作、そして淀みのない祝詞が進むごとに水蛇の存在感、威圧感が増してゆく。オルクス（領域支配能力）、ソラリス（薬物生成能力）の作る幻覚だということが分かっているのに、その息遣いさえも聞こえる気がする。

「神通神妙神力加持！」
じんつうじんみょうしんりきかし

祝詞の締めくくりと同時に上代が結んだ印をそのまま前に押し出した。それに押されるように、水蛇が木島に襲いかかる。その勢いたるや氾濫した川に似るものがあり、その巨大な顎は大きく開かれ、木島だけではなく、鵜も同時に飲み込んでしまう。

だが、木島は飲み込まれる直前、口が完全に閉じる前に、自らの体を変形させ、水蛇の牙と牙の間から抜け出してしまう。

「つとと……！ い、今のはアブなかったな」

「……勘は利く方らしいね」

木島は逃れられたが、もとより体も大きかった鵜は攻撃を避けそこね、水蛇に飲み込まれてしまっていた。むろん、これは幻であるので、実際に体内に食べてしまったわけではない。噛みついた後、水蛇はそのまま消えてしまっている。しかし――

——その身であった大量の水が小さな水蛇に変化し、鵜のあちこちにまとわりつき、その身の自由を奪う。

「なるほど。ダメージよか、行動が制限されるのがマズイわけだ」

もし木島が回避に失敗していたら同じように行動を制限されていた。攻撃にも防御にも支障をきたし、完全に王手を掛けられていた。しかし、今の状況も完全に王手をかけたわけではないが、趨勢はほぼ決したといってもよかった。

「だが、そちらは戦力半減。かたやこちらは志波君がちょっとやられただけで、至って元気だ。降伏をお勧めしたいんだけど、どう？」
「ククク、面白くねエ冗談だ。せっかく楽しくなってきたところなのよ」

「余裕だねえ。敢えて明かすがこっちの戦力はこれだけじゃない。もう一人“ウィザード”が来ることになってる。さすがのアンタも笑ってられなくなるんじゃないかな。情報を提供してもらえれば悪いようにはしない」

自称・江間市最強のオーヴァードの名前を出して、再度降伏を促す。自称で江間市最強のウィザードだが、実質もそうであるし、江間市に限定しなくてもUGN全体でも指折りの強さであることを、上代はよく知っていた。そしてその強さの一端を、目の前の木島も見えていたはずだ。

それにウィザードが揃えば、シーレムビル前の戦いとき、木島が「負けが確定してる」と評した状況にかなり近くなる。木島は必要以上にスリルを求め、それを楽しむ傾向があるようだが、スリルさえなければ投降という選択肢をとることも考えられた。

だが、木島が返したのは、不敵な笑みだった。まさに「してやったり」と言いたげな。

「……？ 木島、テメエ、何を隠してやがる」
「志波、お前、昔俺に言ったことがあったよな。『ちったあ頭使え』」

つてよ。その言葉ア、そっくりそのまま帰してやるぜ。……あのビルで俺はデメエら全員と、あと2人のオーヴァードを確認してる。さすがにそれが全部揃うと、勝ち目がなくなつて面白くねエ。なんでまた、俺がああウィザードとかいうのに対して全く対策を立ててねえなんて考えるんだ？」

木島に返答されて、志波はぐつ、と言葉に詰まる。その様子に、木島は勝ち誇つた表情で、さらにヒントを付け足す。

「俺は不思議でならないねえ……。何でアンタら“何で鵂がコイツ1体だつて言い切れる”んだ？」

「……！ つまり、要約すると別の場所で鵂が出現していて、ウィザードを足止めしている……. といったらしいな」

「はい、ご名答。街中で人でも襲つているかもしれねえなあ？」

こんなところでグズグズしててもいいのかなあ？」

「口を閉じるのは嫌いらしいな。なら、その顎を引き裂いて閉じられないようにしてやるが？」

遙が、木島に向けて目を細め牙をむき出しにしてみせる。だが、木島はそれに動じることもない。

だが、動じていないのは志波や上代も同様だった。そして、遙も怒りは見せるが焦りは見せていない。

「木島、さすがにその挑発には乗らねえよ。俺たちはここで戦う」

もう一体の鵂の存在を明かされても、実はそんなに状況は変わっていない。来る予定のウィザードが来なくなっただけの話で、もう一匹の鵂のほうはウィザードが対応しているので心配はいらない。

木島が狙つたのは戦力の分断だ。遙たち3人のうち1人でも鵂を捜しに行ってくれば、誰が欠けてもこの場でUGN側は大きく戦

力が低下し、形勢が逆転する可能性すらある。

「さすがに馬鹿じゃねえか……」

目論見が崩れても、木島の笑みは崩れなかった。

活動報告で今回使ったエフェクトのちょっとした解説が読めます。
ダブルクロスをご存知の方向けですけど。

ちなみに、今までの分のあとがきもずっと活動報告で書いてきたのでよかったら読んでみて下さい。

『結構、間の抜けた話だな』

呼吸をする体のないモリトであるが、それでもその言葉はため息交じりの響きを持っている。

学校から出て、鶴との戦いに向かう遥と別れてから1時間経っていた。学校とUGN江間支部の距離は歩いてやく10分と聞いている。

つまり、一樹は迷っていたのだ。

シーレムビル戦の後、一樹は一度気を失った状態でUGNに運び込まれている。そのあと、自分の足で自宅に帰ったので、遥も一樹自身も、一樹が江間支部の場所が分かると思っていたのに。

「モリトも憶えてないの？ 道」

『あいにく記憶喪失中だ。私の頭は記憶にむいていないらしい』
「記憶喪失と記憶力って関係なくない!？」

モリトが頼りにならないとなると、自分の記憶を掘り起こすしかない。

「ええと、この辺は確かに通ったはずなんだよね。それから中央通りを横切って西町に入ったから、支部は東町にある。ここまでは合ってるはず」

『ふむ、確かにこの大きな赤い“クルマ”のある建物は通ったのは憶えている』

一樹がいたのは消防署の前だった。いまいる江間東町は、公共機

関の設備の多い区画である。ちなみにモリトはすでに自動車の中に牛はいないことを理解している。ならば何で動くのかという質問に答えるのはいささか大変であったが。何しろモリトには燃料や電気という概念すらないのだ。

その時の苦労を思い出して、苦笑をしたところで一樹ははたと気がついた。

「待つて、よく考えたらUGNってヒミツの組織なんだから、堂々と看板掲げてるわけないじゃないか」

『あるわけがない目印を探していたのかね……。ますますもって間抜けな話だな』

「いやいや、モリトも同罪だから！ 気がついてなかったから！」

『私の記憶では検怪^{けがいし}異使は秘匿された組織などではなかった』

モリトの記憶の中にもUGNに相当する、魑魅魍魎^{ちみもつりょう}と戦うための組織があったらしい。それが検怪^{けがいし}異使と呼ばれる者たちであったという。それはUGNとは違い、陰陽師と同様に表の世界に認知され、社会的な立場も高かった。

「現在に役に立たないコトは憶えてるんだね……」

ともかく、探している目印が頼りにならないのは分かった。となると途方に暮れてしまう。

『連絡があるまで分かりやすい場所で待機していたほうがよいと思うのだが』

「ん、そうだね。……となるとツールさんの事務所がいいかな」

やっと目的地が定まると、足取りも軽くなる。

もう日は黄昏時を過ぎかけ、まだ緑豊かな街のそこかしこからは松虫や鈴虫が合唱をはじめていた。

「しかし静かなもんだね。……本当にこの町のどこかで遙ちゃん達、戦ってるのかな」

人知れず戦っている遙や上代、一樹はその一端をあのかのビルの前で戦いで見るようになった。ジャーム達から向けられる殺意、飛び散る血しぶき。

致命傷を負って、地面に転がる遙の姿が思い出される。《リザレクト》で復活したとはいえ、痛みを感じないとは誰も言っていない。死なないとはいっても、それは恐ろしかったに違いない。それなのにどうして、遙は戦っていられるのだろう。

「僕にも……戦うことになるのかな」

『戦うべきではない、と考えれば、戦うことはない。私はそう思うがね』

「……モリトって神経質そうやしやべり方するけど、結構細かいこと考えないよね」

『失礼な。悩むのが嫌いなだけだ』

軽口をたたきながら、一樹はこの心の中での存在ともずいぶん仲が良くなったな、と感じた。もっとも、オーヴァードのことも含め、まだ自分が深刻なココロのヤマイではないかと疑うことも時々あったが。

時刻は夕刻、一樹はすでに商店街のある中央通りに近づいていた。本来なら、買い物に来た主婦でにぎわう時間のはずだが、妙に人毛が少ない気がする。静まり返った空気に、自分の足音が大きく響い

て聞こえた。

ふと気がつくと、耳に突く声が聞こえた。まず、連想したのがお経だが、どうも違う気がする。そして思い至ったのは。

「まさか、これ……」

『馬鹿な、アレはUGNの者たちと戦っているはずではなかったのか』

今生憎しや 人の血欲しや 消えぬは恨みか 此の闇か

嫌な予感がしつつも、一樹はその先の角から音源と思われる場所を覗き込んで。

恨性深しや 彼の肉欲しや 癒えぬは痛みか 此の病か

そこには何かがあった。一見しただけでは何かはわからない、大きな毛の塊に見えたので一瞬は大きな猪を想像したのだが、尻から背でによると蠢いている蛇を見ればそうでないといわかる。

魂精暗しや 子の霊欲しや 見えぬは陰りか 此の已か

それが何かと、理解しようとする頭を理性が否定しているのを、そして体中から血の気が引いていくのを感じた。そして一樹は戦うことを恐れながらも敵を恐れることを忘れていたことを知った。得

体のしれない生き物が、これほど怖気を感じさせる存在だったとは。
だが、一樹はそこから目が離せない。なぜなら、

『あの、物の怪の前にいる少年、見覚えがないかね？』
「か、柏木君だ」

柏木圭太は、一樹と遥のクラスメイトの一人だったのだ。

今生憎しや 人の血欲しや 消えぬは恨みか 此の間か
恨性深しや 彼の肉欲しや 癒えぬは痛みか 此の病か
魂精暗しや 子の霊欲しや 見えぬは陰りか 此の已か

噂では、鵜の恨み歌を十回聞くと、魂を取られてしまう。一樹はまだ2回目だが、柏木はもう何回も聞いているのかもしれない。次が十回目なのかもしれない。

しかし、魂を抜かれても死ぬわけではない。鵜を倒せば、魂は取り戻せる、という話だった。だったら、ここは無理をする必要はない場面だ。むしろ戦って周りに被害を与えることこそ恐れなければならない。

だが、それは所詮理屈だ。感情ではなかった。

気がつくと、一樹は物陰から飛び出すとそのままの勢いで鵜に駆け寄り、鵜の横っ面を蹴り飛ばしていたのである。当然のことながら、恨み歌は中断され、鵜はギロリと、その視線を一樹に向ける。

一樹は臆さず、その視線を受け止め、呆然とするクラスメイトの前に立った。

「……萱嶋？」

「柏木君、だ、大丈夫？」

『一樹、結界を張りたまえ。この少年にオーヴァードの真実は見せていかん』

それは上代や遙から言われていることだった。UGNの基本方針は、オーヴァードであることは一般人に伏せ、なるべくレネゲイド絡みの事件には巻き込まないことだった。

「（ど、どうすればいいんだっけ？）」

柏木の前なので、心の中で話しかける。

『自分の周りの空気がゆるい竜巻みたいに回るのを想像したまえ。そして、その竜巻の範囲を広げる』

「う、うん」

想像する。不意にあたりが静かになり、周りを静かにする風が自分を中心に広がっていく。すると、その背後でどさり、と人が倒れる音がした。

「柏木君！？」

『大丈夫だろう。結界が上手く張られた証拠だよ。それより、問題は目の前の化け物だと私は認識しているがね』

モリトにいわれ、一樹はその化け物——鵜と対峙する。

「ね、ねえ、ホントに代われないの？」

『それができるならとつくにそうしている』

一樹がきいたのはシーレムビルでモリトが初めて言葉を話した時のことだ。あの時、モリトは一樹の体を一時的に乗っ取り、見事に

ジャームを撃退して見せた。

だが、あれから何度やつても身体の主導権の交代はできず、これから非常事態のときは戦いに長けていると思われるモリトに代わったほうがよい、という考えは捨てざるを得なかったのだ。

鵜は、一樹を敵と見定めたようだった。先ほども体勢を低くすると、尻の蛇がさらに3、4匹生えてくる。そして、その蛇が体を伸ばすと、一斉に一樹に襲いかかった。

「き、きた！」

『落ち着きたまえ。心を静め、自分を炎だと考える』

「え？ え？」

『だから、君は、君自身が炎だと——』

間に合わなかった。鵜の甲高い啼き声に後押しされるように加速した蛇はそのままの勢いを持って一樹に喰らい付く。幾本もの牙が体に食い込むのを感じる。

肩、わき腹、左手。最初の一瞬は衝撃だけだったが、続いて灼熱にも似た激痛が走る。

「ぐッ……！」

一樹はやつとのこととで悲鳴を飲み込み、自分の状態を確認——そして、息を呑んだ。

左手は食いちぎられ、そばに落ちている。その上である肩はゴツソリと抉れ、そしてわき腹は完全に貫通し、向こう側が透けて見えるほど大きな穴が空いていた。

「——ッ！」

『一樹、しつかり気を持て！ 今の君ならこのくらいでは死にはしない！ それより奴の攻撃は終わっていないッ！』

痛みにゆがむ視界の中で、鵜が大きく体を震わせるのが見えた。その次の瞬間、目の前に大きく口を開けた蛇が突然現れる。そして視界は暗転。衝撃に抗するすべもなく、一樹は後方へと転がされた。肩、わき腹、左手に続いて、今度は右目がやられたらしい。画面の右半分が焼かれたように熱く、ドロドロと血が流れていくのが感じられる。

（これは死んじやったか……）

ふっと、気が遠くなった。しかし、それを引き戻すかのように、体に波が走った。心臓を中心に、末端に向けて熱の波が駆け巡り、感じていた痛み、苦しみを取り払う。

気がつくとき、膝をついていたものの、身体が起き上がっていた。

右目の視界、千切られた左手、穴のあいたわき腹、まだ擦過傷程度の傷は残っているが、全て元通りになっていた。

「こ、これが《リザレクト》…… かあ」

『落ち着いたかね？ さて、攻撃に転じよう』

「どうすればいい？」

『まず、相手を凍らせる。左手を鵜に向けたまえ』

一樹は言われたとおりに、左手を鵜に向ける。

『そして周囲の冷気を感じ取り、それを鵜のほうに集めるように想像しろ』

「……え？」

『だから、周囲の冷気を鵜に集めると言っている』

「ど、どうやって」

『想像するだけでいい』

「それだけじゃ分かんないよ!」

昨日木島が接触してきたときにはあれだけ簡単に能力が発動していたが、自分で制御して能力を発動させることがこれほど難しいとは思わなかった。

モリトの教え方が悪いとは言わないが、言ってることは理解できても、分からない。全く実感ができないのだ。

そうやって困惑している間に、鵜の蛇がシャーッと威嚇音を発する。再び攻撃してくるつもりだ。

「わ、また噛みついてくる」

『さっきも言ったが、自分を炎だと考えたまえ。炎には物理的な攻撃は通用しない。ゆらりと揺らめいて受け流してしまう』

「……ごめん、たぶん無理」

蛇が動いた。4匹の蛇がまとめて一樹に襲いかかってくる。一樹は自分がオーヴァードであることをわすれ、蛇の動きをよく見て、普通に回避を試みた。

はたしてその試みは実を結び、とりあえず一撃目は襲い来る牙を上手く避けて受け流すことに成功した。

「よし!」

『……油断してはいかん。すぐに第二波が来るぞ!』

モリトの言葉通り、鵜はその体を震わせ、攻撃させた蛇を素早く自分の元に引き戻すと、間をおかずに二撃目に入った。

「うん、今度も――」

蛇の動きを見極めようとしたとき、ぐらり、と視界が揺れた。

「あ、……れ？」

『毒か、蛇であるからには警戒してしかるべきだった……！』

いつも冷静な印象を持つモリトの口調も焦りを帯びる。

眩暈に耐え切れず、膝をつく。目の前には蛇が迫る。もう間に合わない。一樹は先ほど、味わった衝撃を脳裡に描きながら、来たる攻撃に一樹は身構えた。
だが、

「《フリーズ》……」

聞き覚えのある、声とともに、突然目の前が紺色に染まった。

「……《アンド・ガード》ッ！」

続く掛け声に合わせ、目の前から凄まじい冷気が集まるのを感じた。まるで真冬の雪の日のように。

目の前にたなびく、紺色の外套の向こうに、人間大の氷の壁ができていた。

「し、師匠？」

一樹が、これからオーヴァードとしての技を教えてもらうことになっていった“ウィザード”。彼が目の前に立っていた。

「あー、危なかった。もうちょっと様子を見ようと思ってたんだけど、今のスルーしてたら君、死んじゃってたねえ」

「ま、まさかずっと見てたの!？」

「やー、最初から出てもよかったんだけど、それじゃつまらないじゃない? どうせ出るならカッコよく思ってたね」

『……あきれた男だな』

ウィザードには聞こえないであろうモリトのつぶやきに、一樹は心の中で大きく賛同する。

同時に、大きく安堵の息をつく。ウィザードが来たからにはもう安心だ。シーレムビルで見た凄まじい強さは記憶に新しい。後は彼に任せておけば、この鵜は撃退できるだろう。

「さて、一樹君。僕は約束したね? オーヴァードの力の使い方を教えてあげるって」

氷の壁を維持しながら、ウィザードは肩越しに視線を向ける。

「う、うん」

なぜ、それを今言うのだろう。

一樹の背中を冷たい悪寒が滑り降りる。

「丁度いい機会だ。実戦訓練といこう」

「え……!？」

「『え……!？』じゃない。返事は『イエス、^{マスター}師匠!』だ!」

「い、いえす、ますたー!」

白い歯を見せてサムズアップまで付けたウィザードの言葉に、思わず、一樹は直立し、敬礼までして応えてしまう。

「よろしい、では攻撃だ！」

そう言つて、ウィザードは氷の壁を解く。その向こうに、新たな敵を認めて、姿勢深く様子をうかがう鵜の姿があつた。

「師匠、僕、さっきも攻撃しようとしてダメだったんですけど」

「それは君の想像力が足りないからだ。想像は妄想！ さあ、妄想しよう。今から君はあの化け物の尻尾を氷に閉じ込める！ 復唱！」

「今から僕はあの化け物の尻尾を氷に閉じ込める！」

「よろしい、左の掌をあの蛇に向けるんだ！ 返事は！？」

「イエス、マスター！」

元気よく答え、一樹は開いた左手を鵜の尾の蛇に向ける。

勢いのいい指導のせいだろうか、何となくなんでもできそうだと思えるくらい、気分が高揚してきた。

「では、ここから復唱だ！ 《フリーズ》！」

「《フリーズ》！」

冷気を含む風が掌の先に集まるのを感じた。

「その掌をギュツと握りしめながら、《アンド・ロック》ッ！」

冷気が動くのを感じた。あたりの空気と、掌の動きはすでに連動している。掌の先に集まる冷気を全て拳の中に掴み込んでしまつてもりで、一樹はぐつと拳を握りしめ、復唱する。

「《アンド・ロック》ッ！」

全てを感じることができた。

冷気が蛇を包み込む。そして、そのまま氷点の遙か下の気温まで引きずりおろし、一瞬もたたずに、蛇は凍りついて動けなくなる。

「いいよ、いいよ！ さあ次は凍りついた蛇を氷ごと砕く！」

「イエス、マスター！」

「拳を蛇に向けたまま、《ブレイズ》ッ！」

「《ブレイズ》ッ！」

今度は拳の中がカツと熱くなる。今拳を開けば、きっと熱く燃え盛る火の球がある。そう確信できるほど。不思議なことに熱で自分が焼けることは考えられなかった。この炎は味方だ。望まないものを燃やしたりしない。

「握りこんだ指を外に弾くように開きながら、《アンド・ブラスト》ッ！」

一樹は手を開く。そこには眩しく燃える火の玉があった。

ますます気分が高ぶるのを感じながら、それを押し出すように復唱した。

「《アンド・ブラスト》ッ！」

それに応える様に火の玉は一層眩しく燃え、前方に弾き出された。それは、彗星のように尾を引きながらまっすぐに目標である凍りついた鶴の尾の蛇に命中する。

超低温の氷と超高温の炎がぶつかった影響か、ビシィッ、という音とともに雷に似た光が走り――

――尾の蛇はその身を覆っていた氷ごとガラスのように砕け散っ

た。

「よし！ 狙い通り！ どう、マスター？」

「……………」

きつとノリよくサムズアップでも返してきてくれると思って、一樹はウィザードを振り向いた。しかし、ウィザードは砕け散った蛇の欠片を見たまま固まっている。

「マスター？」

「…………ん？ ああ！ よくやった！ さすがこのウィザードの弟子！」

呼びかけると、ウィザードは取り繕うように、一樹の期待通りの反応を返す。そして、油断なく鵜に視線を移した。

その視線を追って、一樹も鵜に向き直る。

尾の蛇を失った鵜は、静かにそこにたたずんでいた。

だが、存在感はいきり立っていた先ほどよりも格段に強い。身体の一部を失って弱体化するどころか、まるで何かの束縛から解放されたかのように威圧感を増している。

鵜は一樹とウィザードに順番に視線を向けると、ゆっくり天を仰ぎながら息を吸って、闇夜の空に向かって吠え始めた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

それは、身体の一部を失って悲しんでいるようにも、痛みに叫んでいるようにも、自らを鼓舞するための関ときの声を挙げているようにも聞こえた。しかしいずれも明るい感情とはかけ離れた、負の力に

満ちた声であることは確かだ。

宵闇の空に向けて放たれる啼き声。

一樹にはなぜか、それが一つではない気がした。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

目の前でオーケストラの演奏を聴いている時の様に、はつきりと空気が震えているのが分かる。先の上代の攻撃で尾の蛇を失った後の変化だ。

上代の水蛇に束縛されたまま、空に向かって啼くその姿は何かを呼んでいるようにも見える。

いつまでも続くと思われたその鳴き声も次第に止んでいき、それが完全に終わった瞬間、空を向いてた鵜の眼がまっすぐ上代を向いた。

「来るぞッ！」

今生憎しや	人の血欲しや	消えぬは恨みか	此の闇か
恨性深しや	彼の肉欲しや	癒えぬは痛みか	此の病か
魂精暗しや	子の霊欲しや	見えぬは陰りか	此の己か

もはや聞きなれた恨み歌。その憎しみの対象は今明らかに上代達に向いている。

上代は身を低くし、その恨み歌から止めようと懐から札を取り出す。

「妨げ給え」

上代の言霊と共に手にした札が光を帯び、鵠に向かって放たれる。だが、その札はその途上、横から飛び込んできた“血で固められた手裏剣”によって撃ち落とされる。

「同じ手は何度も使わせねエよ」

それを投げた木島が、低く笑って言った。

妨害の術が失敗したことに、齒噛みする間もなく鵠が吠える。

「クオアオオ——ッ！」

大きく開けた猿の口から、音波を凝縮した音波の弾が吐き出され、1メートルも進んだところで破裂した。散弾銃のようにいくつもの弾に分かれた音波は狙い定めたように恨みの対象である、志波、上代、遙にそれぞれ襲いかかる。

「護り給え！」

上代が素早く印を切り、水蛇を呼びだして、三人を囲ませる。

だが、その音波の弾に込められた力はよほど大きかったらしい、多少勢いを減じたものの、そのままそれぞれに命中する。

志波は、とっさに着けていたネクタイを引きむしる様に解いた、するとそのネクタイがモルフェウス（物体変化能力者）の力でたちまち刀程の長さのあるコンバットブレードに変化し、音波の弾を迎え撃つ。

だが、焼け石に水だった。それほど速度も速くなく、簡単に弾き飛ばせそうな印象だったが、刃が球面に触れた瞬間あさつての方向に吹き飛ばされる。

コンバットブレードは何とか握りしめることで完全に身体から離

れるのを防いだが、それに気を取られたのが良くなかった。音波の弾の衝撃に対して身構えることが全くできなかったのだ。

にぐじゃ

その生き物がつぶれる嫌な音が爆音に近い音量で聞こえたその一瞬に、痛みはなかった。志波の意識が瞬間的に刈り取られたくらいだ。気がつけば、水の中で、全身が全く動かない状態になっていた。

「——ッ!？」

奇跡的に意識があるらしい、脳に絶えず送り込まれる全身の感覚からの信号から、これ以上ないまでに体中がぼろぼろになっているのが理解した。あの音波の弾に込められた音波が振動となって体中を駆け巡り、破壊して回ったらしい。損傷のない骨はないだろう。息もできない。

——そして、もう再生（《リザレクト》）は働かない。

分かっていた。

オーヴァードの体をレネゲイドが癒してくれるのは基本的に侵食率が100%を超えるまでだ。

それ以降で致命傷を負えばオーヴァードでも死んでしまう。そして、志波は先ほど木島の攻撃を受けて《リザレクト》したときに100%を超えてしまっていた。

（——俺は死ぬのか）

レネゲイドウィルスに侵された身であるから、志波もいつかはジヤーム化してしまうのではないかと心の片隅で常に恐れていた。だが、今の今まで死ぬことは考えていなかった。

傷付けても治ってしまい、レネゲイドという病以外の病気には罹らない。

その事実にも、志波は死への恐怖を忘れてしまっていた。

そして思い出した。

（いや……死ねねえな。こんなところでは死ねねえ）

死ねない理由を。

真っ先に思い浮かんだのは、身も心も変わり果てた友の姿だった。

（もうヤツを引き戻して、元の生活に戻るのは無理だ。それは分かった）

おそらくもう木島はジヤーム化している。それを日常の世界に戻すのは不可能だ。

どこで、道を外したのかは分からない。

それが自分のせいなのか、それもと他の人間のせいなのかは分からない。

（だが、これだけは変わらねえ。お前が俺の相棒だった事実だけはお前がどれだけ変わろうと覆らねえ）

心に灯がともる。

その火が燃え広がるように全身が熱くなる。

（だから、お前の始末だけは――）

感覚が戻る。身体が動き、志波は水底に足をつけて力いっぱい立ち上がった。水面を破り、腰から上が水上にでる。冷たい水が上半身のいたるところから流れ落ちていく。

「……くつくつく、おいおい、志波ア、まだ余力を残してやがったのかよ？ 完全にくたばったと思ったぜ」

「別に力が残ってて起き上がったわけじゃねえ。俺を起こしたのはお前だ、木島」

そう言っただけで志波は握りしめたままだったコンバットブレードを木島に向ける。

「お前が変わっちまったことは認める。もう、お前が無実である可能性を探すのももう止めた。俺に出来るのはお前に最後の最後まで向き合うこと、それだけだ」

「ハッ、カッコいいねえ、相棒。だけど状況は見てるか？ もう立ってるのはお前一人だけだ。たった一人で何が出来る？」

「状況が見えてないのは貴様のほうだ」

割り込んできた声の先、池の右手で城崎遥が立ち上がっていた。その反対側では、上代もその身を起こしている。

「……………」

「正直、もう寝てたかったけど、起き上がった甲斐があったかな」

泥だらけになった上代が意味深長な含み笑いを浮かべる。

「あん？」

「やっとあんたの笑顔を消せた」

「……！」

呆然としていた自分に気づいていなかったらしい。上代に指摘された木島は、笑みの消えた口元を歪ませた。

「起き上がっただけでずいぶん粹がるじゃねえか。本当に粹がりたけりゃ、もう一発喰らってからにしろ」

パチン、と木島が指を鳴らすと、鵜がその身を震わせる。先ほどまでは、その動作の後、尾の蛇がもう一度攻撃を仕掛けてきた。もう、蛇はいないとなると。

「……！ もう一発来るぞ！」

鵜がその口を開け、音波の弾が吐き出される。

「通らんとは思うが…… 妨げ給え！」

上代が、妨害の術を使うために懷から札を取り出し、鵜に向かって投げつけた。

だが、それは先ほども防がれたとおり、血が固まってできた手裏剣に撃ち落とされる。

「通らねえと思うなら、はじめから無駄なこととはしない方がいいぜ？」

「通らんとは思ったが、無駄なことだとは思ってないさ。あんたを動かせただけでもね」

音波の弾は先ほどと同じように、破裂しいくつもの小さな弾に分

かれる。だが、

「範囲が狭い……？」

弾が散らばった範囲はそれほど大きくなかった。弾は上代には向かっていなかった。範囲的に当たる可能性があるのは遙と志波のみだ。

「来るとわかっていれば避けるのは容易^{たやす}い」

軌道を読んだ遙は危うげなく、そして志波も元々よかった運動神経を持って、なんとかこの音波の弾による攻撃を避ける。

「切り札を切ったな」

横に並ぶ志波に遙が話しかけてきた。

ここで上代を攻撃の対象から外す意味はどう考えてもない。つまり、対象から外したのではなく、対象に入れられなかったのだ。つまり、全体に攻撃できるエフェクトはもう使えない、と見ていいだろう。広範囲に効果を及ぼすタイプのエフェクトは、回数などいろいろ制約がついていることが多い。

「とはいえ、そう何度も避け続けるのも難しいぜ。お前や俺はともかく、上代を狙われたらまず避けられねえ」

「だったら取るべき行動は一つに決まっている」

龍人が大きな口を歪ませて、鋭く上がった牙をむき出しにする。

「奴がもう一度攻撃する前に殺し切る……！」

今までの戦闘でいくつか分かった。鵜のあの音波の弾は打つのに少し“溜め”が要る。二つ目は、一度溜めたら二度、溜めることなく攻撃ができるということ。つまり、二度攻撃を凌しのいだら、その間は攻撃が来ない。

その“溜め”の間に倒すことができれば、次の攻撃の凌しのぎに心配することはない。

「おいおい、俺のこと、忘れてねえかあ？」

木島が嘲笑とともに動いた。ふらりと足を踏み出したかと思うと次の瞬間には全く別の方向を転換し、一気にトップスピードまで加速する。

その変則的な動きに、遥たちは敵を見失うまでではないものの、目を離すまいと足が止まった。その瞬間を逃さず、木島が斬り込む。木島は空手かと思いきや、左手に小さな果物ナイフを構えていた。そのナイフの刃を、自らの右腕の肘から手首までをざっくりと切り裂く。

「くああああッ！　いい痛みだぜエ！」

勢いよく噴き出した血液は、幾本もの槍の形となり志波を襲った。志波はコンバットブレードを構えて、正面から立ち向かう。

問答無用で意識を持って行かれないよう、正中線への攻撃は自分の得物で捌さばいた志波だったが、それでも左肩、腹、右脚を貫かれ、頬、右手、腰を掠かすめ裂かれた。

意識を刈り取るべく強烈な痛覚信号が志波の頭を打つ。

腹の底からは傷付けられた内臓からの血液が、喉を逆流してくる。

だが、志波はそれらを全て押し殺し、全身全霊を込めてコンバッ

トブレードを地面に突き立てる。

「うおおおおッ——ッ！」

二度目の《ギガンティックモード》。今回もつてきている武器は、今のコンバットブレードで打ち止め。つまり、これで敵が倒れなければ素手で戦うしかない。だから、出し惜しみはしなかった。

地面を通ったコンバットブレードが、木島と鶴の足元から間欠泉のように噴き出す。モルフェウス（物質操作能力）の力で可能な限り強化された刃は、妨げるあらゆるものをあつさり突き抜け、木島と鶴を貫いた。

「……や、やるじゃねえか、相棒」

木島は全身に傷を負い、先ほどとは比べ物にならない量の血液を流す。だが、その口元はやはり笑っていた。

「だが、残念ながら相討ち……だ！」

一回目の《ギガンティックモード》のときと同様だった。返り血がそのまま槍になり、カウンター気味に志波の身体に突き刺さる。

しかし、そこまで木島も力尽きたらしく、反撃直後、元々志波の身体に突き刺さっていた分の血の槍も含めて、液体に戻り、その場にバシヤリとぶちまけられた。木島自身も、その血の海の中に倒れ込む。

志波はかろうじて意識は保っていたものの、その場に膝をついた。《リザレクト》が利かず、木島の血の槍による刺し傷がそのまま残ったので、これ以上戦うことはできないだろう。

「上代お！ やれッ！」

志波が声を振り絞るまでもなく、上代はすでに水蛇の召喚を終えていた。印を結ぶとともに鵜に向かって、それを放つ。

「**神通神妙神力加持！**」

志波によつて、露払いされた、その道に水蛇の体がまつすぐに伸びていき、その顎で鵜の脇腹に食い破つた。

苦痛に鵠が上げた甲高い悲鳴を合図に、後方に控えていた遙が鵠に向かって突進した。

キュマイラの並外れた脚力が生み出すダッシュ力は、鋼鉄より硬い竜鱗に覆われた遙自身を、巨大な弾丸に仕立て上げる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオアオオオオオオオオオオオオアアアアアッ」！

遙の接近を感じ取ったのか、鵜は血にまみれた猿顔を恨みに任せて歪めて睨み、怒りに任せて威嚇するように絶叫する。

火事場の馬鹿力というのだろうか、傷だらけの体で鵜は水蛇を引きずって回避に動こうとしていた。

「おいおい、少しは空気読んでもらわなきゃ」

この期に及んで間の抜けた声とともに鵠の額に札が張り付いた。

「戒め給えッ！」

張り付いた札が青い炎を發して燃え尽きるとともに、もともと鶴

を拘束していた水蛇と、先ほど新しく召還された水蛇が一層力を増して、鵜をさらに強く押さえ込む。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

遙は、いよいよ哀れにさえ響く鵜の啼き声に顔をしかめながら、

「——いい加減にその五月蠅い口を閉じろ」

勢いそのままに、その拳を鵜の口の中に突き込んだ。

力任せな印象のある一撃だったが、いかに走り、いかに突きを入れるか、キュマイラの攻撃力を最大限に発揮するために計算しつくされた、極限の攻撃である。破壊されるのは口だけで済むわけがない。

拳から与えられた衝撃は散弾銃の弾のように、鵜の体内で拡散され、あらゆる場所に致命的なダメージを与える。鵜は吹き飛ばされるところか、かえってしばらく微動だにせず、やがて体のあちこちを破裂させながら崩れ落ちた。

**

それは、強力無比な一撃だった。目の前の鵜から吐き出された音波の弾。それらは散弾銃のように四散し、ウィザードと一樹に襲いかかる。

そこで、ウィザードが動いた。一樹の前に立ちはだかると、《フリーズ・アンド・ガード》を使い、氷の壁を目の前に出現させる。

しかし、降り注ぐ音波の弾はそれをもとめせずに砕き切ると、ウィザードの体に容赦なく突き刺さった。

そのまま破裂してしまいそうなほど、彼の体が大きく痙攣し、後方に弾き飛ばされ壁に激突し、びただし血が全身からぶちまけられる。

「ま、マスター!？」

「だ、大丈夫、まだ《リザレクト》利くから」

血を吐きながら軽口を叩いたかと思うと、ウィザードの全身にあった傷がみるみるふさがっていく。その途中で何事もなかったかのようにすつくと立ち上がった。

「全く……死ぬ思いなんてするもんじゃないね」

「マスター。あいつ、さっきまで二回攻撃してた。もう一回来るかも」

一樹は敵の攻撃を5回も見てきた。そのうち4回はそれぞれ2回ずつの連続攻撃だ。

それをしてきた蛇はもう片付いているので安心していいのかもしれない。だが、一樹はそこで油断する気にはなれなかった。2回目目の攻撃に入る前に必ず身体を震わせていたのも憶えている。

そして、今、鵜はまさしく身体を震わせていた。

鵜は口を大きく開け、2発目の音波の弾を発射する。

だが、今回の散弾の攻撃範囲はそれほど広くなかった。狙われているのは二人。一人はウィザード、そしてもう一人は、

「僕じゃない……!？」

音波の弾の行き先を見て、一樹は驚愕した。《ワーディング》内に倒れていた柏木だ。戦闘のなか、鷗も気にする様子がなかったのですっかり存在を忘れていた。

柏木はオーヴァードではない。あの音波の弾を受けたら、冗談ではなく身体が破裂してしまうだろう。

選択肢など思い浮かばなかった。考えるより先に身体が動いた。

一樹は防御も何もかもをかなぐり捨てて、柏木の前にその身を投げ出す。

肉が裂け、内臓がかき回され、全身が焼けつくような痛みを訴える。もうずいぶんな時間がたったと思われるがいつまでたっても《リザレクト》は始まらない。

『気をしっかり持て、一樹ッ！』

痛みに気を失いそうになったとき、モリトの必死の呼びかけが聞こえた。

（動け……！ 動け僕の体ッ！）

やっと、やっと見つかったのだ。“ 周りを不幸にする萱嶋一樹”の原因が。

これからそれを払拭する。

誰かを守ることできる。

誰かを幸せにすることもできる。

「やりたいことがたくさんあるんだ、死んでたまるか！」

声が出ると同時に、自分の身体がやっと修復されたことを知った。

『よく起き上がった。一樹、前を見たまえ』

うつ伏せになっていた身体を起こす。そのまま前方を睨みつける。

そこに鵜がいた。今、鵜の注意が向いているのは一樹ではなかった。もう一人の人物、ウィザードだ。よく見ると、すでに鵜は胴体を《コールド・アンド・ロック》で凍らされている。そこに、ウィザードが炎の弾（《ブレイズ・アンド・ブラスト》）を放ったところだった

すでに凍っていた鵜の胴体を、火炎の弾が命中し、砕く。鵜もこれは利いたらしく、しっかりと大地を踏みしめていた脚のうちの一本がぐりと折れる。

ウィザードは攻撃の直後、一樹に駆け寄って言った。

「一樹君、鵜はあと一回、攻撃してくる。僕はあと一回、《リザレクト》が使えるが、君は僕が見る限り、もう使えない」

それは、分かった。先ほども一回目の《リザレクト》に比べてが肉体が再生するのが異様に遅かった。

遙は言っていた。オーヴァードを不死身たらしめる《リザレクト》は無制限ではない、と。今が《リザレクト》が使えない「侵食率が100%を超えた状態」なのだろう。

「《リザレクト》は使えないが、かわりに侵食率が100%を超えれば、オーヴァードの力も飛躍的に上昇するんだ。つまり、僕より、君のほうが今は攻撃力が高いのさ。そこで、君に攻撃役を任せたい。そこにいる君の友達は僕が守ろう」

一樹は、満足にオーヴァードの能力を扱えるわけではない。そんな大役を任せられて、果たすことができるか。

だが、一樹はそんな心に生まれた躊躇^{ためら}いを押さえつけた。これは理屈ではない。できるかどうかではない。やるか、やらないかだ。

「うん、分かった」

「いい子だ。じゃ、手短に手順を教える」

敵の目の前とあって、さすがに長々と講義をしているわけにはいかない。本当に、レクチャーは手短だった。

「……分かった？」

「イエス、マスター！」

「言いだしつぺは僕だけど、いいね、その返事。では作戦開始だ」

ウィザードの与えた衝撃から、やっとのことで立ち直った鵜は再度、音波の弾を口から吐き出した。いつもならここから、発射して少し進んだところで散弾するのだが、

（少し様子が違う）

それは先ほどまでのとは少し違っており、初めの弾の大きさが若干小さい代わりに密度が増している感じた。

ぞわり、と背中を悪寒が走る。一樹はその悪寒に従うことにした。先ほどまで記憶に残っているタイミングよりずっと早く回避のアクションを始める。

「《ブレイズ》」

サラマンダーの力が身体を熱くする。まるで自分が火になったよ

うだ。体の熱に熱せられた一樹の周辺の空気が揺らめくのが見えた。

「《アンド・ミラージュ》！」

ゆらり、と一樹はここで一直線に鵜に向かっていった自分の進行方向を少し変える。

果たして早めのタイミングの回避は正解だった。一樹が進行方向を変えた直後、今自分がいたところを、“光線”が貫いた。

今度の攻撃は散弾ではなく、より明確に敵を狙い定めた音波のレーザーだったのだ。

《ブレイズ・アンド・ミラージュ》は、自分の体の熱で周りの空気を急速に温めることで発生する光の屈折による蜃気楼の現象を利用した技だ。

一樹は避けたただけだったが、向こうからは一樹を貫いた瞬間に一樹の姿が消えたように感じただろう。案の定、鵜は一瞬、一樹の姿を見失っているようだった。

複数の生物が混ざった醜悪な化け物を正面に見据える。そして、視線を外さないまま、一樹は背後でウィザードに守られるクラスメイトのことを意識した。

遙も、友人の明美がこの化け物に襲われたと知ったとき、ひどく狼狽していた。

そして、一樹も今、鵜に害されるのをとても恐れている。

柏木ときちんと会話をしたことはなかった。柏木も他の者と同じように、一樹と能動的に話したがらなかったし、一樹自身も避けていた。

自分が人に不幸をまき散らすなどという噂は否定しなかったが、事実として自分の周りでいろいろなことが起きているため、一樹と

しては人を傷つけないためにはとりあえず遠ざかるしかなかったからだ。

『だが、今は違うのだろうか？ 君が持っているのは“不幸をまき散らす力”じゃない』

「うん」

今は、知っている。周りで不可解な出来事を起こしてきたのはオーヴァードとしての力だ。きちんと制御できるようになれば、誰を不幸にすることもない。

『では、目の前の化け物に見せてやりたまえ。君が持っている“力”を』

先ほどのウィザードの攻撃で、もう鵜は二回目の攻撃をすることはできないようだった。鵜はじつくりと構え、一樹の攻撃を凌ぎ、次のチャンスが来るのを待っている。

「勝負だ」

一樹も鵜にきちんと相対し、落ち着いてレネゲイドの力を練り始める。

「《クロス・》……」

左手には冷気を、右手には炎を生み、それを目の前で合わせた。左手の氷が手の平の中の空気を局地的に極低温まで冷やし、右手の炎が一気に温度を超高温へと引き上げる。その温度差が生んだものは紫電を纏う、高圧縮エネルギー球だ。

一樹は手中に生まれたこのエネルギー球を目標、鵜に向ける。

「《アンド・バスター》——ッ！」

一樹はエネルギー球を突きだすと、それは光の奔流となって鵜に襲いかかった。鵜もその危険性を理解したのか対抗すべく、慌てて音波の弾を生み出したが、それは一樹の《クロス・アンド・バスター》の前にあっけなくかき消され、鵜は断末魔の怨嗟とともにエネルギーの奔流の中に飲み込まれる。

後には、何も残らなかった。

鵜のあの醜惡な姿は欠片も見当たらない。断末魔の声さえもどこからか聞こえる鈴虫の泣き声に紛れたまま聞こえなくなった。

思わず、後ろに控えていた師を振り返る。

鵜の最後の攻撃は、やはり柏木のほうに向かってしまったらしく、それを作戦通りにその身で守ったウィザードは、外套がボロ布に変わり、その下の背広も大穴があいて肌が露出してしまっていた。

彼は、すっと立ち上がると、その後ろに庇っていた柏木の姿を見せる。無論傷一つなかった。

顔が綻ぶのを感じた。ウィザードも口元に誇らしげな笑みを浮かべ、サムズアップを返す。

その時になって一樹は実感した。

——僕は、守ったんだ……！

鶴が倒れ、訪れた静寂が際立ったとき、戦いの間ずっと鶴の音が響いていたことに志波は気が付いた。体の傷より先に耳が聞こえなくなったのではないかと疑ってしまう。

やっと静寂になれた耳に、話し声が聞こえてきた。見ると、近くの木にもたれた上代が携帯電話で連絡を取っている。

「ああ……そうか。ん、ご苦労さん。あとで高橋君を向かわせる」

上代は電話を操作して通話を終了させると、視線に気が付いたのか志波に報告した。

「もう一匹の鶴は、ウィザードの方で始末したそうだ」

「たった一人でかよ」

こちらは、木島も加わっていたとはいえ、三人がかりでやっと倒せたくらいだったのだが。江間市最強のオーヴァードとはいえ、そう簡単にはいかないはずだ。

「いや、萱嶋もいたらしいね。止めを刺したのもアイツらしい」

「何であいつが……って考えりゃ、木島の目的はあの小僧だったな」

どちらかといえば、一樹は巻き込まれた方だったのだろう。それで鶴と出くわして、そこにウィザードが助太刀に入ったのだ。鶴はあまり足の速いほうではなさそうだし、逃げようと思えば逃げられたはずだが、そこは考えても仕方がない。

「あの、上代さん……」

完全に力を出し切ったのか、《完全獣化》が解けてしばらく息を整えていた遙が上代に話しかけた。

「鵜の被害者たちは……？」

「ああ、そういえば。木島のことに気を取られて忘れかけてたな」

もともと鵜を討伐する目的は、かの化け物に“魂を取られて”意識不明となっている被害者たちを救うためだった。調べた伝承どおりにことが運んでいれば、魂を取られて気を失っていた者達は回復するはずだった。

上代はもう一度携帯電話を操作した。南野あたりに連絡を取っているのだろう。

「……ああ、南野さん？ 上代だ。今、鵜の討伐が終わったよ。……うん、そっちのほうは変わらない？ ……そうか、うん。じゃあ、頼むわ」

そう言って、上代はパチリと携帯電話を閉じた。期待を込めて次の言葉を待っている遙から、少し目をそらしながら報告する。

「今、南野君に終わったことは知らせたから。もし、被害者のほうで変化があつたら知らせてくれるそうだ」

「……そうですか」

期待した情報を得られなかったからか、遙は少し肩を落とした。が、すぐに油断なくちらりとある場所に視線をうつす。

「彼は……？」

その視線の先に木島がうつぶせに倒れていた。志波の攻撃で半ば相打ちの形で倒れてから木島は動いていなかった。

志波は痛む体を押して、ほとんど這いずるように、血の海に倒れている木島に近づく。死亡したのか、失神しただけなのか、普通なら死んでいるはずの傷だが、オーヴァードだとそうは限らない。

だが、実はどちらでもなかった。

「くつくつくつく……」

うつぶせに倒れていた上体から一気に立ち上がった木島は夜空を仰いで大笑いをする。

「……アーツハツハツハッハ！」

「てめ……まだやる気か!？」

慌てて、志波はコンバットブレードを構えなおす。だが、木島は血まみれの顔に笑みを浮かべたまま動こうとしない。コンバットブレードの刃越しに、志波に視線を投げるだけだ。

「安心しろよ。今日はこれ以上やる気はねえさ。ほんの挨拶のつもりだったしな」

「ほー、あの化け物が挨拶の土産ってわけかい？」

皮肉げに感嘆の声を上げて、上代が聞き返す。

「……本当に分からないわ。あなたは何を、どうして、“オーヴァードの居場所を作る”つもりなの？」

「自分で考えな。ヒントは与えたつもりだ」

木島はクツクツと哄笑すると、傷だらけの体とは思えないくらい
の身の軽さで近くの木の枝まで飛び上がる。木島は逃げに長けたエ
グザイル（肉体変異能力者）だ。見た目に反して余力もあるようだ
し、もう満身創痍の志波たちに捕まえられないだろう。

「木島ッ！　一つだけ答える！」

志波の呼び止めに、生い茂った森の木々の中へと姿を消そうとし
ていた木島は肩越しに志波を振り返った。

「さっきの大笑いは一体何だ？　挨拶とやらが上手くいったからじ
やねえだろう？」

倒れている状態から起き上がった時の笑い。あれは、その後の話
の流れを並べると少し違和感を覚えるものだった。
それは足止めになりうるものだったらしく、木島は木の枝にどっ
かりと腰を下ろす。

「ああ、俺の個人的な心境の変化さ。俺は自分の“欲望”を分かっ
たつもりでいたんだが……、まだまだ俺は俺を理解し切れてなかつ
たらしい」

「望み？　そういえばお前、俺から離れた理由は自分が何を求めて
いるか気付いたからだとかぬかしてやがったな」

志波が木島の言動を覚えていたことが嬉しかったのか、木島は満
悦な表情で頷いて見せた。

「そういうこった。人間の欲つてのは奥が深え」

「それで……何を望んでる？」

「おいおい、『自分が何を望んでるか』っていうのは情報としては

有力なカードだぜ？　言って適うかわからねえのに簡単に切れるかよ」

聞きたいことはそれだけと判断したらしい。再び立ちあがると、
「他に質問は？」とでも言いたげな視線を一瞬だけ投げかける。

「これ以上話がねえなら行くぜ」

「待て、木島！」

再び去ろうとする木島をひきとめようと、再び話題を探る志波だったが、結局何も出てこなかった。

そんな志波に、木島は言い残す。

「安心しな、これで最後じゃねえ。また近いうちに“遊び”にくるからよ」

そう言って、木島は今度こそ森の闇の中に姿を消した。

再び、訪れる静寂。とたんに、忘れていたかのように夜風が吹き、ざわざわとその音のない空間を塗りつぶす。《ワーディング》を張っていた木島が去ったためだろう。

——また近いうちに“遊び”に来るからよ。

木島はそう言っていた。彼が何のために行動しているのか、何を望んでいるのか。結局何もわからないままだった。

だが、彼が来たことで出た被害は小さくない。

木島は志波の相棒である。

その気持ちはまだあるのだろう。木島の行動が及ぼした被害とに、志波は半分、自分が罪を犯したかのように責任感に駆られるのだっ

た。

「木島……来るなら来い。他のどこでもねえ、俺の所に向かって来いッ!」

その志波の叫びが木島の耳に届いたかどうか。それを知るのは、森のざわめきを運ぶ風だけだろう。

柏木圭太にとって、父親は弱かった。誰に対してもへつらい、意思を持って自分の主張を通す場面など見たことがない。相手に強く出られて結果的に損をした場面は、数えきれないくらいある。

だから、圭太は強くなろうと思った。心もそうだが、相手がある以上、肉体で強くあるにこしたことはない。そう思って、圭太は空手を始めたのだった。

柏木圭太にとって、萱嶋一樹とは“弱い人間”だった。不幸を振りまくだとか気味の悪い噂を流され、生徒はおろか教師にも、無視されている。本当なら、そんな悪い噂をばらまいている人間を呪ってやればいいし、違うなら違うと否定して堂々としていればいい。それをせず、いじめられ疎まれる立場に甘んじている萱嶋一樹はやはり弱く、近所から情けない人間として扱われている父親と重なって見えた。

だが、

——いろいろあって、今この時より！ 真っ向から否定させていただきます！

一樹のあの口上には驚いた。避けられるまま、疎まれるままにされてきた少年が、いきなり声を張り上げたのだ。あれは、圭太が一樹に対して感じていた弱さを一気に払拭するものだった。なぜ、今まで黙っていたのか。どうして、否定する気になったのか。クラスで一番関心を持ったのは自分だ、と圭太は確信している。

結局、一樹はその日授業中以外はどこかに行ってしまったので聞けずじまいだったが、明日こそ、聞いてやろうと決意を胸に秘め、空手部の部活をこなした後の帰り道。

そこで、圭太の記憶は途切れている。

圭太は軽い頭痛とともに目が覚め、瞬時にそこまで思い出した。ベッドに寝かされているのは分かったが、目に入った天井は自分の部屋のもので、以前部活で脳震盪のうしんどうを起こしたときに担ぎ込まれた保健室のそれでもない。

目に見える壁や天井は飾りは一切ない、シンプルな部屋だった。重い頭を動かしてベッドの周りの様子を伺うと、引越し直後のように段ボール箱がいくつか散乱している。

自分はおそらく何らかの理由で倒れてしまったらしい。それでこの家の人物に拾われた。というのが妥当だ。

だが、無視できない可能性として、意識を失ったのは眠らされたからで、自分は拉致されたのではないかという疑いもある。

（冷静になれ）

圭太は自分を戒めた。強い者ならここで取り乱さない。落ち着いて状況を分析するべきだからだ。

耳を済ませると、部屋の扉の外から足音が近づいてくるのを感じ取れた。スリッパを履いているらしい衣擦れにも似た足音は扉の前までやってくると扉が開く。

そこに現れたのは、

「あ、よかった、目を覚ましたんだね！」

お盆に、小さな鍋をのせて持ってきた萱嶋一樹だった。エプロンが妙に様になっている。

「萱嶋……、ここお前ん家か？」

「うん！ 買い物に行った帰りに、倒れてる柏木君を見つけてさ。家が近かったから」

説明する一樹の表情は、喜色満面という言葉がぴったりで、その笑顔には以前は欠片も見えなかった人懐こさがあふれている。

（いや、見ようとしなかった……のか？）

今朝のことを考えなければ、一樹は人嫌いか対人恐怖症だと思っていたが、本質はずっと社交的な性格だったらしい。

「そうか、萱嶋が助けてくれたんだな。……その、ありがとな」

幾分照れが混じったことを自覚しつつ、とりあえず礼をいう。そのとき、一樹はもともと嬉しそうだった顔がさらに明るくなり、若干顔も紅潮する。

「お、おいおい、どんな反応だ、それは」

「う、ううん！ ごめん。なんか、人にお礼とか言われたの、初めてだなと思ってさ。嬉しいやら照れるやらで。今、僕、タイヘンなことになって」

一樹はそれから緩みきった顔を直そうとひとしきり歪め回したが、しばらくすると元のように緩んでしまう。結局はあきらめたくしく持っていたお盆をベッドのそばの段ボール箱の上に置いた。

「お腹すいたでしょ？ おじや食べる？」

「お前が作ったのか？」

「まあね、慣れてるからこのくらい軽いよ。アサメシマエって奴だ

ね！」

「朝メシ前くらい普通に発音しろよ……」

一樹は、手際よく小鍋の中のおじやを小鉢に取り、スプーンですくうとふーふーと息をかけて覚まし、そのスプーンの先を圭太に向ける。

「はい、あーん」

「さすがに一人で食えるから！」

お盆を、半ば奪い取るようにして、一樹から受け取ると、圭太はおじやを口に含む。その一口で、自分が空腹であること思い出した。かつおダシのよく効いたおじやを味わっているうちに、小鍋の中身はすっかり無くなってしまった。

幾分物足りない気持ちで、空になった食器を一樹に返す。

「ごちそうさん。……その、うまかったよ」

「よかった」

照れ交じりに伝えた、圭太の言葉への一樹の反応も劇的に喜色に満ちたものだ。圭太からお盆を受け取った一樹は、立ち上がって部屋を出て行った。おそらく台所に食器を片付けに行くのだろう。

一樹はすぐに戻ってきた。

「お茶、飲む？ 番茶とほうじ茶があるよ。コーヒーか紅茶もできるけど」

「いいよ、お茶なんて。ご馳走になっちまったし、これ以上邪魔するのみな」

遠慮しようとする、一樹はじつと、圭太を見つめてきた。

その眼差しはどこかで見たことがあるが、胸の辺りでつかえて出てこない。

「僕としてはもう少し居てほしい、と思うんだけど……なあ。是非」
「うっ……」

思い出した。

構ってほしいときに見せる愛犬の円らな眼差しにそっくりだ――！

「わ、わかった。じゃあ、コーヒーを。ブラックでいい」

「了解。ちよっと待っててね」

ぱつと顔を輝かせて（それも遊びに応じたときの愛犬の反応とそっくりだった）、一樹がドアの向こうに再び姿を消す。

鼻歌が聞こえる。水前寺清子の『三百六十五歩のマーチ』だった。下手ではないが、選曲が古すぎる。

一樹の噂の中に、彼の所為で何度も家が火事になった、という噂があった。その所為で父親にも疎まれていて、とも。

一樹の所為かどうかは分からないが、火事になったことと、それが一樹のせいだと周囲が考えていることは事実だった。自分が一樹の立場なら間違いなく気まずくなるし、針の筵に座っているような気分になって、家にいらなくなるだろう。

それでも一樹は、自分のできることは一生懸命やったのだ。おじやが旨かったことや、配膳や片づけなどの一連の動作がやたら堂に入っていることから、それは伺えた。

「おまたせ」

一樹が再びお盆を持って登場した。コーヒーのかぐわしい匂いが鼻を突く。片方はブラックで、片方にはミルクが入っている。

「はい」

そう言っ、一樹はブラックの方をコーヒーソーサーごと圭太に渡した。圭太は、こぼさないようにそっと受け取ると、さっそく一口口をつける。

コーヒーの苦み走った味と、さっきまで鼻孔をくすぐっていた香りが口の中に広がる。

「……やたら旨いな」

「だよねー。トールさんが珈琲に凝ってるらしいんだ。探偵は珈琲へのこだわりが必要なんだって。それでこの家、コーヒーミルがあるんだよ。本格的なヤツ。でもトールさん、ブラック飲めないんだよね。いつもカフェオレにしてお砂糖4杯も入れちゃうんだ。意味ないよねー」

「そのトールさんって誰？ お前の親父さん？」

「うっん、昨日、いろいろあつて父さんとはしばらく別々に暮らすことになったんだよ。それで、今はちょっと縁あつてトールさんにお世話になってるんだ。トールさんは私立探偵なんだよ。なんかカツコイイよね」

あつけらかんとんでもないことを喋っている。圭太は話していることをのみこむのに集中するあまり、もう少しで珈琲を布団の上にこぼすところだった。

父親と離れた？

別の人に引き取られている？

「だから、今日からあんなにイメージ変わったのか……。突っ込んだこと聞くようでアレだけど、萱嶋は親父さんの事、嫌いだったのか？」

「うっん、好きだよ」

その答えは何の躊躇もなかった。まっすぐに柏木を見る目にはうるたえも動揺の色もなく、嘘をついている様子は見受けられなかった。

それどころか、若干照れた様子も見られる。

「柏木君も知ってるでしょ？ 僕が“不幸を呼ぶ男”だったってこと。そのせいで何度か家が火事になったことも」

「ああ、……あれは？」

「僕もよくわかってなくて、詳しいことは説明できないけど、あれは本当に僕のせいだったんだ。……と、誤解しないでよ。今では原因がわかってるから、もう今後は起こさないようにできるんだけどね。」

でも、父さんは、僕を疑いながらも、僕を突き放そうとしなかった。やっぱり僕の事をどこか怖がってはいいたと思う。でも僕をここまで育ててくれた。僕が父さんの立場だったら、そこまでできたかどうかわからない」

自分のカフェオレに口をつけながら、言葉を選んだ一樹の返答は、圭太が一樹に対して抱いたイメージよりずっとポジティブなものだった。

傍目には突然性格が変わったようにも見えたが、実は根本ではずっと明るい性格だったのかもしれない。

ここで、圭太は根本的な疑問をぶつけてみることにした。

「じゃあさ、何で今日になって『脱 不幸を呼ぶ男』なんだ？ 言われっぱなしで自分ばかり損をしてたんだよ？」

「分からなかったからだよ。僕の周りでいろいろあったけど、もちろん、僕はそれをやってないことは知ってた。それでも、あまりにもたくさんのが起きてたことは事実でさ。やってなくても僕が原因じゃないか、っていうのは考えたんだ」

「……………だから何も言わなかったのか？」

「うん。みんな僕を疑ってたし、僕じゃないっていう証明はなかなかできなかったしね。たった一つ分かったことは僕が関わらなきゃ、何も起こらないってことだったのさ」

「萱嶋……………」

合点はいった。同時に圭太は軽く眩暈を覚える。

（何てこった…………）

一樹は暗かったのではない。自分を押し殺していたのだ。言いたかったが、言わなかった。

友達になりたかったが、関わらなかった。

何故か？

——正体不明の“不幸”からみんなを守るためだった。

沸々と、怒りがこみ上げてきた。自分に対する怒りだ。皆からの蔑みに抗わない一樹を、泣き寝入りの弱者と決め付けていた。陰口をたたくクラスメイトに眉をひそめながら、一緒になつて一樹を蔑むことこそしなかったものの、圭太は結局皆の評判に流されて、一樹に関わらなかったのだ。

だが、違っていた、一樹はずっと戦っていたのだ。自らの“不幸

”と。誰にも頼らず、たった一人で。

(こいつのどこが弱いつてんだ……！)

じりりりりん。

昔の黒電話の呼び鈴を模した着信音が鳴った。圭太のは電子音なので、これは違う。見ると一樹があわてた様子で携帯を開き、不慣れな手つきで通話ボタンを押すと耳に当てた。

「もしもし？ あ、トールさん。うん、目を覚ましたよ。今ご飯食べてもらったところ。そっちはどう？　じゃあ、今日は……じゃあ、そっちに泊まるんだね。分かった。はい、おやすみなさい」

「さっき言ってた探偵？」

「うん。今日は……えーと、ハリコミするから帰らないんだって。大変だよ。探偵さんって」

またもたつきながら終了ボタンを押し、携帯を折りたたむ。

「連絡用に、って今日もらったんだ、コレ。ケータイなんて持ったことなかったから、うきうきしちゃうね」

「へえ。今まで持ってたのは今時珍しいな」

そういつて、圭太も枕元に置いてあった自分の携帯電話を取り出し、何気なくメールチェックなどする。なかなか帰ってこないことを心配したのか、母親から何件かメールと電話の着信があった。

その手元を見ていた一樹が、急にぱつと顔を輝かせる。

「うん、あ、そうだ。柏木君、アドレス交換しようよ！ いっぺんやってみたかったんだ」
「うっ……」

またしても子犬のような眼差しに抗いがたい圧力を感じる。

「ああ。別に構わないぜ。赤外線付いてるんだろ？ 俺から送るぞ」
「セキガイセンって何？」
「そこからかよ！」

その後、圭太は初めてアドレス交換をして、感極まった一樹の電話やメールの練習に一通り付き合うことになった。

柏木は、一樹に携帯電話の使い方を一通りレクチャーすると、もう十分歩けるから、といってシジマ探偵事務所を後にした。
彼が帰っていくのを玄関で見送った後、一樹は入浴と歯磨きを済ませ、先ほどまで柏木が寝ていたベッドにもぐりこむ。

だが、一向に眠気は来なかった。

『眠れないのかね？』
「ん……、今夜はもう無理かなあ」

柏木がいる間はずっと黙っていたモリトの問いに、一樹は苦笑いをして答えた。

『無理もあるまい。誰だって初陣のあとは高揚して眠れないものだ』
「……ああ、そう言えば、僕、初めて闘ったんだっけ、今夜」

『……まさか、忘れていたのか!?』

モリトの声は幾分あきれ混じりだ。あれだけ強烈な体験をしたのに、忘れてしまっていたとは。

「だって、その後、柏木君と話をするのに一杯一杯だったからね」

一樹は話をし慣れていない。友達などいなかったし、家でも父親とはろくに会話していなかった。

ここ数日はモリトと好きなだけ話せたが、はじめから一樹に対して好意的だったモリトに対し、今日の相手は今までずっと存在を無視されていたクラスメイトだった。

「……もう嬉しすぎるよ」

長年、ずっと苦しんできた問題が解決した。

離れて住むことになったとはいえ、少し父親と距離を縮められた。

“不幸”を呼んでくるはずだった力で、クラスメイトを守れた。

「それに、それに……友達ができた」

何もかもがうまくいく。

ウィザードに、力の制御を教えてもらいながら、今までずっと持ちたくてもてなかったものを手に入りたい。

分かった気がする。遙達が戦う理由。

彼女達を守る“日常”というものを。

遙は、UGN江間支部に戻ってからしばらくして、南野から明美の意識が戻ったという報告を受けた。医療スタッフとともに警察が事情聴取を行ったところ、明美は鵜に襲われる前後の記憶が飛んでいるらしい。

彼女は、今すぐにも顔を見に行きたかったが、深夜に駆けつけるのも不自然であるし、一日大事をとって安静に、ということなので、その夜の面会はあきらめたのだった。

その次の朝、校門の前で智子と遭遇した。智子は、遙の顔を見なり、顔をくしゃくしゃにして、その胸に顔をうずめ、大声で泣き崩れた

智子は、震える声で、明美が目を覚ましたことを報告する。どうやら今朝明美の両親から連絡を受けたらしい。

最初は平静を装い、智子の頭や背中を撫でていた遙だったが、不意に目の奥が熱くなり、何かがこみ上げてくる。

そこからは堰を切ったように涙があふれ始め、嗚咽が混じり始めた。しがみつくように腕を回してくる智子を改めて抱きしめ、校門で他の生徒が大勢通り過ぎるのにも構わず、大声で泣き散らす。

「よかった……。本当によかった……！」

「うん、うん……！」

本当は、——泣くつもりなどこれっぽっちもなかったのに。

「きりーっ」

その日の放課後、ホームルームの終了を告げるベルがなるや否や、クラス委員長の「礼」の号令も待たずに遙と智子は教室を飛び出した。

「なんだ……あいつら？ 沢田はともかく城崎まで」

部活に行こうと空手着に手をかけた柏木圭太がどたばたと二人が去って行った扉に目をやりながら言った。

ちょうど柏木の目の前の席だった一樹がその呟きを拾って言った。

「いいねえ。青春だねえ。若人はああやって今この時を駆けていくもののさ」

「お前何歳のつもりだよ……。あいつら同級生だぞ」

その時、一樹が筆箱にしまおうとしていたシャープペンシルが、こぼれて床に転がった。ちょうど足元に來た柏木はそれを拾って、一樹に渡す。

「ほらよ」

一樹は、それを一瞬凝視したかと思うと、またとろけそうな笑顔を浮かべて受け取った。

「……ありがとう」

少しフライング気味な気がしたが、あれ以上待てなかった。優等生で通っている遙だったが、別に怒られようが内申を削られようが

まったく構わなかった。そんな覚悟が決まっているなら、授業などサボってしまえばいいと今後悔しているくらいだ。

普通の人間ではない遥には、この程度の走りは歩いているのと同じ変わらない。しかし後ろを走る智子の息が切れているのは感じた。でも足は止めない。きっと智子も同じ気持ちだろう。

このまま智子を抱えてオーヴァード能力全開で走ってみたい衝動に駆られたが、それはさすがに自重した。

公共施設が密集している江間市の北西部、江間西町から町を南北に突き抜ける江間商店街へ出る。そこから南へまっすぐに行くと町の中心部である駅に突き当たるのだが、その駅前にこの町で唯一の病院である江間医院に到着する。

学校と同じくらい広い敷地に、4階建ての病棟が幾つか並んでいる。外観は古く、壁は煤けて見えたが、最近、内装は新しくしたらしい。中に入ると、暖色系の真新しい塗装の壁と明るい照明が自動ドアをくぐった遥たちを迎えた。

何人かの患者が診察待ち、あるいは薬の処方待ちで受付前の長椅子で座っているのを尻目に、遥と智子はやや小走りで受付に駆け寄り、明美の病室を聞いた。

案内された部屋は事件性も疑われたためか、個室だった。実のところ、オーヴァード関連の事件に巻き込まれたためである。個室をあてがう費用などはUGNから出されているはずだった。

こんにちは、とノックをする。

「はい」

女子にしては少し低いハスキーボイス。間違いない明美の声だ。

引き戸になっっている扉を開けると、ラジオを聞いていたのか、そこから伸びるイヤホンを耳から抜いている明美の姿があった。

「明美……！　よかった、ホントに無事だったんだね！」

智子とともに遙は明美に駆け寄った。その存在を確かめるように、抱きしめあう。

「ごめんねー。何か心配かけちゃったみたいで」

「鵠に魂をとられちゃったのかと思ったよお……！」

「あー、なんかそんな噂が立ってるみたいだね。あたしとしては買物帰りに気を失って、起きたら病院だった感じなんだけど」

気を失った経緯は憶えていないらしい。まあ、覚えていてもUGNの記憶処理部隊が、すぐさま記憶を抹消するか、幻覚をみたという結論を出して誤魔化すかをしていただろう。

遙としては無事ならどうでもいい。

「ところで……」

不意に明美が話題を変えた。

「あんたたち、……お見舞いは？」

「え」

「無いわー。明日をも知れぬ親友を見舞いにきといて手土産のひとつも無いとは」

「あきれた。わたし、お見舞いを要求する入院患者って初めて見たわ。しかも明日をも知れぬって『明日退院するかも知れぬ』って話じゃないの」

腰に手を当てて、ため息を付いてみせる遙だったが、明美の心情はよく分かった。要するに照れくさいのだ。だからこの場をいつものように和ませるように、おどけて見せたのだ。

「そつちこそ、ここはお見舞いに来た親友に大して果物を振舞うなりしてもいいじゃん。見舞いの王様、果物の盛り合わせはどこデスカー!?」

「長期入院じゃあるまいし、しかも昨日の今日で果物の盛り合わせが持ち込まれるかー!」

「これこれ、二人とも。ここ、病院なんだから静かにしなさい」

個室ではあるが、響きそうな声でいつもの掛け合いを始めた二人を遙が嗜める^{たしな}。

「でもさ、なんか明美の顔見てたらお腹すいちゃったね」

「それなら売店にさ、あったかいカイコ焼き売られてるよ」

カイコ焼きは、養蚕業、紡績業を打ち出す江間市が打っている銘菓である。タイコ焼きとも呼ばれる大判焼きの亜種で、蚕の繭の形をしている。観光客はあまりこないが、江間市の子供たちには定番のお菓子だ。

「カイコ焼き! それいい! あたし、買つて来るね!」

そういつてこらえきれない様子で、智子は飛び出してしまった。

「まったく、食いしん坊なんだから」

智子は女の子としてはよく食べる。弁当も同級生の男子たちより、

さらに一回り大きいものを持参しており、鞆の中にはお菓子がたくさん入っていたりする。実は、教科書など入っていないのではないかともしばらの噂だった。

「昨日は、智子、何も食べてなかったの。急にお腹すいたのも明美に会えて食欲が戻ってきたからよ」

「……ひよつとしてアタシも食べてないからとか言ってた？」

遥は目を丸くした。まったくその通りだったからだ。お昼に誘っても「要らない。だって明美も食べてないんだから」と答えたのである。

「やっぱね。前もあったのよ。同じようなこと」

「……ちよつと行き過ぎなきもしないわけではないけど、あんた達がちよつと羨ましいわ」

「羨ましい？ 遥も一緒でしょ？」

「う、」

前述の通り、明美と智子は幼馴染同士だ。高校になって2人が遥を気に入って、いろいろ誘われるうちに3人になった。傍から見れば3人組だが、少し付き合えば2人+遥であることに気が付くだろう。遥も何となく、近くで2人を見つつ時々横槍を入れるような、ある程度の線引きがある付き合い方をしていたのだ。

3人の間で、そんな話が出たことはないし、遥も意識してしないようにしていた。よって、今の遥の発言は失言に近いものがある。

明美は少し表情を硬くしてちろりと遥を見上げる。責める意図がないとも言いきれない目だった。

しかし、そこから明美はふつと笑った。

「……なんてね。知ってたわよ。あたしら二人と遥の間に軽く壁があることくらい。それが悪いとも思わないし」

「そ、そう？」

「だって、あたしだって智子への態度と遥への態度は違うでしょ？ あたしらはほとんど生まれたときから一緒だったからさ。高校から知った人は、とてもじゃないけど同じには扱えないよ。……だからって遥があたしにとって大事な友達なのは変わらない」

「……智子？」

「きつと遥が倒れたらやっぱり智子は泣いて絶食すると思うし、あたしもできる限りのことはする。遥も同じでしょ？」

「……うん」

明美を失うかもしれない、と思った時の絶望感は想像を絶するものだった。

今までのオーヴァードとしての戦いは、ただ、自分の“居場所”を守るための戦いだった。明美や智子と過ごす日常。それを壊さないための戦い。

でも今回の鶴との戦いは違う。自分のすべてをかなぐり捨てても、失われつつある明美を取り戻すための戦いだった。そのためになら——日常を捨ててもいいと思えるほどに。

一線を引いていたつもりがいつの間にか、かけがえがないと思えるくらいまで深く想ってしまっていたらしい。

照れくさいのか明美は少し顔を赤くして言った。

「まあ、柄にもなく説教ぶっちゃったけどさ。とりあえず、要はあたし等は遥のことが大好きってこと」

「うん、わたしも。あんたたちのこと、大好きよ」

心がくすぐつたい。

大切だと、大好きだと確認しあえる関係——これが、遥が日常に
得た絆。

明るいい差しが照らすオフィス。だがその室内にひとつだけ設えられた執務机の前に人はない。

「支部長、支部長!？」

いるはずの部屋の主を呼びながら南野が駆け込んできた。扉の正面にある執務机が空なのをみて目の端が釣りあがる。

「どこに——」

どこに行ったのか、自問をする前に答えが帰ってきた。

答えといっても^{いびき}黙である。見ると、応接用のソファの上にスーツ姿のまま上代が寝転がっていた。

「……………」

南野は無言でドカッとソファを蹴りつける。

「うおっ……!？ ……ん。なんだ南野さんか」

「なんだ、じゃないでしょう。報告書はできたんですか」

「いやあ、アイデアに詰まって夢の世界に取材しに行こうとしてた」
「アンタの報告書はフィクションか!？」

南野は横になったままあくびをして、再び寝付こうとする上司の腕を取り、無理やり引っ張り起こす。

「報告書はもうちょっとだけ待ってよ。何しろ昨日は大立ち回りだ

「つたんだし」

「その言い分を認めるのにやぶさかではありませんが、私が来たのは報告書の件じゃないんです。支部長にお電話でして」

「誰？ こんな時間に無粋な人だな」

「今は真昼間です。全国の80パーセントの大人は真つ当に働いてます」

いちいち切り返してくる部下を、恨めしげに見つつ、上代は寝ぼけ眼であくびをして、こきこきと首を鳴らしながら立ち上がり、執務机に腰掛ける。

「で、誰だつて？」

「霧谷さんからですよ」

“リヴァイアサン” きりたに・ゆうじ 霧谷雄吾。

肩書きはUGNの日本支部長である。日本中のUGNの支部を統括する責任者——ありていに言えば「UGN中、日本で一番エライ人」である。

前線に出てくることはほとんどないので本気の戦闘能力は未知数であるが、交渉能力は高く、各地で起こるオーヴァード関連の事件に対して、財政界や公共機関に働きかけ、協力を取り付ける手腕に関してはUGN関係者は一致して認めている。

「お休みのところを申し訳ありません」

デイルプレイ内に移る上代と同年代、あるいはそれより下に見える男、霧谷から話しかけてきた。UGN内のホットラインはテレビ電話となっており、パソコンの画面で面をつき合わせて会話することができなのだ。

「いいえ。お気になさらず」

「しかし、職務時間です。休まれるなら休まれるで有給申請を行うようにして下さいね」

このように柔和な風貌と丁寧な物腰で、末端の構成員からもタメ口をたたかれる霧谷ではあるが、さすがに組織のトップを張っているのは伊達ではなく言うべきことは言う。ただ、丁寧な物腰だけでは、UGNの日本支部はとっくの昔に崩壊していただろう。

「それで、今回の御用とは？」

上代は南野が淹れてくれた緑茶をすすりながら、霧谷に先を促した。

「報告書に付いて質問がありました」

「報告書？」

まだ提出していないのに何故と問おうとして、鵜の事件の前に出したシーレムビルの事件に関する報告書のことだと思い当たった。

「木島と大量発生したジャームとのことですが、『江間支部より“アクエリアス”“ブランドラグーン”、外部より“ブレイクスルー”“ウィザード”他一名の協力によりFH構成員と見られる一名を除いて殲滅』とありますが——この『他一名』とは誰のことです？」

霧谷が疑問に思うのは無理もない。UGNは各支部に、その管轄内の把握しうる限りのオーヴァードの情報を報告させている。それがオーヴァードがらみの事件が起こったときに大きく役立つからだ。そして江間支部の管轄である江間市内のUGN外部では“ブレイクスルー”志波徹と姓名不詳の“ウィザード”しかオーヴァードは

いないはずであった。

「ああ、霧谷さんならそれを拾ってくれると思ってたんですよ。報告書という形でなくオフレコで報告したいと思いましてね」

「どういことですか？」

「その『他一名』なのですが、今回覚醒した——正確に言うとう覚醒は前からしてたのですが、オーヴァードとしての能力を表に出したのが今回初めての少年なんですよ。で、この少年にどうやらレネゲイドビーイングが憑いている疑いがある」

「レネゲイドビーイングが憑いている……」。デュアルフェイス 戦闘用人格ではなくてですか？」

前述の通り、突然人格が変わり、戦闘能力が強化されるという点など、戦闘用人格と、協力型レネゲイドビーイングには共通項が多く、大変見分けづらい。

ただ、レネゲイドビーイングはごく最近にやっと発見された存在だ。ゆえにあっさり報告書に書いてよいか迷うところだった。

「その可能性は捨ててません。ですから“疑いがある”といったんです。その報告書にも添付している資料の通り、今回の事件がおきたシーレムビルは立ち入ると浸食率が跳ね上がるので調査できてませんのでね、ハッキリ言えませんが“銀なる石”が関わっている——かもしれないという意見もあります。つまり——」

「あの現象に詳しいスタッフをよこせということですね？」

「ご明察」

“銀なる石”事件はすでに終わってしまったこととはいえ、一歩間違えば大量の人間の命をみすみす失う大惨事になる危険があった。再発の予防と、万が一のときの対抗策のために研究チームは組まれているに違いない、と上代は読んでいたのだ。

「そろそろ、研究の材料も尽きて手詰まりになっているところですよ？ 的外れかもしれないけど、調べてみてそちらとしても損はないと思うんですがね」

「分かりました。人員を割けるよう、調整してみましよう」

そこで、霧谷にまた別の回線から連絡が入ったらしい。「それではそういうことで、失礼します」と、短く挨拶をすると、ディスプレイから霧谷の姿が消える。

（これで、シーレムビルの件についてはボールを投げた形だな）

通信が終わったあと、上代は煙草をくわえると手馴れた動作で火をつけた。煙をゆっくりと大きく吸い、吐く。

（あと考えなければならないのは何だ）

口から吐かれた煙が視界を昇っていくのと連動し、上代の脳裏に疑問点が浮き上がる。

木島は何のために江間市に現れたのか？

鶴の事件で彼は何をしたのか？ 結局、何がしたかったのか？

一樹に憑いている“モリト”とは何者なのか？

今回の一連の事件に対するパズルのピースはいくつも見つかる。

だが、そのどれもがつかまらない。まるで、そのピースが描く絵が何なのかが見えてこない。

木島が何らかの鍵を持っていることだけは確かで、結局ピース同士が一枚の絵のものなのかも分からないのだ。

「何か置いてけぼりにされてる気分だな」
「先手を取られやすい状況ですね」

南野の言うとおり、何が起るか、何が出てくるか分からない状況、今回はなんとか撃退したが、今のイニシアティブは木島側に完全に握られている。

常に緊張を強いられる日々はそれだけで体力を削られる。

戦いの始まりとはこんなものなのかもしれない。

神社の裏手にある倉庫の、上代家の記録を思い出しながら感じた代々、上代家は、神の力を受け継ぎ、魑魅魍魎から江間の地を守ってきた退魔の家系なのだという。

江間にはどういうわけか、怪異の類には事欠かなかったらしい。倉庫には記録された書物がずらりと並べてあった。

自分にも来たのかもしれない。

——あの書物に、自分の戦いの記録を付け足すときが。

(ダブルクロス・ノベル・ロア 第1話 混乱を紡ぐ獣の呪歌 了
ダブルクロス・ノベル・ロア 第2話

へ続く)

ご愛読ありがとうございます。

第二話は執筆中なので、しばらく連載はお休みさせていただきます。

第一話のネタバレあとがきやなどはアップするかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5060q/>

ダブルクロス・ノベル・ロア

2011年10月8日15時23分発行